
ノブ、知ってたん？

奈備 光

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ノブ、知ってたん？

【Nコード】

N7958J

【作者名】

奈備 光

【あらすじ】

マドンナ的存在だった朱里が死んだ。

彼女にほのかな思いを寄せていた仲間の男達。忘れじの女性の死の謎を巡るミステリーは同時に、ことさら青い、そしておぼろな青春時代を共にすごしたもののたちの群像劇でもある。

設計事務所を営む生駒延治の高校時代の同級生朱里が、大峰山中で飛び降り自殺をした。パソコンに残された遺書にはひとりの男の名が。友人である生駒は彼女の自殺に疑問を持ち、仲間の弁護士や恋人の優と、真相を確かめる活動を始める。

生駒は自分や朱里がかつて一緒に勤めた設計事務所の退職者の仲間達に目をつけ、ヒアリングを始める。推理は身近なところからというわけだ。結果として朱里を巡る人間関係に思いをめぐらせることになり、彼女に恋していた自身の淡い青春の思い出を呼び起こす。

建築家生駒延治と自称歌手のプータロー三条優がコンビを組む長編ミステリーシリーズ¹。

（シリーズ物ですが、当然のことながら1からお読みくださる必要はありません）

プロローグ

「ユウ、ホットケーキ、食いに行こか」

優は生返事をしたまま、モニターに映し出された文字の多いペー
ジを読んでいる。

「このミステリー、出だしがねえ、いまいち」

英国風景庭園ミステリー 「水霊の巫女」

ユーアイ

ランタンの淡い光が足元をわずかに照らした。歩みとともに、
地下通路のごつごつした石肌に複雑な形の影が揺れる。ゴウゴウと
音がこだまして、近くに水の流れがあることを知らせている。

少年は心細くなつて振り返る。通ってきたばかりの細い通路は既
に一面の闇に包まれ、遺跡の薄暗い広間はすでに見えない。

「ロン。大丈夫？」

「はい！ お嬢様！」

「また、他人の投稿作品に文句つけて。いっぺんくらい自分で書い
てみたらどうや」

「ヘン！ 書く趣味はなし」

「ふん。さ、行こ」

生駒は窓に顔を近づけて日差しの強さを確かめた。正面に見える
超高層ビルの外壁に、夏の太陽が反射して眩しい。

ビルを覆うカーテンウォールのガラスに、実際よりも濃い青空が
映っている。

ガラスが一枚ずつわずかに傾いているのか、映り込んでいる薄い
雲が、モザイクのようだ。

近くにそのビルができてからは、アネックス棟の一階にある喫茶店「Pフラット」で、優とブランチ代わりのホットケーキを食うのが生駒なりの休日の寛ぎ方になっていた。

緑に囲まれたオーブンカフェでは、平日ならプロムナードを行き交う人たち眺めることができるが、生駒と優が訪れる土曜や日曜日は閑散としていて、それはそれでのんびりと落ち着いた時間を過ごすことができる。時折、近所の少年達がスケートボードで通りすぎるだけだ。

齢五十の、腹だけ中年太りの男がホットケーキを食うのは、優に言わせると、自然体でいい感じということになる。

しかし生駒の方は、オフのときに体裁を気にするつもりはないし、ガールフレンドのそんな反応を期待してのことでもない。子供のように母親がフライパンで作ってくれた固い蒸しパンのような代物ではなく、喫茶店のふつくらとしたホットケーキに憧れた記憶を単にもてあそんでいるだけのこともかもしれない。

じゃ、行こうかと優が腰を上げたとき、電話が鳴った。

「出るな！」

優の手はすでに受話器を上げていた。

「はい。モノ・ファクトリーです。……はい、生駒ですね。代わります」

事務所に架かってきた電話には出るなといっても、優はいつもおもしろがって手を伸ばす。

夜遅い時刻の電話には、主人は……などと言いつくすのではないかと気が気でない。

「警察から。なんかしたん？」

警察が何の用だ、俺は優良ドライバーだぞ、と多くの人が示す反応と同じように、生駒は警察と聞いただけで慎重な声になった。

「はい」

「生駒延治さんですか。河内警察署の西畑というものですが、突然ですみません。少しお聞きしたいことがあります、そちらに伺いたいんですが、今からお時間はよろしいですか」

「はあ……、かまいませんけど」

ホットケーキを食ってから、とはさすがに言えない。

「それじゃあ、すぐにまいりますから」

と、相手は電話を切ってしまった。

西畑という男の、少しくだけたようなものの言い方と、ぶしつけにさえ聞こえる快活な声色に、生駒はかすかな苛立ちを覚えた。

「なんやて？」

「さあ。聞きたいことがあるらしい」

「ふーん、事情聴取か。楽しみやね。ハハッ、顔がこわばってる。

初めて？」

「当たり前やろ」

生駒の顔に出た不安をおもしろがって、優がニヤニヤしている。

「いつ来るん？」

「今から。失礼なやつ」

失礼かどうかは来てからわかるやん、と生駒の胸を突つき、エアコンのスイッチを入れた。

「テープレコーダでも用意しとこうか」

「あほか」

チャイムが鳴った。もう来た。西畑はマンションの下から電話してきたのだ。エントランスにオートロックがないと、どんな客でもすぐに玄関まで直接来てしまう。

快活な声の印象とは違って、西畑はのそりとした風采の男だった。四角い顔にふさわしい大きな目が、どことなくかわいらしい印象。しかし、警察手帳を見せるとはこのようにするのだというようにひよいと差し出し、うむを言わさぬ態度で玄関の中まで入ってくる。

手帳をじっくり見る間もなく、どうぞお入りください、と優が招き入れてしまった。

「どうも。えっと、靴は……」

どうぞそのまま、と優が颯爽と先にたって中に案内する。

生駒の事務所は、玄関を入るとすぐに作業室兼打ち合わせ室である。心理的な結界として大きなガジュマルの鉢植えを目隠し代わりにしているだけだ。

生駒は西畑のスーツの背中についていきながら、悟られないように深呼吸をした。

1 反発

お休みのところ申し訳ない。モノ・ファクトリーというのは生駒さんがやっておられる会社ですか。へえ、おひとりで建築設計事務所を。個人住宅が中心ですか。なるほどマンションなども。なかなかセンスと忍耐力がいる仕事ですね。しかし、いまどきは建設業界も大変でしょう。それにしても今日はいい天気で。

などと、刑事はとりあえずの世間話を仕掛けてくる。

「奥様ですか？」

と、若葉色の暖簾を見やる。

必要最小限の広さしかない独立タイプのキッチンから、優がコーヒークップをソーサーに置くカチリという音が聞こえた。

どうみても二十代後半の優。

奥様ですか、とわざわざ聞いた西畑の疑問は自然なものなのだろう。

「いえ」

生駒のかたくなな反応にも無頓着に微笑みながら、まだ暖簾に目をやっている。

「ご用件を伺いたいのですが」

刑事はようやく視線を戻し、今日おじやましたのは、と切り出した。

「中道朱里という女性、ご存知だと思いますが」

「なかみち？」

「中の道に、朱里エイコの朱里と書いてジュリと読みます。高校のときの同級生だそうですね」

西畑はにこやかだ。

一拍の間をおいて、はあ、知ってはいますけど、と生駒。

キッチンを出てきた優の目からは好奇心がほとばしっていた。

西畑にコーヒを勧めてから、同席していいかと聞こうともせず生駒の横に座った。

西畑は、どうも、とカップに手を伸ばし、湯気を吸い込んで熱さを確かめ、口をつけずに皿に戻した。そして深く座り直すと、笑みを消し、静かな声で告げた。

「お亡くなりになりました」

「えっ」

西脇のゴロンとした目が生駒を見つめていた。

「あの、どういうことでしょう。なにか、私に……。いや、いつですか。事故？」

落ち着き払った西脇の声が湯気の向うから流れてくる。

「一昨日、発見されました。いつお亡くなりになったのか、まだ確かなことはわかっていません」

発見？ 確かなこと？

「中道朱里さんのことを、どんなことでも結構ですから、話していただけませんか。最近の様子とか、誰かに聞いた話とか」

「はあ、そう言われても……」

「最近、会われたことはありませんか」

優の視線を感じる。生駒はフウツと息を吐き出した。

「ひと月ほど前に……」

警察官に根掘り葉掘り問いただされたくはない、という気持ちが入調に出ていた。

「どういう用件で？」

「どうって、彼女が独立するということで、相談にのって欲しいと」
生駒があらましを洩々話し終わると、西畑は気が済んだのか、なるほどそういうことでしたか、と微妙な笑みを見せ、寛いだように浅く座り直した。

「プライベートなことをお聞きしてすみませんでした。実のことを言いますと、中道さんは奈良の大峰山の山中で自殺されたようなんです」

「自殺……」

「まだ断定はしていないんですが、崖から飛び降りたと考えられます」

「朱里が……」

西畑が一拍の間をおいて、生駒を見やってから付け加えた。

「遺体が発見されたとき、まず事故の可能性を考えました。ですが、中道さんのお住まいから遺書が見つかりましてねえ」

「はあ」

「で、今は、自殺で間違いなかつと」

「……」

「ところがご家族の方は、理由がわからないとおっしゃられるんですね。まあ、親御さんは、そう言われるもんです。それを調べるのも我々の仕事でしてね。で、生駒さんがなにかご存知じゃないかと考えたわけです。くだいようですが、そういった事情ですので、お心当たりやお気づきになったことがないか、もう一度思い出していただけませんか」

いつのまにか耳が熱くなっていた。西畑がたたみかけてくる。

「いかがです？」

「いや、そういわれても……」

「そうですか。生駒さんなら、てっきりなにかご存知だろうと思っただけですねえ」

「は？ それほど親しいわけじゃ……」

「そうですね。中道さんの遺書に、おたくさんの名前があつたんですけどねえ」

「えっ！ 私の名前が」

西畑のごろんとした目に見据えられて、生駒は思わず視線を避け

た。

「そつ、そうなんですか。 なっ、なんと書いてあったんですか」

「ま、お礼ですな」

「お礼……？」

西畑はスツと視線をコーヒーカップに落とした。

「では、ということですので、改めていくつか質問をさせていただきます」

しばらくの間、刑事の問いかけに対して、生駒は知らないと繰り返すことになった。

玄関ドアが閉まると、優は早速、聞きたいことだらけという顔になった。

しかし、生駒が冷たくなったコーヒーを黙ってかき回すのを見て、ブラインドを上げて窓を少し開くと、自分のカップにコーヒーを注ぎ足した。

生駒は思考に浮遊感を感じた。

朱里が飛び降り自殺……。

目の前の壁に、A4版の写真がピンで留めてある。
彼女からのメールに添付されていた画像をプリントアウトしたもの。

料理屋の座敷。十人ほどの人物が写っている。中年男女の集団。
誰の顔も、飲んではしゃいだ後のさっぱりした赤い顔。トロンとした顔のやつもいるが、前列に並んで座っている生駒と中道朱里は朗らかに笑っていた。

ひと月前にこの写真を貼りつけたときのこと、朱里が事務所に来た日のことが思い出された。
残りのコーヒーを一息に飲んだ。

彼女が自殺したという実感は沸かなかった。警察官に自分の日常を問いただされたことに対する苛立ちや不安感ももうなかった。

優はなにもいわずに朝刊を読んでいたが、それをバサリと閉じると、屈託ない笑顔をみせた。

「Pフラットに行こうか。コーヒー、もう飲んじやっただけだね」

2 ためらい

告別式は中道朱里がひとりで行っていたマンションの近くで行われた。

JR学研都市線の住道駅すみのちから南へ十分ほど。民家や小さな工場が集まる下町。スーパーマーケットなどの集積もあって、沿線では暮らしやすい町だといわれている。

開式間際に着くと、すでに見知った顔が児童公園に併設された集会所の脇に集まっていた。

錆びた鉄棒に、一匹のツクツクボウシ。

夏の名残の音が響く中、読経が始まった。生駒たちは小さな建物に入ることをためらい、外に並んで立った。

汗が下着の中を流れていくことに耐えながら立ち尽くす。そんな男達を、遺影となった朱里が微笑みながら見つめていた。

エアコンの冷たい風が、生駒の肉の落ちた胸や薄くなった頭に貼りついた汗を気化させ、熱を奪っていく。

「今日はなんだか、このあいだの続きみたいだな」

苦行のような式が終わって出棺も済み、親族達がマイクロバスに乗って行ってしまうと、生駒たちはたまらず手近な喫茶店に飛び込んだのだ。

このあいだの続きという言い方に、楽しんでいるニュアンスがあると思ったのか、竹見沢がすぐに言葉を続ける。

「警察が僕のところに来たぞ」

式に参列した知人連中は、生駒の他に竹見沢憲一、赤石剛志、蛇草真治、弓削俊美、佐藤健の男ばかり六人だ。

コナラ会メンバーである。コナラ会とはアーバプランという建築設計事務所を退職した者達の同窓会の名である。生駒の命名だ。由

来は、北摂の植生調査で山の中を歩き回りながら退職を決意したからというもの。さすがにドングリ会というわけにはいかないだろう、というだけのことだった。

告別式に出席した全員が、警察から事情聴取を受けていた。

いつものように幹事役の竹見沢が、恰幅のよさを押し出して話題をリードする。退職後は大学講師に転向し、今や教授となった出世頭のひとりである。

「自殺だとはまだ断定できないらしい」

「いったいぜんたい、朱里はどうしたっていうんやろ」
蛇草が首を捻った。

小さな塾の講師をしている割に声が細い男だ。竹見沢と並んでコナラ会の年長者グループだが、相変わらず喉仏の辺りに剃り残しの髭があつて、それがこの男を貧相に見せていた。

「彼女になにがあつたんや」

問いに応える者はいない。

佐藤が朱里との思い出を話し始めた。

告別式の後の無難な話題……。

生駒は西畑刑事の訪問を受けてからというものの、思い悩んでいた。朱里が事務所に来たとき、彼女の言葉の中にも表情にも、自殺を示唆するような影はなかった……。

話していたようには、新しい事業はうまくいっていなかったのだろうか。

あるいは、最近になって急に死ぬ気になるような、とんでもないことが起きたとでもいうのだろうか。

人が普段考えたり感じたりしていることなど、オセロのように、なにかの拍子に捉え方が百八十度変わってしまうものなのかもしれない。

あの日朱里は、今できることをしなかったら、明日になればおさらできないわ、だから私は今、挑戦するのよ、そう言っていたのに。

そもそも、なぜ急に会おうと言ってきたのだろう。

アドバイスが欲しいと言っていたが、仕事ではない別の意味があったのだろうか。それとも、死を意識して、その前に友達に会おうとしたのだろうか。

生駒は見当がつかなかった。

朱里が訪ねてきた夜、料理屋から支払いを済ませて出てきた生駒に、朱里は今日は払うわね、と一万円札を差し出した。

彼女が向かう大阪駅への地下道はすぐ近く。生駒の事務所とは反対の方向。

平日でも夜十時を回ると、超高層ビルのプロムナードには人通りはほとんどなくなる。

地下道の手前の横断歩道はすでに点滅信号になっていて、ずっと赤いままだ。

ビルの照明は消え、黒い塊となって月明かりを遮っていた。

プロムナードにはオリジナルデザインの照明柱が並び、低い位置から流すような光でペイブメントを照らしている。

規則的な白い光の帯模様の中を歩くのは、ライトアップされているように照れくさい。

生駒は酔っていた。こみ上げてくる感傷を断ち切ることに努力しながら、朱里が財布をバッグに入れるのを黙って見つめていた。

パチンというバツクルの音を合図に、生駒は地下道に向かって歩き出した。一瞬の迷いもなかったかのように。

朱里が生駒の手を取った。その手は温かく、少し汗ばんでいた。

生駒は、大阪駅まで送っていくよ、地下道は物騒だから、と心の中で言った。

信号が珍しく青になった。ひとりの男が渡っていく。急げば間に合う。

朱里の手に軽く力が入ったことを感じた。いい香りのする長い髪が生駒の腕に触れた。

ふたりはゆっくりと歩いていった。

信号が変わり、ふたりは立ち止まった。

車は来ない。

生真面目にボタンを押す必要はない。

生駒は朱里に顔を向けた。朱里も顔を上げた。

知り合って三十数年。これまで、このような場面で、このような思いで、彼女の目を覗き込んだことはなかった。瞳に信号機の赤い光が映り込んでいた。

青みが入ったシルバーのアイシャドウ。胸のふくらみが生駒の体に触れている。

生駒はポケットに突っ込んでいたほうの手を出した。

朱里の唇がかすかに動く。

風を感じた。

朱里はにこりとして、今日はどうもありがとう、といった。

生駒はコンマ数秒の躊躇がなにかを逃がしたことを知った。体が離れ、手が離れた。

指の隙間から乾いた砂がこぼれ落ちるように。

朱里は、じゃあまた、近いうちに連絡するわ、と背を向けた。

一瞬前まで生駒の手の中にあった手をちよこつと振って、横断歩

道を小走りに渡っていった。

そんなささやかな出来事が、忘れようにも忘れられないちっぽけな思い出のひとつとして記憶されることになるとは、そのときは思ってもみなかった。

3 黒いワンピース

強烈な冷房のおかげで汗は完全に引き、冷たくなったシャツが背中
中に貼り付いていた。

佐藤健がまだ、朱里の思い出話を、竹見沢になかば煽られるよう
に話している。

蛇草がふたりの話を遮った。

「おい、もうちょっと小さな声で話せよ。他のお客に聞こえてるぞ」
首をすくめた佐藤は、表向きはファイナンシャルプランナーとし
て講師業などをしているが、実のところはデイトレーダーである。
コナラ会メンバーの中で最も収入が多いはずだ。鍛えられた引き締
まった体を持っている。

その肩越しに女性の姿があつた。

「すみません。変なことを噂して。お気を悪くされたのではないで
しょうか」

竹見沢の唐突で妙な挨拶に、女性は小さな笑みを作った。

「先ほど受付をされていた方ですね」

店の客は生駒達とその女性ひとりだけ。

竹見沢は少し打ち解けた口調になって、自分達は何者であるかを
説明し始めた。押し付けがましい紹介に、女性の笑みが少し大きく
なった。

「ええ、存じています」

思わず顔を見合わせる。

「中道さんのパソコンにあつた名簿から選ばせていただいて、皆さ
んにご案内を差し上げたのは私ですから」

また竹見沢が口を開きかけたが、それより早く、

「あの、私、三好と申します」と、女性が自己紹介をした。

「中道さんとずっと一緒に仕事をさせていただいておりました。お聞きになつてられる方もおられると思いますが、ふたりで新しい会社を始めようと誘つていただいて、スタートできる目処がようやくついたところでした」

言葉から聡明さが滲み出ていた。

「あの、生駒さんのお名前は中道さんからお聞きしておりますし、竹見沢さんや赤石さんにもこれからお世話になることがあるだろうと……」

朱里がそんなことを……、生駒はこみ上げてくるものを押さえ込んだ。

「それが、こんなことになってしまつて……。いったいどうして中道さんは……」

三好は下を向いてしまい、涙をこらえている。

生駒も同じような顔つきになつていた。三好の黒いワンピースに、色白の顔。ハンカチを握りしめた白い手がさらに白さを増したようだった。

生駒も朱里からこの女性のことは聞いていた。

パートナーに信頼できる人がいる、近いうちに紹介するわ。まだ歳も二十代で若いし、デザインのセンスもいい。がんばり屋なのよ。と言つていたのが、この人なのだ。

生駒はもどかしいと感じながらも、肩を震わせている黒い服の女性を見つめることしかできなかった。

やがて三好は店を出ていき、生駒達もそれを機にお開きになった。車で来ていた者と別れて、生駒と弓削と赤石の三人は商店街を歩き始める。

このふたりとも日常的な付き合ひはない。あたり障りのない話題をポツリポツリと繋ぎながら歩く。

赤石は銀行の支店長になつている同年代の男だが、同じ釜の飯を

食った仲間ではない。生駒のいた事務所がこの銀行の支店を設計することになり、その担当者として知り合ったのだった。そんな縁でなんとなくコナラ会の仲間、つまりいわば準メンバーになったという男である。陽気さが身上で、コナラ会の仲間となっても誰も違和感はなかった。しかしさすがに今日は口数が少ない。

また汗が吹き出てきた。生駒は胸の内ポケット手をやった。ピンク色の封筒が入っている。

事情聴取を受けた日に届いたものだった。

「一緒に行こうね　いつがいい？　朱里」と、短く書かれた便箋と映画の前売りチケットが一枚。難波にあるリバイバル専門の地下劇場。来週上映される映画は「スティング」。

あまりの切なさに生駒は思わずその封筒を胸に押しつけた。

生駒と朱里の高校卒業が間近に迫ったある日のことだった。

「ねね、映画行かない？」

昼休みの廊下はごった返していた。

卒業が実感されて、合格組も浪人組にも分け隔てなく心にさざなみが立っていた。

朱里はニコニコして友達とカメラに収まっていたが、生駒を見つけると走り寄ってきたのだった。

「映画あー？」

「そう。ほら、これ。もう買ったよ。生駒くんの分と私の分」

「げっ」

「見に行きたいなって言ってたやん。私たちの卒業キネンナー」

「ふたりでか？」

「そう！」

思い出作りなのだと朱里は言って、強引にチケットを押し付けてきた。

ステイング。

「おっしやあ！」

後にも先にも、生駒が朱里と映画を見たのはそのときだけだった。その日も映画を見た後は喫茶店で一時間ほど粘っただけで、夕方には家に帰り着いていたはずだ。

淡い恋、なのだろうと生駒は卒業後に思うことがあった。

でも、会いたいと思うことはあっても、電話をするほどの強い気持ちではなかった。大学生活がフル回転し始めると、そういう水口水口した思いはいつしか心の隅に少し温かみを持った記憶となってコンパクトに書き記され、たまに思い出として顔を出すだけとなった。

しかし、今、生駒の胸ポケットにあるのは確かに朱里から送られてきた映画の前売り券。

一緒に行こうね……。

ステイング……。

生駒と朱里の最初で最後の映画……。

違うだろ。

朱里が自殺するなんて。

ピンク色の封筒の中身、つまり朱里の思いが熱を放ち、胸を熱くさせているのか、太陽の光とアスファルトが放出する熱なのか、生駒は体中に汗を噴出させていた。めまいがしていた。

この封筒のことを誰にも話すまいと決めていた。

俺だけのもの……、ではない。

朱里を独占したいという気持ちではなく、このチケットを送ってきた朱里の気持ちを竹見沢や蛇草や赤石に詮索されたくはなかった。

それが彼女に対する最後の思いやりだと思おうとしていた。

高架駅である住道駅の階段を上り、切符販売機の前まで来たとき、弓削に改まった口調で引き止められた。

「それじゃあ僕はここで。でも、朱里さんの話、どう思いますか？僕はもう少し、皆さんと話したいと思うんですけど。どうです？追悼の会ということにでもして、もう一度集まりませんか。小人数で」

弓削が会合を持ちたいと言い出したことで、生駒は少しほっとした。胸には、朱里の死の原因を確かめたいという気持ちが固まりつつあったのだ。

自殺じゃない。朱里は殺されたのだ。このままでは朱里が浮かばれない。

警察に頼るものは頼るとしても、俺なりに犯人を、という使命感にも似た強い感情が、全身に帯びた熱とともに生駒を支配していたのだ。

「そのほうが良さそうやな。竹見沢さんに集めてもらおうか」

「どうかなあ。それでもいいですけど……」

「柏原の店でやるか。じゃ、俺からメンバーに連絡しよう」

「ええ。柏原さんは適任ですよ。辞められたとはいえ弁護士ですから」

弓削が愁眉を開いた。

この小柄な男は生駒のひとつ後輩。今はインテリアデザイン事務所を開いている。物腰が柔らかく、ちょっととぼけたところもあって、誰からも好かれている。こういう理由だったか、生駒はすでに忘れていたが、さびしんぼうというあだ名を持っている。

弓削がほっとした顔で、それじゃお願いしますと頭を下げた。

電車に乗った生駒は自問する。その会合でやろうとしていることを。

よくわかってはいない。

今の気持ちが単なる好奇心ではないということだけを確認する。朱里を帰らぬ人として忘れてしまいたくない、もう少し想っていたいという感情は含まれているだろうか……。

赤石は黙ったまま吊り革を握り、流れる景色をかたくなな表情で見つめている。

生駒も窓の外に目をやった。遺影の笑顔が浮かんた。

電車は京橋駅に着き、赤石は目を合わせただけで降りていった。

夜、生駒は書庫代わりの小部屋から、「写真・日記」と黒マジックで書いてあるくたびれたダンボール箱を引きずり出した。

変色したガムテープを剥がし、詰めこんだファイルや封筒の束の中に、高校の卒業写真集を探した。

4 回想のシルエット

「ねえ、生駒くん、大学、どこ受けるの？」

「市大工学部」

「ふーん、学科は？」

「環境工学。河川や海洋の汚染対策、水質浄化とか。まあ、そんなこと。おまえは？」

天王寺ステーションデパートの中二階の喫茶店は、沈みかけた太陽の赤みがかった光が差し込み、趣味の悪いオレンジ色のインテリアが色あせて見えた。

生駒と中道朱里は小さな合板のテーブルを挟んで向かい合わせに座り、とつくに飲んでしまったミックスジュースの溶け残った氷をストローでかき回しながら話し込んでいた。

「まだ決めてない」

「なんや、朱里らしくないな。ビジョンをいつも持つことってというのが信条やないんか？」

「ええ、そうよ。やりたいことははっきりしてるのよ。どこに進学するのが一番いいかって悩んでるだけ」

「ふーん。で、なにやりたい？」

「デザイン。インテリアかプロダクトデザイン。本当に形になる物の設計」

「それでなにを悩むことがある？ ぴつたりくる大学がないんか？」

「進路を選択する条件として、それだけでいいのになって」

「十分だろ。なんでも予定通りに進むわけやないから、その時々でベストを尽くす、っていうのもアリだろ」

などという子供っぽい進路相談のために、朱里と一緒にいたわけではない。

「あつ、そうや。来月の委員長交流会の段取りを考えてくれないか。さすがに今度は、そのとき任せというわけにはいかないぞ」

「でも苦手なのよ。ああいう行事」

「なつ、俺も手伝うから。おまえが引つ張らないと、他の女の子達が出て来ないんやから」

「でも私、リーダーシップっていう性格じゃないから」

「みんなの期待、それがわからんか？」

「なに、それ」

「高校時代最後の会合で、いわばお祭りや。吹奏楽のアトラクションを入れようと発案したのはおまえやろ。うちの吹奏楽部のレベル、たいしたことないのに」

「そうだけど」

「そりゃ、NHKのグランプリをとったおまえのソロでも俺はいいと思うけど、おまえがクラブのみんなでって、言ったんやないか」

「ソロはダメ」

「な、ここで我が恵比寿高校女子最高の成績優秀者のおまえが」

「変な言い方はやめてよ」

「そうやろ」

「じゃ、わかったわ。できるだけやってみる。でも、あまり期待しないだね」

やる気は満々なのに、じれったい朱里の態度は、今日に始まったことではない。

生駒は、朱里が言葉と裏腹にきちんとやりとげることを知っていた。

朱里は特別にかわいいという子ではなかった。

たくさんのにきびがあった。眉間にしわを寄せて難しい顔をしていることも多かった。

しかし生駒は、自信に満ちておおらかで、周りにいるものを引き込まないではおかない朱里の笑顔が好きだった。

天王寺公園を眺める朱里の横顔が、夕日に照らされていた。
長くカールした睫毛。

夕日の赤い点がとまった瞳。
濃紺の制服。

胸ポケットの星型の校章と三年七組のプレート。
そしてガラステーブルの上で組んだふわっとした手。

生駒は朱里の視線を追って、公園の森とその先に見える通天閣のシルエットに目をやった。

「きれいなね」

「ああ」

「私、ここ好き」

5 夕陽の散策

天王寺公園の北側、ラブホテルと小さなマンションが混在する地域に、柏原の店はある。

阿倍野地下街の北端から地上に出て、谷町筋を少し北に歩いて西に折れ、細い路地に入っていくと、築後三十年はゆうに経っているような木造の四軒長屋がある。

周りをマンションに囲まれているが、幸いにそれらが高層ではないので、谷底のような感覚はない。デコレーションされたマンション街の中のアパレル長屋は、時代に取り残されたエアポケットのような気配を漂わせている。路地には安価なリブ付きコンクリートブロックの塀が続いているが、長屋の南側は運よくマンションのわずかな植栽スペースに面している。

夜になって庭のライトが灯れば、長屋は古色蒼然とした姿を浮かび上がらせ、良くいえばアンティークな雰囲気を出すことになる。

柏原の店は、その植栽スペースに面した長屋の一番手前の家。他の三軒も空き家でこそないが、洗濯物が干してあるわけではなく、自転車やプラスチックのプランターが置いてあるわけでもなく、生活臭はない。

店の正面の外壁はそれなりに見えるように改造してある。黒いモルタルが一面に吹き付けてある壁。少し奥まった背の高い飾り気のない扉。これも黒をベースにした藍色。ひとつきりの窓は、鮮やかな青ペンキの木製建具がはめ込まれているかわいい正方形。扉の脇には立方体の乳白のガラス製ブラケット照明。その下には同じサイズのヘヤライン仕上げのステンレスプレート。

そこに店名である「バー・オルカ」と「柏原」の黒い文字が焼き付けられてあった。

早く来すぎた。店は閉まっていた。

柏原との約束の六時まで、まだ三十分ほど間がある。

生駒は久しぶりに茶臼山にでも行ってみるか、という気になった。今、ひとりで見てきた「スティング」のテーマでも口ずさみながら。

生駒は大阪市内に生まれ育った。

中学生のときは毎週のように、当時の国鉄関西線に乗って天王寺まで行き、公園内にあった市立天王寺図書館に通ったものだ。図書館は今夕陽丘に移転してしまい、地下食堂から漏れてくるカレーの匂い漂う閲覧室の情景や、動物園の森越しに夕日が沈んでいく様をもつ見ることはできない。生駒はそんな閲覧室で、本から目を上げて通天閣のネオンライトが灯る瞬間を見守るのが好きだった。

高校時代になると、天王寺公園は生駒の日常的な遊び場となった。学校の帰りに級友とぶらついたり、ときにはスーションデパートで押し寿司を買って、公園のベンチで食べたりした。

生まれて初めてのデートは、阿倍野の旭屋書店で待ち合わせて公園を散策するというコース。

ときには公園の芝生花壇から美術館の前を通って茶臼山に向かい、ラブホテル街を照れながら通り抜けて、四天王寺まで行ったりすることもあった。

今、天王寺公園は有料となつてフェンスで囲われているが、当時はずいぶん荒れた様子の公園だった。

手入れの行き届かない芝生の中の園路には、木製の古ぼけたベンチが並び、日雇い仕事にあぶれたおっちゃん達が所在なげに寝転がったり、喋ったり、喧嘩したりしていた。

生駒らは、そんなおっちゃん達と関わらないようにはしつつも、さほど気にすることもなく、公園を楽しんだ。もし有料化が、そんな人達を締め出す施策として考えられたのだとしたら、なんとも懐

の狭い考えだと生駒は思う。有料化が実施されるとき、市民の間から反対運動が起きたが、多くの賛同を得ることはできず、今はもう、かつては誰もがいつでもそれぞれに楽しむことができた公園に入るために入場料を徴収されても、不快感を抱く人さえいなくなってしまう。

図書館の前の広場で店開きをしていたハブとマンガースの決闘を見せる薬売りや、鮮やかに実演していた手品売りなどは、今もどこかで見ることができるようだろうか。

生駒は公園を巡って歩く。

ただ、高校生だったころの思い出を拾いながらの感傷的な散策かというとそれだけではなかった。

これから開かれる会合で、自分がどう振舞えばいいのかと思い悩みながら、やたらと歩き回った。

告別式のあった日の夜、柏原に電話をかけたときには我ながら興奮気味だったと思う。

朱里が自殺したという結論には違和感がある、おまえの店で集まって話がしたい、と段取り役をかって出たわけを話したが、それから二日経ち、もうすでに今日の会合が億劫になっていた。

なにをどう進めるのかという、どんな考えも頭の中にはなかった。

懐かしい情景が目に入った。

茶臼山の池では、昔と同じように自転車で行ってきた子供達が釣糸を垂れているし、水面に浮かんだアヒルが静かに足を動かしている。乗る人のなくなったボートは浸水していたが、陽光に照らされて、水面は穏やかに光っていた。

しかし、昔とどこかが違う。

こつてりとしたデザインエレメントで覆われた建物が周囲に建て込んでいるせいで、アオコで緑色がかった小さな池は余計にわびし

く見えるからなのか。
陽が傾き、光が赤味を帯びてくると、さらにその印象は強くなっ
た。

胸のポケットが震えた。

弓削からの電話だ。

「実は、朱里さんと最近会ったことがあります」

「電車であまたま出会って、夕食をとりながら彼女の独立の話を聞
いたという。」

「それで、生駒さんに話そうかどうか、悩んだんですが……」

「なに？」

「はあ、どうも僕は疑われているようなんです」

「え？」

「一応は自殺と判断したようなんですけど、西畑っていう刑事がそ
れに疑問を持っていてるようでして」

生駒は驚いた。

と、同時にほっとする気持ちもあった。警察が非公式にしる継続
的に捜査しているというのは心強い限りだ。

「それから僕のことを探っているみたいなんです」
「なんとも応えようもない。」

「それで、なんというか……」

「ん、つまり、弓削としては冤罪だと」

「そういうことです。すみません」

「謝ることはないよ。で、今日はその冤罪を晴らしたいと」

「いえ、まあ、それは……」

弓削の冤罪。

今日やろうとしていることの意味が、一気にリアリティを帯びて
きたように感じた。

もちろん今の段階で、弓削を疑ったということではない。捜査、あるいは推理に意味が見出せそうな気がしたということである。

「その話は誰か他の人にしたか？」

「いえ」

「言わないほうがいいかもな」

「と、思います。すみません。お願いします」と、弓削がまた謝った。

生駒は今日集まってくるメンバーの心の内をふと想像した。

追悼の気持ちで参加するもの。興味本位で参加するもの。真相を明らかにしたいと意気込んでいるもの。義理で、あるいはやむを得ず参加するもの。断りきれないと、もっと言えば推理をかく乱させるために参加するもの……。

そして恐れから参加するもの……。

身震いがする思いがした。

しかし生駒は、肩肘張らず、さっぱりといこうと心に決めた。

6 オルカ

柏原はずっとそこに座っていたかのようにカウンターの内側に陣取り、食器やグラス、アテに出すナッツやおかきを入れた小さなガラス瓶の配置を固めている最中だった。

「よう、どこに行ってたんや。久しぶりに茶臼山界隈を散歩させてもらったぞ」

「フン、娘に市民病院に連れていってもらってた」

「ここから車椅子で行けるんか？」

「いや、無理。車呼んだ。情けない話だ。目と鼻の先なのに」

柏原は車椅子を器用に操りながら動き回っている。

「ますます肥えてないか？」

「フン」

身長はないが、何しろ肥満だ。中学生の細っこい女の子が車椅子を押していくのは骨が折れるだろう。

「いつまでも娘に頼れるものでもないからな」

そう言つて、柏原がカウンターを拭けと布巾を投げて寄越す。

「そうやな。それにしても亜樹ちゃんほんまにいい子やな。今、いてるんか？」

店の名のオルカは、柏原のひとり娘、亜樹が命名したものだ。ふたりだけでここに住んでいる。

「二階で勉強中」

「そろそろ高校受験か。あの子のことやから、うまくいくやろ」

「さあ、どうかな」

柏原が初めて顔をあげ、ごわごわの髭面の中からコロリと笑顔を見せた。

「さ、そろそろ話を聞こうか。連中が来るまでにレクチャーをしてくれるんだろ」

生駒はいつものように、変わったところはないかと店中を一通り見まわす。

柏原は、一杯だけはサービスだと角瓶のハイボールを生駒の前にトンと置き、耳を傾ける態勢になった。

西畑という刑事が事務所に来たこと、七月に朱里に会ったこと、告別式の後で涼みに入った喫茶店でのことを話した。

カウンターを照らす数個のダウンライトと、柏原のための小さな手元灯が、小窓から入ってくるまだ少し明るさのある光の中で、黄色い光を頼りなく投げかけている。

例によって真っ黒なシャツを着て落ちつき払った柏原の姿が、白いインテリアの中にしっくりと収まっている。

いろいろなものを吸い込んで、バーのカウンターらしい色になりつつある無垢の木一枚板に、黒い革張りのスツールが十脚。サービスをする柏原を取り囲むように半円形を成している。

手の込んだ料理は出ない。

おかきや豆菓子をつまみながら、何種類かのウイスキーやジンや缶ビールをちよろちよると飲む。

BGMはサザンやサントナや吉田拓郎がメイン。プラス青春懐メロ。合間に吉田日出子の上海バンスキングがかかったり、果ては河内音頭やモスラのテーマがかかったりする。生駒らの年代にとつて懐かしい曲を、柏原が暇に任せて編集し、かすかに聞こえる程度までポリウムを絞って流している。

壁には、柏原がかつて撮り貯めた風景写真が五十枚ほど、無造作にピンで止めてある。亜樹が小学生のときに「天空夢地楽園」と書いた習字の半紙も、茶色っぽくはなっているが、貼り付けてある。

客は柏原の友人や交流のあった人が中心で、いつしか常連客同士

は顔見知り以上の仲になっていた。

三年前のオープン当初、祝いにはオルカの名にちなんだものを持って来いという柏原の要請で、店内は客達が持ち込んだ雑多なものであふれかえっていた。海水浴で使うオルカの浮き袋が天井からぶら下がっていたこともあった。

しかしいつしか、それらは寄贈者の了解を得ずに撤去され、今はオルカをかたどった真鍮製のライターだけがカウンターを飾っているだけだ。

「……というようなわけや。朱里の追悼を兼ねた意見交換会ということやな」

「自殺ではない、ということだな。今日は貸切りにしておいた方がいいな。商売あがったりだ。これ、頼む」

「本日貸し切り」と書かれた木の板を持って扉を開けると、優が路地を曲がってくるのが見えた。

「おはようございます、探偵さん。そろそろ皆さんお集まりですか？」

優は二カッと笑うと、さっさと中に入ってしまう。

告別式の日の夜、好奇心旺盛で、暇で、ミステリー好きの優が参加したいと言いつことは目に見えていたのに、生駒はことの成り行きを話してしまったのだ。

今晚集まってくるコナラ会メンバーは、自分たちだけの会合だと思っていることだろう。

そう考えると気が気でない。

ガールフレンドを連れてきてしまったからには、おとなしくしておくよう念を押すしかなかった。

「もしかするとユウが一番頼りになるかもしれないぞ。僕の昔の助

手だということにしておこう」

と、柏原がいう。優がホコホコとして頷く。

「ねえ、ノブ。コナラ会ってなんなん？」

生駒は天井を仰いだ。

「ほんとに大丈夫かいな。説明はしてやるけど、会が始まったら口を挟むなよ」

「はいはい。大丈夫。隅っこでおとなしくしてるから」

生駒が、勤めていた中堅の建築設計事務所アーバプランを辞めたのは、十年ほど前のことだった。

会社は、能力を伸ばしていきたい者には居辛かった。

端的に言えば、今も代表者である創業者のひとり、自身の設計力がもはや時代遅れであるにもかかわらず、相変わらず権力を持ち続け、その取り巻きが会社を牛耳っていたからだ。

生駒だけでなく、社員の間には、その男が過去にささやかな栄光を得たことがあったとしても、アーキテクトとして、あるいはリーダーとしての能力と権力とを取り違えて威張り散らすことに対して、我慢できないという気分が蓄積していた。

生駒を皮切りにして、自分自身を信じている者達は、会社の業績の悪化と報酬の低下を機に、次々と退職した。

彼らのいわば同窓会がコナラ会である。

会に明確な目的があるわけではない。

たまに顔を合わせて近況報告をしあう。

ルールは思い出話のためだけの過去形の話をしてはいけないというだけ。この春に、三年ぶりに開かれたのだった。

「ねえ、それで朱里さんはコナラ会メンバーなん？」

「そう」

「柏原さんは？」

「正式メンバーじゃない」

「ふうん」

「アーバプランが裁判沙汰に巻き込まれたことがあって、そのとき世話になった弁護士事務所の使い走り。で、まあ、付き合い始めた」
柏原がじれていた。

「さ、ユウ、もういいかな。そろそろ作戦会議をしないと」

「了解」「はい」

「しかし、ただ単に集まって、おもしろい話が出るのか？ 生駒、進め方は？」

「いや、特には」

「なんだ、出たところ勝負か」

「まあな」

「しかたがない。成り行きでいこう。今日来るのは誰と誰だ？」

「言い出しつぺの弓削と、赤石さん、蛇草さん、佐藤さんと恵」

「は？ たったそれだけかいな」

「ああ、常連メンバーで大阪におるやつだけ。竹見沢さんは都合が悪いらしい。上野さんには連絡がつかないし、紀伊には声をかけていない。ところで」

生駒はさっき弓削からもらった電話のことを話した。

7 追悼

七時過ぎにはメンバーが揃った。赤石は遅刻だという。

柏原が優を紹介した。

「三条優といいます。先生が交通事故にあわれて柏原俊介弁護士事務所を閉鎖されるまで、先生の下で勉強させていただきました」

生駒は思わず目を剥きそうになった。優はそれを目で制しておいて朗らかな声を響かせる。

「残念ながら、教えていただいたことを職業にするというところまでいきませんでしたので、今は雑誌のモデルをしたりライブハウスで歌ったりしています。このお店では、生駒先生にも親しくしていただいています。今日は柏原先生から、足代わりの助手として参加するようにと言われましたので、お役にたてるかどうかわかりませんが、出席させていただくことにしました。どうぞよろしくお願いします」

優は最も得意とする種類の笑顔を振り撒いた。

「じゃあ、みんなも簡単に紹介するか」

と、柏原が、優に弓削を紹介し始めた。

「弓削俊美。デザイナー。インテリア中心だけど、なんでも。かつては絵画的センスの良さで評判が高かった」

「ちよつと！ 過去形で言わないでくださいよ」

「ハハ、すまん。ユウ、弓削のデザインはたぶんおまえも見たことがあるぞ。一時話題になった、紫風化粧品のマンボウというコロンの瓶。あれはこの人のデザイン」

「へえ！ 私もずっと使っていました！」

「事務所も自宅も朱里の家の近く。住道だ」

弓削が色白の顔を少し赤らめて、ちらりと生駒を見やった。

「まだ奥さんと別居しないのか？」

柏原は軽口を言つて、弓削を、そして参加者全員をリラックスさせようとしている。

「はあ？ 変なこと言わないでくださいよ。その兆しはありますけどね」

「忙しすぎて僕みたいになるなよ。じゃ、次は佐藤健さん。フリーのファイナンシャルプランナー。住まいは奈良の帝塚山」

今日ただひとりだけ、きちんとジャケットを着込んでいる。髪には少し白いものが混じっているが、整った顔立ち。好男子だ。

「で、次は草加恵」

「佐藤恵です。草加というのは旧姓です。アーバプランでは総務的な仕事をしていました」

と、恵は自ら名乗った。アーバプラン始まって以来の社内結婚で、そろそろ子育ても終わる専業主婦である。

「次が蛇草真治さん。アーバプランの設計。後から来る赤石の銀行の設計を担当した。現在は塾の講師」

コナラ会では竹見沢に次ぐ年長者。竹見沢、蛇草、佐藤、生駒、弓削、草加と順番にひとつ違いたが、なんとなく年長、中堅、若手という序列ができている。

「最後に蛇草さんの従弟、鶴添光一さん」

アーバプランとは関係ないが、数年前、この会に蛇草のゲストとして参加して以来、顔を出している。豊中市内で内科医院を開業している。

「今日も真治さんに誘われて、あつかましくやって来ました。どうぞよろしく願います」

鶴添が愛想よくユウに会釈した。

「ついでにあいつのことも紹介しておくか。ユウ、遅れてくるやつだ。赤石裕也、千日銀行の土佐堀支店長。住吉区に住んでいる。ア

「バプランがその設計をしたことで縁ができた。で、コナラ会のメンバー入り。実は、俺の大学の友人でもある。さ、これで紹介は終わり。みんな注文してくれ。今日もオル力は営業だから、ちゃんと金はもらうぞ。生駒、そろそろ始めよう」

生駒は店内の空気が引き締まってきたことを感じた。

「じゃあ弓削、おまえが朱里と会ったときのことを話してくれ」

弓削が要領よく説明し始めた。

「僕は東大市の住道に住んでいますが、職住近接で、近くにアトリ工があります。朱里さんの住まいも近くですし、たまに駅のあたりで顔を合わせることがありました。まあ、会えば挨拶はするという程度です。それで七月二日の夜にも電車の中ではったり会いました。彼女が勤めていた会社を辞めて独立するという話を聞いたんです。興味があつたので、晩飯と一緒に食べましょうと誘いました。それで、駅前の居酒屋でいろいろと聞きました。新しい仕事のことや車を買ったことなどです」

朱里が話したときの印象として、地に足ついた将来の夢を真剣に語っていると感じたし、彼女の生活が充実していることも伝わってきた、という。

弓削の様子からは、会が始まった頃にはあつたかすかな怯えはすっかり消えていた。

「どうかな……、朱里さんは自殺したんだ、と言いきれる人はいいますか？」と、話を締めくくった。

すぐに応える者はいない。

じつと弓削の顔を見ていた佐藤が生駒に目をやり、次に柏原の顔を見て、また弓削に視線を戻して口を開いた。

「生駒も弓削も、いったいどういうことなんだ？ 朱里は自殺したんじゃないのか？ この間の喫茶店で話したことは、僕はほんの、

なんというか、彼女への哀悼というような話題だと思っていた。今日もその続きだと思って来たんだけど、ちょっと違うようだ。ふたりとも、本気で彼女の自殺はおかしいと思っているのか？」

弓削が身を乗り出す。

「そう思っているんです」

佐藤はまた口を開きかけたものの、唸り声をあげて沈黙してしまった。

柏原はなにくわぬ顔でカウンター席のメンバーを眺め回している。恵は手元に置かれたグラスを見つめているが、グラスに付いた水滴はきれいなまま。

蛇草は左手で目を覆い、少し他の者に背を向け気味に片肘を突いている。空気中に目に見えない小さな棘をばら撒いているかのよう。なこの男の態度を、生駒はいつも快く思っていなかった。

やはり今日も、この陰気な男はぼそりと、

「そう思っている、か」と、吐き出した。

弓削は気にしていない。

「どうかな……。たぶん、生駒さんも同じことを考えてると思いますから、話を先に進めてもらえませんか」

と、椅子に座り直して、正面を向いたままいう。どうかな、というのはこのおだやかな男の口癖だ。

「じゃあ、俺の方の話をしよう。俺も最近、朱里に会った。弓削が会ったすぐ後、七月十日」

生駒はまるで弓削の話の再現のように、朱里に会ったときのことを話した。

「まあ、そういうことや。他に最近、朱里に会った人は？」

恵が首を横に振る。

長い髪を耳の上にかけて、生駒を横目で見つめている。白いブラ

ウスと紺のフレアスカートという、追悼会議にふさわしい装い。
しかし生駒が微笑みかけると、すっと目を伏せた。

「実はな、自殺に疑問を持っている人が他にもいる」
生駒の声に、いつせいに視線が集まった。

その中に弓削のもの言いたげな視線もあった。

8 氷

「昨日の夜、朱里の弟さんと電話で話した。姉の日常を教えて欲しい、という連絡があつて。隆之という人」

「案内状をくれた人ですね」と、弓削はまだどことなく不安げだ。

「そう。でも、俺の方からはあまり話すことはなかった。で、彼が言うには、警察もあまり突っ込んで捜査しなかったらしい。一応は、俺たちはじめ関係者に聞いてまわつたらしいけど、殺されるほど人に恨まれているわけでもない。一方で自殺の動機になりうるようなこともつかめない。でも遺書はある。ということで最終的には自殺ということに落ち着いたらしい。しかしご両親や弟さんにとっては、なんとも釈然としない話なわけや。そらそうやる。娘が自殺したと聞いて、はいそうですかと納得する親はいない。ただ彼らも、娘を大阪に残して新潟に引越してから日常的な付き合いをしていなかったらしい。だから、なんとも言えなくて、結局は警察の結論を受け入れるしかなかった。ただお母さんは、せめて娘の日常をもう少し詳しく知りたいと思つたんや。それで隆之さんに、娘の生前の様子を、友達や仕事関係の人に聴いてまわってくれと頼んだというこつらしい。彼はいろいろな後始末をするために、しばらく大阪に残っている」

柏原が鶴添が注文した二杯目の水割りを作っている。佐藤も自分の空のグラスを掲げてアピールした。

優はグラスに付いた水滴を指で撫で落としていた。

「前置きが長くなつたな。でも、隆之さんにも気になることはあつたらしい。重要なことじゃないと言つてたけど」

メンバーの視線が再び生駒に集まつてくる。

「どうということかというところ、朱里は子供のときから乳製品が大の苦

手で、というよりアレルギーに近かったらしい。ところがあいつが倒れていた近くにチーズのお菓子が数個、転がっていたそうなんや。あいつが死んだ山の斜面に」

「警察署で遺留品を見せられたときは、隆之さんは気が動転していて気がつかなかったらしいけど」

恵が眉間に皺を寄せた。

「さすがに母親はそれを聞いて、あれっと思ったらしい。しかし彼らも娘の好みが変わったのかと思って、警察にチーズアレルギーのことは言わなかった」

バー・オルカに生駒の声だけが流れていく。

「それからもうひとつ。子供のころはまだしも、大人になってからの姉は、山登りに全く興味はなかったはず。暑い時期に汗をかいながら山に登ったり、海水浴で日焼けしたりする人の気がしれないと朱里はよく言っていたらしい。そんな姉が自分の死に場所として、あんな険しい山の中を選ぶのは変だということやな。しかしこれも、姉が近頃のブームに乗って山登りを始めたのかもしれないと考えると、なんとも言えなくなる。いずれにしろ、お父さんとお母さんにとつては、娘が死んだだけでもとんでもないショックなのに、自殺ともなればなおさらで、葬式のあとすぐに新潟に帰って寝込んでしまわれたらしい」

蛇草がグラスを揺らし、氷がカラカラと音をたてた。

「ただ隆之さんは、引っ掛かる気はするけど、あえて問題にする気はない、そんな口ぶりやった。まさか殺されたんやないか、なんて思ってもいないんやろう」

恵が、殺された？とつぶやいた。

生駒はかまわず話し続ける。

「自殺説に疑いを持っているとしても、親の取り乱しようを見て、ややこしいことは言わないでおこうと思っているのかもな。まあ、電話で話しただけやから、彼の気持ちをどれくらい正確に説明できているか、自信はないけど。ま、そんな感じや」

生駒は、氷がなかば溶けてしまった薄いハイボールをぐつと飲んで、改めて全員を見まわした。

弓削がつられたようにグラスに手を伸ばした。

ここで鶴添が突然、そういえば、と切り出した。

生駒が比較的静かな声で話していたので、鶴添の声は大きく聞こえた。

顔がいつせいに鶴添の方に向く。皆の反応にあわてたように、医者とは二の腕を片方の手で揉んだ。

「コナラ会の二次会をここでやったとき、チーズの話題が出ましたよね。ほら、柏原さんがベルギー産だと言って珍しいチーズを出してくれたとき。赤石さんと僕以外は誰も食べなかった。ひからびたブルーチーズみたいなもので、よほどの好きでないと手が出せないやつ。あのとき、中道さんは乳製品アレルギーとかなにか、言っていましたか？」

鶴添の質問の答えは誰も覚えていなかったが、蛇草が話を引き取った。

「確か朱里はあの後、すぐに帰った。おまえと赤石は酔っ払っていて、皆にそのチーズを食えとうるさく言うもんやから、なんとなく場がしらけてしまったんや。俺は彼女と話していたから覚えている。そして彼女、家が近くやからと弓削を無理に引っ張って帰った」

弓削は手を頭の後ろに組んで首を後ろにそらせ、顔を天井に向けていた。

生駒はそれ以上誰も発言しないことをみて、話を先に進めた。できるだけさりげなく聞こえるように注意しながら。

「俺はあいつと高校の同級生やったこと、コナラ会の仲間やということ以上の特別な付き合いはない。しかし、独り立ちしようと一生懸命のあいつが、もし殺されたのなら放っておけないと思う」

「殺された……。さっきから、物騒な話になってきたな。いったいおまえら、どういうことなんだ？」

佐藤の戸惑いに、今度は柏原が口を開いた。

「生駒が言うように、仮に自殺ではなかったでしょう。そうしたら、なぜ遺書があるのかということが問題になる。もし自殺ではなかったとしての話ですよ。単純に考えると、その遺書はにせ物。ということは、誰かが何らかの意図で遺書を用意したわけですね。で、その意図とは、朱里を殺して自殺に見せかけるということ」

恵が息をのんだ。

振り返ると、優は身じろぎもせず前壁を見つめていた。

「ほかに、例えばこんなケースも考えられる。その遺書は以前に朱里が書いていたものであって、朱里が死んだのはたまたま事故だった、とかね」

と、柏原が続けて言う。

「柏原の言うとおり、いろいろ考えられると思う。俺たちにはほとんど情報がないから、ここではどんな結論も出しようがないかもしれない。だから、今日はとりあえず自殺ではなかった、つまり殺されたと仮定して、もう少しお互いに情報交換を試みたいんや。いいかな」

弓削が頷いている。柏原もそれでいいというように生駒を見ている。

「俺たちのしようとしていることが、必ずしもなにかをはつきりさせることにはならないかもしれない。しかし、あいつのことを酒の肴にして飲もうとしているわけではない。これはわかって欲しい。どこにおかしな点があるのか、それをどう考えたらいいのか。思っていること、知っていることがあつたらお互いにオープンにする。そうしたら見えてくることがあるかもしれない。そう思っている」

蛇草がぼそりと口を開いた。

「生駒、もうちょっと突っ込んだ話にならないのか。情報交換？ その程度の目的で、俺達を集めて朱里の話をしようというのか。俺も今日の集まりの目的はわかってるつもりや。確におかしいと思っているからな。ところが、たいした情報も仮説もない。おまえがさっき話した程度の情報で、推理ごっこみたいなことをするのか？」

蛇草の言葉には棘だけではなく、怒気が含まれていた。

「そんな言い方をするんやったら、知ってることがあるんやな。厭味な言い方してないで、それを披露したらどうです」

生駒はくっつかかった。

蛇草は、フンと鼻を鳴らしてグラスを手にする。鶴添が従兄を押さえるように手を伸ばした。

「真治さん、なにをいらついているんです。そんなに噛みつかなくとも。まだ始まったばかりですよ。生駒さんが一番よく知ってるよ。うなんだから、お任せしたらいいんです」

弓削も加勢する。

「そうですね。せっかくの会合をぶち壊さないでください」

蛇草は弓削を睨んで、グラスを揺らしてから口に持っていく。

生駒は収まらない。

「おい、蛇草さん。推理ごっこはどういう言い草や。あんたに考えがあるんやったら、自分で進行役をやったらどうや。俺はな、自

己満足でこんなことをやろうとしてるんやないぞ！」

「フン、俺はおまえにもうちよつと真剣になつて欲しいだけや。いい加減な気分の推理ごつこなら、しない方がまし」

「いい加減にしろ！ あんたはいつもその調子や。自分からはなにもしようとしないくせに、文句だけはつけたがる。それを卑怯というんや！」

「なんやと！」

蛇草が乱暴にがたりとグラスをカウンターに置くやいなや、佐藤が割つて入った。

「ふたりとも、興奮するなよ。お互い、なんのためにここにいるんだ？」

そのとき、扉が開いて赤石が入ってきた。柏原が快活に声をかけた。

「おおつ、遅かったじゃないか。話はこれから佳境に入るところだ。盛り上がってるぞ。さ、そこに座れ」

赤石は入り口に一番近い鶴添の隣に座った。

ビールが注がれる。

柏原に促されて鶴添が優を紹介し、今までのおさらいを赤石に聞かせ始める。

柏原が蛇草に話しかけた。

「確かに一歩間違えば、酒の肴のような話だけど、今は確かなことはなにもわからない。生駒と弓削の印象だけで話してるんだから。お遊びにならないように互いに自覚しながら話すことが大事。それもみんなわかつてる。いいですね、蛇草さん」

蛇草は黙ったまま、空になったグラスを柏原に押しやる。

「フン、相変わらず不愉快なやつや」と、吐き捨てる生駒の腕に、恵が手を置いた。

「ところでみんな、お替わりを言えよ。酒が進んでないぞ。しっか

り飲んでくれないと商売にならん」

柏原は水割りを作ったりビールを出したりし始めた。

赤石に話している鶴添以外は、誰も口をきかずにグラスやつまみを口に運んでいる。

弓削が難しい顔をして、赤石が頷く様子を見つめている。

恵は皿のおかきに手を伸ばしかけてやめた。

ハイサイ叔父さんでなくシヨパンが流れていてよかったと生駒は思う。

動悸が少し収まってきて、蛇草があれほどむきになった理由を頭の中で整理しようとした。

生駒がアーバプランに入った当時の蛇草は、仕事にきびしくはあったが、気さくな男だった。ところが辞める直前から、時として不機嫌な態度をとるようになった。アーバプランでの仕事に嫌気がさしたから、という理由だけではないようだった。

生駒は蛇草の不機嫌が、妬みからくるものだとうすうす感じていた。生駒に続いて弓削や佐藤、竹見沢らが次々に辞めていったのに対して、蛇草がアーバプランを辞めたのは三年もたってからのことだった。

生駒は蛇草の横顔を見て、アーバプランでのひとつの出来事を思い出した。

特別な事件ではない。

単に、今日の連絡がつかなかった上野月世が気になっていたのかもしれない。

9 新御堂筋

十数年前。

生駒は大阪府庁での打ち合わせの後に、下請けの土木コンサルタント会社へ寄り、先に行つて大量の設計図面を検品しているはずの上野を迎えに行くことになっていた。生駒のひとつ上の先輩である。「ほんとにあそこの担当者、いい加減なんだから。全くの無駄足。なんだと思つていろいろのよ。一言、連絡するという当たり前の配慮さえできない情けない連中！」

「まあ、そんなにカリカリしないで。たまにはあることでしょう。下請け事務所といつても、あつちの方がでかい会社なんやから」

「あら、生駒くん。そんな情けないこと言わないでよね。あくまでこつちが発注者なんだから。あいつ、こつちの担当が女だからつて、なめた目で見ていろいろのよ」

北大阪地域の南北の大動脈、新御堂筋は渋滞していた。夕方時間帯の北行き車線はいつものことだ。

ビルでいえば四階くらいにあたる高架道路になつているため、沿道に建ち並ぶオフィスビルやマンションの隙間から、きれいな夕焼けが見えていた。

助手席に座つた上野の横顔がシルエットになつて、いつもは気が強く見られる端整すぎる顔立ちも、輪郭がぼやけてポートレイトのようだった。

「そんなことはないでしょ。たまたま忘れただけとちがいます?」「たまたまねえ。さつき電話で竹見沢さんに報告したら、彼もそう言つていたわ。でも私、ああいう人達つて信用できない」

上野の前髪がオレンジ色の強い光に溶け込んで、女性らしさを際立たせていた。

「だって、無責任じゃない？　どんな仕事でも、信頼の上に成り立っているのよ。例えば自分達より小さな会社の下請けに入ることになっても、受けた限りはきちんと誠意を持って遂行するというのは当たり前のことじゃない」

「そうですね。でもちゃんとやってると思いますけど」

「見かけはね。でも、少し手抜きというのかな、気持ちが入っていないというのかな、どこか適当なところがあるのよ」

瞳には今日最後の太陽光が透過していた。

「人はね、感じる動物なのよ」

「先日の委員会のプレゼン図書を用意してもらうときもそうだったわ。向うの上司が出てきてね。私が一生懸命に用意して欲しい資料の趣旨を説明しても、なんとなく上の空なのよ。いくらちゃんと作業はしていても、ここぞっていうときがあるじゃない。私ならああいう見せ場のときに恥をかきたくはないわ。パシッと決めたいのよ。あの人達の仕事のやり方にはメリハリがないのね」

「まあ、それは下請けですから」

「そうね。だから私は彼らにその気になってもらおうと、必要以上に詳しく説明したり、食事に誘ったりしていたのに」

「上野さんの思いが空回りだったということですね。でも、この仕事も無事に終わりました。ま、よかったじゃないですか」

車が少し動いたので、生駒はブレーキに乗せた足を浮かせ、またすぐに乗せ直した。

ふたりはそれからしばらく黙っていた。

生駒がラジオを付けようと手を伸ばしたとき、上野がまた口を開いた。

「生駒くん。話は違うけど、中道さん、あなたのことをどう思っているのかしら。あ、ごめん、変な言い方ね。えーと……」

「なんとも思っていないと思いますよ」

「そう……」

生駒は、なぜそんなこと聞くのかと言いかけたものの、間拔けな質問に聞こえそうな気がしてやめた。

なんにもなしが、とつぶやいた上野の声が、少し落胆気味に聞こえたからだった。

車は少し動いてはまたすぐに止まってしまふ。

上野は窓の外を向いて夕焼けを見ていた。

伊丹空港に向かう旅客機が、ゆっくりと高度を落としていく。

新御堂筋はわずかに西へ向きを変え、正面から夕日があたるようになった。

生駒は目を細めた。光が暖かく感じられた。

「じゃあ、蛇草さんや赤石さんのことは？」

上野が夕陽に目を細めて言った。

ショートにしたつややかな髪が、エアコンの風に揺れていた。

今度の声はおもしろがっているように聞こえた。

生駒は前日の夜のことを思い出した。

事務所で自前の小さな立食パーティがあつたのだ。銀行の設計の仕事が終了した打ち上げで、開放感のある楽しい会だった。銀行側の担当者の赤石も参加していた。

酒が進んで会話が散漫になり、そろそろお開きかというところ、生駒は蛇草が朱里を見つめていることに気がついた。

紙コップさえ持たずに、悄然と立ち尽くしているという印象。

朱里は蛇草に背を向けて、赤石と上野を相手に話し込んでいた。

上野が、蛇草の視線が朱里の背中にあたっていることに気がついて、蛇草と生駒を見比べ、おどけた笑顔を送ってきた。蛇草がそれに気がついて憮然とした表情になり、朱里が振り返ったときには、すで

に部屋を出ていこうとしていた。

「朱里が蛇草さんや赤石さんをどう思っているのかということ?」

上野は黙って窓の外に顔を向けたままだ。

「そうですねえ……」

生駒は言い淀んだことを悟られたかもしれないと、あわてて言葉を繋いだ。

「なにもないと思いますよ」

それでも上野はなにも言わない。

「朱里のことはよくは知らないけど」とも、生駒は言い添えた。

「ふーん。中道さんて、高校時代はどんなだった?」

「そうやなあ、今と同じ……」

生駒は言葉を選んだ。

「目立つ子、やったかな」

「どんなふうに?」

「うーん、成績優秀やったし、クラリネットはピカイチやし」

そう、と言って上野はラジオのスイッチを入れて目をつぶった。

柏原が最後に自分の水割りを作りながら言う。

「さてと、確認しよう。朱里は殺されたという仮定そのものに反対の人は?」

赤石はななかば顔をそむけ、美しいカットガラスの扉がついた造り付けのボトルケースを見ている。

誰もが努めて感情を表に出さないようにしているかのようだ。口を開く者はいない。

「なにか言ってくれないと話にくいな。弓削はさっきの話の他に、みんなが聞いておいた方がいいことはあるかな?」

弓削が、どうかな、と首を捻る。

「じゃ、佐藤さんは？」

「いや、特に。全然付き合いがなかったから。春のコナラ会以来会ってないし。ただ……」

「ただ？」

「うん、朱里が車を買うときに、付き合いのあるホンダのディーラーに紹介してやったんだ。ちょっとでも安く買いたいからって電話があつて」

「へえ」

「値引き交渉を代わりにしてやった。それはそれでよかったんだけど、契約のときになって、名義を変えて欲しいと電話してきた。名前は確か大迫とか」

「ほう、だれ、それ？ そのわけは？」

「聞かなかった。パトロンがいるのかなと思っただけで」

「パトロン？」と、思わず生駒の口から出た言葉が、妙な印象を含んでいたのだろう。

「えらい古臭い言葉だな」と、柏原がすぐに引き取った。

「朱里の新しい仕事の出資者かもしれないな。それは調べることにした方がいいな。で、次、草加はどうだ？ 最近、会ったりとか、電話したりとか」

柏原は佐藤恵をいつまでも旧姓で呼ぶ。

「そうねえ。コナラ会の数日後に朱里さんから電話があつたわ。写真はどうしようかって。デジカメで撮ったやつ」

「うん」

「いいと思う写真をいくつか選んで、データのままいっせいにメールで送つたらいいんじゃないかって。あの写真、朱里さんからみんなに來たでしょ。それきり、話はしていないわ」

「そうか。じゃ、蛇草さんは？」

蛇草はなにも言わずに首を振る。

「鶴添さんは？」

「別にありません」

「赤石はどう？」

「思いつくことはないな」

「うーん。進展しないな。おい、生駒、おまえ、もう少し話をしろ。朱里が死んだときの様子とか、警察に聞いていないのか」

生駒は柏原がリード役を始めたので、気が楽になっていた。議論の進行によっては黙っておこうと考えていたこと、つまり最も酒のつまみになりがちな話を披露しようという気になった。

「ああ、弟さんから少しは聞いている。興味本位で聞いたんやないから、また責めるなよ」

10 なりゆき

生駒は頭の中を整理するようにゆっくりと話し始めた。

「朱里が発見されたのは、大峰山系にある行者還岳^{ぎょつじやがえりだけ}。登山道が急な崖を横切る格好になっているところがあって、相当危険なところらしい。あいつはその百メートルくらい下に倒れていた。発見されたのは、八月九日の夕方。通りかかった送電線の保守作業員が警察に通報したそうだ。身元はすぐに分かった。あいつはリュックを背負ったまま倒れていて、中に免許証があつた。警察では、いわゆる死亡推定時刻は発見された日の一週間ほど前という判断をしたらしい」

一週間とな、と佐藤がつぶやく。

「具体的に言うと、警察は八月四日の日曜日か五日の月曜日と考えている。月曜日の午後には山仕事の人が、登山道の入り口に朱里の車が停めてあつたのを見ている」

「もう一回言ってくれ。ギョウジャガエリ？ どんな字を書く？」

柏原が近畿地方の道路マップを出してきた。

「貸せ」

奈良県にある大峰山の主峰である山上ヶ岳よりわずかに南、近畿最高峰の八経ヶ岳との中間地点にある。標高一五四六メートル。どちらかといえば大峰山系ではマイナーな山らしく、地図には小さな文字で記されてある。

「奥駈けというのを知ってるやろ。修験道の行者が何日もかかって吉野から熊野まで大峰を縦走していく修行」

「ああ」

「そのルート沿いにある。ただ、この山だけを目指して下から登る人は少ないらしい。いわば縦走の通過点やな。もともと大峰山は、上高地や立山のように行楽気分でサンダル履きの人が押しかけるということはないから、朱里もなかなか見つからなかったんやろ」

柏原が道路マップに目を凝らしている。

「下から行者還岳に直接登るルートは、通常、天川村の河合という集落から川迫川溪谷を遡って、大川口というところから登り始める。昨日、登山ブックで勉強してきた」

生駒は後ろの棚に置いていたバッグから、山登り用の地図とガイドブックを取り出した。行者還岳の登山ルートを説明してあるページを開いて、隣に座っている恵に回す。

「朱里は大川口から神童子谷に少し入った狼横手というところに自分の車を停めていた。ということで、今言ったルートで登ったと推察されるわけや」

生駒は、新しく頼んだジントニックを口に入れて、ピスタチオを割った。

「これまでのところで、質問はあるかな？」

「その崖のところを歩いていたのは確かなんだな？」

柏原が聞く。

「警察の判断では」

弓削も質問してくる。

「急なところなんですか。お手軽ハイキングコースではないようですけど」

「ああ。行者還岳には登ったことはないけど、その奥の弥山や八経ヶ岳には登ったことがあるから、だいたい感じはわかる。そもそも行者還岳の名前の由来は、険しすぎてあの役行者もひき返したからということらしい。現在のルートはそれほどでもないようやけど。とはいえ、決して楽ちゃんなコースではない」

「ふーん。どうかなあ……。自殺であれ、殺人であれ、その山にどんな意味があるんだろ」

そう言いながら弓削がガイドブックを隣に回す。

生駒は大阪からの車のルートやバス便や行者還岳周辺の説明をした。雑談めいた内容のおかげで、皆の酒が進んだ。ガイドブックが

生駒の手元に戻ってきた。

「次は遺書について説明しようか」

弓削や恵が座り直した。

「遺書は机の上に置いてあった。プリントアウトされたもので、元の原稿はノートパソコンにワードで保存されていた。自筆の署名のない遺書なんて、証拠にはならないそうやけど」

生駒は話題が深刻になりすぎないよう、あえてくれたものの言い方をした。

「自分の将来に自信がなくなった。両親や仕事のパートナー、親しくしてくれた友人に申し訳ない。というようなことが書いてあったらしい。で、友人の代表として、俺の名前が挙がっていた」

「なに！ ちょっと待て。遺書におまえの名前があったのか」

柏原がいかつい顔にふさわしい、大きな目を剥いた。

ポーズだ。すでに話してある。

「警察から聞いた。さすがに、弟さんに遺書の中身を詳しく聞くのはどうかと思ったんで」

「うーむ」

「それ以上は知らない」

「そうか……。これはえらいことになったな。おまえは朱里が死ぬ直前に会い、そして遺書で名指しか……」

「そう。でも、妙な言い方するなよ」

遺書に生駒の名前が出ていたことは、メンバーたちはすでに警察から聞いていたらしく、柏原ほどの反応はない。柏原と鶴添だけが唸っていた。

警察が、蛇草を含めたメンバーに、朱里と自分の関係について根掘り葉掘り聞いたのだろと思うと、生駒は少し不愉快な気分になった。

佐藤がするどく口を開いた。

「自殺に見せかけるために、犯人が偽の遺書を書いた。ところが、その遺書の中に生駒の名前が出てくる。これは、どういうことになる？ 朱里と生駒の関係を知っているやつ、そして最近、生駒が彼女に会ったことを知っているやつ。それは誰か、という問題か」

厳しい顔をして聞いていた弓削が声をあげた。

「ちよつとちよつと、それは僕のことを言ってるんですか？ 確かに朱里さんは、生駒さんに会って相談するつもりだと言っていました。でも」

「ハハ、誰もおまえだとは言っていない」

弓削がむきになって言いつのる。

「久しぶりに会った仲間同士で、最近誰それに会ったとか、あいつはこうしてたとか、なんて噂するのはよくあることですよ。生駒さんは誰にも話してませんか？ 僕はあれから、赤石さんに朱里さんと会ったことを話したかもしれませんが。忘れましたけど。その程度の状況証拠と違いますか。お願いですから、僕がその遺書を書いたのかもしれないと聞こえるような言い方は、やめてくださいよお」

最後はおどけた口ぶりになった。

恵の表情がほぐれる。柏原も笑った。

しかし、すぐに両手で顔を洗うようにさすりながらつぶやいた。

「引つ掛かる。弓削も生駒も、朱里と親しい交友があったわけではないのに、たまたま連続して会ったすぐ後にこの事件だ。そして遺書には、生駒の名前。どういうことなんだ。いずれにしろ佐藤さんが言うように、生駒と朱里との接点を知っている人間がその遺書を書いたのかもしれない。妙なことになってきたな。生駒の高校の同級生か、コナラ会メンバーか……。おい、生駒、彼女は高校時分の友達と今も付き合っていたか？」

「いや。卒業以来、そんな話は聞いたことがない」

生駒もそのことを考えていた。昨晚は卒業名簿を見ながら、推理

メモを作り始めようかとさえ思ったくらいだった。もちろん思い留まっではいたが。

「ちょっと、待ってよ。コナラ会メンバーの誰かかもしれないって言うの？」

恵が、ことの成り行きに異論を挟んだ。

「もし自殺じゃなかったらとか、もし遺書を書いたのは朱里さんじゃなかったらとか、もしそれが犯人だったらとか。さっきから、もしかっという話ばかりじゃない。それに、いくら仮定の上とはいっても、こんな話をするの、後ろめたい気がするわ」

柏原は唸ったままだ。生駒が代わりに言った。

「恵、最初に言ったように、俺たちには正確な情報はほとんどない。あるのは俺が朱里の弟から聞きかじってきたことと、なにか引っかけるといふ気持ちだけなんや。真実は、自殺なのかもしれない。そうであれ、なんであれ、本当のことを知りたい。だから考えようとしている。できるだけ論理的思考で。俺たちには完璧な推理なんてそもそもできない。それは警察や検察の仕事。ただ推理の結果によつては、朱里の親御さんに連絡した上で、警察にも知らせようと思つている。友人が考えたこととして。それで警察がもう一度真剣に調べてくれたらそれでいい。そういうことや」

「わかった。話の腰を折つて悪かったわ」

「よし。ところで、くだいようですが皆さん、今日はお代わりの注文があまりありませんね。いかがです？ 腹は減つていませんか。草加、おなかには空いてないか？ 赤石、鶴添さん、今日も変なチーズあるけど、どう？ おいしいんだけど、ちよいと硬いんだな、これも」

生駒の話し方に真剣味がありすぎたのだろう。柏原がおどけた調子で場の気分をほぐそうとしている。

この店では、柏原がひとりで酒もつまみも作る。いくら手の込ん

だものはないといっても、いつせいに何人もが注文すると時間がかかる。

柏原が黙々と注文をこなしているうちに、鶴添が蛇草に話しかけて雑談を始めた。これをきっかけに、恵の小さな笑い声さえ聞こえるほど、和んだ雰囲気があった。佐藤がコナラ会メンバー犯人説を唱えて、弓削に話しかけている。それを赤石が聞いている。

今日の参加者が、メンバーの半分にも満たないことで、気が楽なのだろう。

「さあ、第二ラウンドを始めよう。呼びかけ人の生駒が再度チューターをするか？」

「いや、やっぱり元弁護士先生に任せる。酒を作ったり、進行役をやったりで手間をかける」

生駒も、この推理会議を意識的に楽しもうという気になっていた。幸い、互いに疑心暗鬼になって微妙な沈黙が続く、というシーンはまだない。

11 アリバイ

「では了解。とはいっても、次はなにをすればいいのか。意見のある人は？ おつ、佐藤さん」

「僕は朱里の生活とか仕事とか、付き合いのある人とか、ほんどんなにも知らない。つまり推理なんて、全くできない。考えるには知らなさ過ぎるんだ。みんなもそうじゃないかな。というわけで、とりあえずここにいる者の潔白を明らかにしてから、これからどういう行動を起こすのかを話し合う、ってのはどうか。例えば関係者へのヒアリング、いわば聞き込みの計画とか」

「いいねえ、建設的意見。それでいこう。じゃ、いいかな。手始めに、ここにいるメンバーを消去してしまおう。では、生駒から。アリバイを」

「えっ、アリバイ？ 唐突やな。いつの？」

「警察の事情聴取を受けたんだろ。当然、八月四日、五日のアリバイを聞かれたわけだよな。それを発表してもらおうか。ん、そうだな、ついでに三日の土曜日のアリバイも。さあ」

生駒は、もそもそと手帳を出した。

「三日の土曜日は、事務所でしたと思うな。ただし、朝九時過ぎと三時に一件ずつ打ち合わせがあった。相手は建具メーカーと設備事務所の人。場所は福島の中の事務所で。当然、証言してもらったことに問題はない。四日の日曜も一日中、事務所では図面を描いていた。この日も証人はいる。五日も同様。以上」

「了解。四日、五日は警察に話したのと同じことを言ってくれよ。次は弓削」

「貧乏のくせに忙しくて、四日は終日、アトリエで仕事をしていました。日曜日ですけど、社員が午後に出勤してきたので、そいつが証人です。五日も仕事。朝のうちは社員と顔を合わせていました。」

昼から数時間は大阪市内で打ち合わせ。警察は社員に僕の話の裏を取っていました」

「四日に社員が出社してきたのは何時？」

「えっと、三時過ぎてたかな」

「うん。で、三日は？」

「土曜日のアリバイはありません。以前から見ておきたかった荒俣史郎の養老公園を見に行っただんです。朝、事務所に顔を出してからすぐに車で出かけました。もうちよつと考えたら、アリバイになるようなことを思い出すかもしれませんけど」

「入場チケットの半券や名神高速道路の領収書なんかがあるんじゃないのか」

「あ、そうか。いや……、たぶん、捨ててしまったでしょう。とつてあれば無罪放免なんでしょうけど。どうかな」

「草加は？」

「よく覚えていないけど……、三日は買い物をしたり、四日の日曜日から旅行の準備をしていたわ。アリバイになるようなことは思い出せない。どうしても言うなら、スーパーのレシートでも残っているか、探してみてもいいけど」

「旅行つてどこへ？」

「パリとローマ」

「へえ！ そりゃリッチじゃないか。旦那と？」

「違うわよ。上野さんで行ったの」

「へええ！ 意外だな」

「珍しい組み合わせでしょ。春のコンラ会の人に約束したのよ。以前から行ってみたかったの。上野さんも行ったことがないから、一緒に行こうかってことになって。あの人、英語ぺらぺらでしょ」
「なるほどねえ。女の方はフットワークがいいな。生駒も見習わんとな」

「ほつとけ」

「で、出発は何時？」

「正午ごろ」

「了解。じゃ、旦那の方は？」

「三日の土曜日は、三都銀行主催の無料投資相談会というのがあって、座らされた。会場は京都で、僕の担当セクシオンは四時から六時まで。日曜日は東京で打ち合わせ。朝一番に出発した。そのまゝ泊まって、月曜の昼過ぎに一旦家に戻り、晩の六時ごろ難波に出てレコード屋をブラブラ。八時から人に会った。往復の新幹線の切符を刑事に見せし、警察は五日の夜に会った人に確認したそうだし」

「なかなか商売繁盛してるねえ。で、三日の午前中は？ 午後四時から京都ならアリバイにならないからね。朱里が何時から登り始めたのかわからないけど、今は朝の五時だったらかろうじて明るい。五時に登り始めたとして犯行現場に七時か八時には着く。さっきの生駒の話だと、大阪から車で三時間くらいということだから、そのまますぐに下山したら、うまくいけば昼過ぎには大阪や京都に帰に着く」

「おいおい、きびしい追及をしてくれるじゃないか。んーと、待ってくれよ……。手帳にはなにも書いてないから、わからないなあ。恵、覚えてないか？」

「悪いけど、全然覚えてない。でも、そんな朝早くに出かけたということはないわね。朝帰りはちよくちよくあるけど、最近はどうかなあ」

「それで勘弁してくれ」

柏原はニヤリとしたが、恵があわて始めた。

「ちよつとお。日常的なことなんか、最初から記憶しておく気がなかったら、覚えてないわよ。柏原さん、まさかほんとに疑っているわけじゃないんでしょ」

「全員を疑ってるぞ」

「ええっ！」

「うそ。疑ってるはずがないだろ。ただ基礎的なデータを揃えようとしているだけ」

「もう」

柏原は、ちよつとややこしくなってきたな、と優に書き留めておくように目で合図を送った。言われるまでもなく、優はすでに手帳を開いていた。

「そついや佐藤さん、息子さんは？　もう大学生かな。夏休みはバイト漬け？」

生駒は意識して雑談モードに切り替えた。

朱里の死が酒の肴になるかもしれないという心配は、杞憂に終わりそうだ。むしろ深刻になり過ぎないように気を使わねばならない。「いや、まだ高校生。この夏休みはアメリカのなんとか高校のサマースクールに行ってる。英会話の勉強っていうことだけど、半分以上が遊び。のんきなもんだ。親バカちゃんりんとところだな」

柏原が手帳を見ながら、自分のアリバイを話した。

「三日の昼間はパソコンを触っていた。四日は一日中読書。月曜の昼間は天王寺公園を散策して美術館に行った。ただ月曜日以外、昼間のことを証言してくれる人はいない。もつと詳しく言えるぞ。几帳面だろ。ことや細かく日記をつけているからな。こういう身になるとそんな気になる。性格もあるけど。しかし僕の場合、この足のおかげで山には登れない。そういうことでいいよな。じゃ、次、蛇草さんは？」

「三日は終日、塾で夏期集中講座の下準備。ひとりで。四日は午後二時の新幹線で広島。帰省していた女房と息子を迎えに行つて、五日の夜帰ってきた。ということで四日の昼すぎまでのアリバイは証明できない」

「はい、次」

「土曜日と月曜日は、普通に朝から晩まで診察。日曜日は朝十時から昼食を挟んで三時まで、地元医師会の勉強会に出席。場所は大阪市内のホテル。以上、いずれも証言者は多数あり、ということですよ」

「鶴添はここまで一気に話してから、カウンターに頬杖をついた。柏原さん、申し訳ないけど、なんだかわざとらしくて。ちょっと空しい気がします」

「いやいや、まあそう言わずに。単なる確認作業なんだから」
蛇草も鶴添に同調した。

「俺も光一の意見に同感や。大切な事柄が見えていないのに、やみくもに全く関係ないやつのアリバイを整理しても意味がないやろ。本質的なこととして、どういう理由で朱里が殺されたか、言い替えるなら、誰がなぜ朱里を殺したかったのか、という考察がないと、単にパズル遊びになるんじゃないか」

蛇草の明らかな厭味にも、生駒と違って柏原は鷹揚に構えて、さつさと進行させてしまう。

「そのとおり。しかし始まりの儀式みたいなものですからね。さて最後は赤石」

「三日は鳥取に。四日は家族と一緒に、一日中家にいたと思う。五日は普通に出勤。以上」

「鳥取へはひとりで？」

「ああ」

「じゃ、証人になってくれる人は？」

「たぶん、いない」

「了解。さて、今日来ていないやつのお話をしようか」

柏原は優がメモを取っているのを目の隅で確認して、ハイピッチで話を進めていく。

「コナラ会の常連ということでは竹見沢さん、上野さん、紀伊、筒

井、松原、星田くらいなものかな。最近顔を見せない藤尾や東みた
いなやつも含めると、もっと増えるけど。彼らのことで、なにか知
っている人はいるかな」

「朱里と関係しそうなことで？ あんまりピンと来ないな」

佐藤が困ったようにいう。

「そうよね。なんだか告げ口するみたいで、いやな感じ」と、恵。

「筒井と星田の二人は省いたらどうか。普段は関西にいないし、
春のコナラ会ときも一次会だけで帰ってしまったし。ちよつと縁
が遠いように思うな。それにその他大勢は、最近の情報が全然ない
から、話のしようがない」

「そうだな。それなら、とりあえずは竹見沢さんと上野さんと紀伊
に絞ろうか」

柏原の問いかけに、弓削と蛇草が強く頷く。

佐藤が身を乗り出した。

「その中で、朱里と関係のありそうなのは誰だろ。上野は朱里と大
の仲良しだし、一心団体みたいな関係だから別格として、例えば竹
見沢さん。コナラ会とき、一生懸命自分のブログの自慢をしてた
けど、朱里に教えてやるとしつこかったぞ。彼女、迷惑がってた」
「あいつは昔からあの調子や。それに最近、ちよつと強引なところ
がある」

蛇草が佐藤の話に呼応した。

「そうそう。ちよつとありがた迷惑」

「偉くなりすぎたんやな」

「なんでも自分中心に進まないと気が済まないってところ、ありま
すよね。特に最近」

「ああ。なにしろ、こだわりがすごい。悪く言えば執念深いという
ことやし、良く言えば意地になるということ」

「それ、両方、悪く言ってるよ」

「ハッハ。いや、良く言っているんや。そういう男やからこそ、国立大学の教授にまでなったんやろ。民間から舞い戻った男が、ああいう組織で偉くなるのは難しいと思うぞ」

「でも、ある意味、彼のおかげでコナラ会も続けてこられたんでしようけどね」

「ま、そのとおり。しかし竹見沢の場合は、仕切りたがるってことであって、どれほどの善意があるのか、あるいは友情があるのか」蛇草が急にテンションを上げている。

竹見沢の悪口めいた話題は、心地よく響くのだろう。アーバプランではライバルだったふたり。微妙な力関係が、今もあるのかもしれない。

「そこまで言ってしまったら、悪いんじゃないかな。でも、外れてもないような」

佐藤も煽り気味だ。

「それから紀伊。あいつは……」

「ちょっと」

さすがに恵が止めに入った。

「あなた、やめてよ。そんなふうに、いない人のことを次々に噂してまわるのは。なんだか居心地が悪いわ」

「調子に乗りすぎか？」

「そうよ。ねえ柏原さん、いない人のことを言うのはやめましょうよ。それこそ、酒の肴になってしまっんじゃない？」

12 いきおい

柏原は恵の意見を入れてこのテーマを中止し、じゃあどうするかと聞いてきた。

「竹見沢さんと紀伊については、報告がてら、俺がアリバイを聞いておくということにしよう」

頷いた恵に、生駒は聞いた。

「上野さんはどうしているか知らないか？ 電話が通じないんや」

「ひとり住まいだから携帯だけで十分だって、固定電話はやめてしまったんですって。今は、えっとねえ、またヨーロッパだと思うわ。今度はゆっくり気ままに回るんですって」

「へえ！ つつましいのか優雅なのか。で、連絡はつく？」

「はい、スカイプで」

「は？」

「えっとですね」

といいかけたものの、面倒だと思ったのだろう。自分から連絡をしておくという。

「今日は静かだな。いつもは賑やかなのに。気分でも悪いのか？」

柏原が赤石に干からびたチーズを出しながら気遣った。

「いや、そういうわけじゃない。なにも話すことがないだけ」

「そうか……」

急に醒めた空気が流れた。バーに沈黙が落ちてきた。

蛇草が立ち上がった。

先ほど竹見沢批判を連発していたときの顔のほてりは消え失せていた。

「悪いけど、帰らせてもらっ」

千円札を二枚、カウンターに置いて鶴添を促した。

「生駒、今日はもうちょっと中身のある話を期待していたけど、まあ仕方がない」

生駒は思わず立ち上がりそうになったが、
「誤解するな。責めてるわけやない」と、蛇草がまあまあというように手を上げた。

「これは俺達には荷が重いな。このごろは互いに、それほど親密につき合っていない。そもそも、最近の朱里をほとんど知らないんやから、推理のしようもない」

そう言っ、あばよというように、佐藤や柏原と目を交わした。
誰もひきとめようとはしなかった。ふたりはあっさり帰っていった。

「あいつら、わかってないなあ。くだらなくても、こんなことから始めないとしかたがないのに」

佐藤がブツクサ言っ、場の緊張感はずでに萎びてしまった。

「さて、今からどうする？ まだ続けるか？ 店の方はいいぞ。こんな生活をしていると変な粘りだけはつくからな。生駒が決めてくれ」

柏原がニヤリと、妙なサインを送ってくる。

「今日はもうやめよう。弓削はどう？」

弓削の同意も得て、生駒は閉会宣言をした。

「じゃ、今日のところは終了。なにか思いつくことがあつたら連絡してください。また今日みたいに集まってもらいたいことがあれば、そのときはよろしく。佐藤さん、今日はすみませんでしたね。中途半端な終わり方になってしまっ」

飲み直しということになった。

「入り口の札を替えてきてくれ」

オルカの閉店時間は通常十二時だが、気まぐれで替えられるよう

に、色々な札が用意されている。柏原が「本日十時半まで」という札を寄越した。

弓削が朱里さんのことはきつと解明しようね、などと念を押すように佐藤に話していたが、生駒は優と親しく話すこともできず、ぼんやりと彼らの話を聞きながら、行者還岳の地図を眺めた。

やがて他の団体客が入ってきたのを機に、追い出される格好で佐藤や赤石や弓削たちは帰っていった。

「ユウ、餃子でも出前しようか」

その夜、団体客は賑やかだった。

顔見知りではあったが、生駒は閉店までの一時間をじりじりしながら過ごした。

「さて今日はこの辺でお終いにしまつさ。後から来た人から順にお帰りください」

柏原がまだ飲み足らんぞという客を強引に帰らせて、カウンターの上を手早く片付ける。

「さて生駒、始めるか」

「やっぱり」

「だいたいおまえがだらしないんだ。直前に話を聞いた僕が、酒まですりながら、なぜ進行役もすることになるんだ？ 無理があるぞ。ちよつとは考える時間をくれないと。さ、おまえの考えていることを詳しく聞こうか。ユウも、気がついたことがあつたらどんどん言ってくれ」

張り切っている。

「話しておくべきことは、もう全部話したと思うけどな」

「おいおい、何を言ってるんだ。今からが本当の捜査会議だろ。しっかりしろよ。んー、弓削を帰らせたのはまずかったかな。いや、その方がいいか」

生駒は柏原と目を合わせてニヤリとした。そう。実は、生駒もや

る気満々だったのだ。

「じゃあ、やれるところまでやってみるか。疑問点というか、事件のポイントは次の三つ」

「おう、名調子！」

「ケツ、しょうもないこと言っな」

優が手帳を開く。

「ひとつめは死亡推定日。さっき柏原が三日のアリバイを聞いたとおり、その可能性はないのか。警察は四日あるいは五日が死亡日としていたけど、その根拠はなにか。これはもう一度、警察に直接聞いてみるしか手はない。例えば、朱里の車が停めてあるところじゃなく、停める瞬間を見ていた人がいるかどうか、ほかに駐車していた車はなかったのか、など確かめる必要がある」

優がちょこつとペンを動かす。

「二日は想定しなくていい。紀伊半島は大雨。三日は快晴。インターネットで調べ済み」

優がほのかに笑った。

「次は遺書の件。本人が書いたものか、犯人が自殺と見せかけるために書いたものか。それとも無関係の第三者が書いたものか。あるいは、朱里が強要されて書いたものじゃないのか」

柏原がうれしそうに頷く。

「俺の名前が出ているが、これはどういうことなのか」

「なんとしても遺書は手に入れたい」

「朱里のプライバシーが云々、とか言わないのか」

「俺は名指しされているんだぞ」

「もちろん見てみたい」

「三点目は関係者の整理。犯人像が全くわからない。行きずりの犯行なんてことは考えないでおこう。この場合は完全にお手上げやし、

警察の領分や。で、朱里と最近も付き合いのあった人間のリストアップが必要や。当然、警察は調べてるやろうけど」

「当然、自力で調べまわるしか手はない」

「手始めにコナラ会のリストから、関係のないやつを消去していい」

「ああ」

「コナラ会以外の関係者は、仕事の方面からヒアリングを開始する」というか、それしか思い浮かばないぞ」

「三好という女の人を突破口にする」

「告別式で会った、朱里のパートナーだな」

「彼女の連絡先は、弟さんに聞けば教えてくれると思う。告別式の案内先のリストを見せてくれればもつといい」

柏原が大きく頷いた。

「そんなところでどうかな」

優のペンがまた動いた。

「他にも例えば、部屋を見たいとか、事件当時の持ち物をもつと詳しく知りたいとか、現場や車の中を見たいとか、そういうこともあるけど」

「なるほど、なるほど。なかなかいいぞ」

「うるさいぞ」

「絶好調！」

「おい！」

「つまり、どう動くにしろ、弟さんの協力が欠かせないということだな」

「抜かりなく、携帯番号は聞いてある」

「いつ頃、部屋を引き払うんだ？」

「できるだけ速やかということやろ」

「生駒、できたらパソコンごと借りてきてくれ。遺書はその中に保

存されていたんだろ。生で見たい」

「おまえな、さっき朱里のプライバシーがどうこうって」

「借りてこないのか！」

「いわれなくても、もちろん、できればな」

「ところで、弓削をどうする？」

「本人は、なぜ疑われているのか分らないといていた」

「そんなことはわかってる」

「家が近所だからたまには出会う、というだけの仲じゃなかったのかもしれないがな」

「おい、生駒。いいのか？ そんな前提で」

「すべての可能性はまだ排除できない、なんちゃって」

「はあ？ で、おまえがそう思う根拠は？」

「ない」

「なんじゃい」

13 あけの

「コウ、なにか意見は？」

「そうやね。弓削さんの件は置いておこ。もし弓削さんが犯人だったら、警察が一件落着してくれるはずだし。今は私たちができることをしよ」

「そだな」

「関係者の整理のうち、コナラ会の人達の分は今からでもできるやん」

優の求めに応じて柏原が名前を挙げ始める。

「普通に考えたら関西在住、あるいは出張とかで関西によく来ているやつだよな。あるいは朱里が東京によく行ってたんなら、向うにいるやつも関係あるかもしれない。とはいえ、音信不通のやつや、とつくにコナラ会を卒業したやつは除外でいいと思う。そうするとさつき話に出たとおりで、蛇草、鶴添、佐藤健、草加恵、弓削、赤石、そして竹見沢、上野、紀伊といった面々になる」

「最近のその人たちのことを教えてよ。ノブ、今年のコナラ会のときのことを話してくれる？」

「えええー！」

「いやなん？」

「そんなことをやってたら、朝が来る。コナラ会の宴会そのものはくだらん近況報告と雑談だけなんやから、いいやないか」

「ダメ。さつきチーズの話なんかが出てたやん。私だけ情報不足で推理するのん？ ずるいやん。ハンディありすぎ」

「競争じゃないんやから」

「しまいに怒るよ。ちゃんと私にも話して。朱里さんを殺した犯人を見つけるんでしょ。私を戦力にしないと絶対に損するから。それに今晚中に犯人が逃げてしまうということはないんやから、じっくり状況を確認する意味でもいいことやと思うよ。さあ、さあ」

「フウエー、めんどくさ」
「僕も聞きたいぞ」

数ヶ月前、三月十五日金曜日。

千日前の繁華街をほとんど堺筋に突き抜けようかというこのあたりは、往年の賑わいが嘘のように、人通りはまばらだった。それでも、インターロッキングの赤い舗装に打たれた水が、料理屋の心意気を伝えていた。

料理屋「あけの」は、生駒達にとってアーバプラン入社時からの常用の店だった。

あるプロジェクトの打ち上げ会がここで行われたのが始まりである。

ミナミでは老舗の大衆料亭で、座敷で騒ぐことに店も寛大で気兼ねすることがないし、料理も上品すぎて物足りないということがない。料金も、生駒達のような貧乏サラリーマンでも苦にならないほど安い。数十もある大小の座敷では、年中、乾杯の発声を聞かない日はなかった。

しかし時代は変わった。今では若者達の宴会でさえ、洒落たレストランやホテルが利用されるようになって、古き良き時代の雰囲気を残す大衆料理屋での宴会は流行らなくなっている。その夜も、送別会シーズンの金曜日だというのに、巨大な玄関には「コナラ会御一同様」と書かれたものを含めて、黒い大きな札が三枚掛かっているだけだった。

両開きの自動ドアが開くと、昔と同じように、黒いスーツ姿の渋い物腰の男が出迎えた。

生駒は和服を着た六十がらみの案内係りの女性に連れられて、二階の廊下を通っていった。

酒の臭いや歌声が溢れる中を、仲居が料理を抱えて走りまわっていたかつての光景を知る者にとっては、うら寂しいものだった。なかでも二百人は座れるであろう、いわゆる千畳敷の大広間の襖は永く閉ざされたままで、照明の消えたホワイエには廃墟の影さえ忍び寄っていた。

「すみませんね。電気もつけてなくて。このごろでは二階はほとんど使わないものですから」

「いえ、いいんですよ。無理を言って、二階の奥の部屋を予約した方が悪いんです」

「いえいえ。とんでもございません。ありがたいことです。今でも時々、お客様方のように、お部屋を指定してくださる方がおられるのですよ」

案内された部屋の鴨居には、「葛城」と記された木の表札が掛かっていた。

玄関の木戸は開いていた。

女性はこちらでございまして踏み込みに入り、襖を開けた。生駒が脱いだ靴を丁寧に靴箱に入れると、どうぞごゆっくりと頭を下げて立ち去った。

靴箱の上に掛けられた和泉葛城山の油絵に見覚えがあった。小さな水差しに白梅が生けられて、強い香りを発していた。

前室となっている八畳ほどの部屋は暗かった。

すでに誰かのスプリングコートがハンガーに吊るされ、荷物が隅に置かれていた。奥の座敷に繋がる襖の隙間から、光が差し込んでいた。少し暑く感じられ、廊下の暖房が落とされていたことに気がついた。

襖を開けた生駒に、意味のない感嘆と歓迎の声が浴びせかけられ

る。

竹見沢、弓削、朱里の三人が、ひとつのテーブルにつき、星田がただひとり別のテーブルについていた。

竹見沢が自分の隣に座れとジェスチャーをした。生駒は少し迷ってから、星田の隣に腰を落着けた。

座敷は三十畳ほどあり、三つの黒い円卓が置かれ、それぞれに数枚の座布団が敷かれていた。テーブルにはまだなにも載っていない。蛍光灯の光が白々と感じられるほど閑散として、盛り上がりようのない雰囲気だった。

次に登場した佐藤夫妻は、すぐにみんな来るだろうからと、誰も座っていないもうひとつのテーブルについた。すぐに赤石が入ってきて佐藤の隣に座る。

仲居が料理や飲み物を運び込み始めた。次々とメンバーが席について、予定されていた全員が揃った。

このころには生駒にも、元気かとか仕事の調子はどうだとか、まだひとり者かなどと陽気な質問がされて、少し馴染んだ気分になっていた。

「皆さんこんにちは。竹見沢です。皆さんとこうして顔を合わせるのは、もう何年ぶりでしょう。本当にお久しぶりです。それでは、アーバプランをいやになって辞めた我々の同窓会、コナラ会を開会いたします」

会は始まった。

「さて皆さん、いろいろ積もる話もあるでしょうが、まずは乾杯しましょう。さあ、立って立って」

ビールの栓を次々に抜いて、ささっ、とかなんとか言って身近な人に注ぎ合いをする。おもむろに立ち上がり、まるで儀式のようにコップを捧げ持って、乾杯の発声を待つ。生駒はこの瞬間が嫌いだ。

さあ今から始めますよ、食べても飲んでもいいですよという号令のように感じて。今日のように、もはや上下関係もない、ホストやゲストがいるわけでもない、堅苦しいことは本来なにもないはずの会合で、なぜこんなわざとらしい儀式をするまでビールに口をつけることも許されないのか。

「さあ、いいかな。では我々がまたここに集まることができたことを喜んで、乾杯いたしたいと思います。ご唱和ください。よろしいですか。それでは、乾杯！」

しかし、一旦ビールに口をつけると、生駒のそんなどうでもいい違和感は吹き飛んでしまう。

久しぶりに会う元同僚達の笑顔を目の前になると、懐かしさがこみ上げてきて、素直にうれしかった。

その日、仲間はアーバプラン時代と比べて頼もしく見えた。

生駒が今も日常的につき合っているのは柏原だけだ。しかし今日は欠席。他の者はいえ、同業の紀伊や弓削となにかの講演会などでたまに顔を合わせるくらいで、それ以外の者とは数年振りの再会だった。

各自の簡単な近況報告が終わると、近くに座った者と少しぎこちなさを残しながら仕事のことなどを話し始めたが、酒が入ってくると、親しい者を求めて、あるいは新しい話題を求めて席を移りはじめ、会は徐々に盛り上がってきた。

「おお生駒、いいところにきた。今、俺のホームページの話をしていたところだ。おまえはもう自分のホームページかブログを持っているか？」

「いや、まだ」

「そうか。設計事務所をやっているんなら、開設した方が絶対に得だぞ。俺のURLは名刺に書いてある。中身は単に自己紹介みたい

なもんだ。仕事柄、いろんな人に会うだろ。中にはビジネスライクだけでなく、もう少し突っ込んだ関係を持ちたい人もいるわけだ。そのときは家に帰ってからでも見てくれるように頼むんだ。すると俺の印象は強くなるし、仕事以外の側面を知って親しみを持つてくれるようになる」

竹見沢がホームページ開設のメリットを説く。

生駒も全く関心がないということではなかった。自分の設計で建物が建ち、クライアントが喜ぶと同時に、何らかの社会的評価を受けたときには、これが自分の仕事であるということを経世にわかる形で表現したい、という気持ちがあつたからだ。

「コツを言っておくと、できればフォーマルな形で作ることだな。たとえブログであってもだ。自分のことをオープンにするわけだから照れてしまうけど、最初からきちんとしたものを作った方がいい。冗談半分で作ったものは、結局は初対面の人や仕事上の付き合いの人に见てもらうわけにはいかなくて、そのうち用がなくなってしまう」

朱里や上野が、相槌を打ちながら竹見沢の話を聞いていた。

インターネットを利用してゐる人の多くが、潜在的に自分のホームページやブログを持ちたいと考えてゐるらしい。本屋にはそれらを作るためのノウハウ本やネタ本が今も平積みされている。

竹見沢の話がホームページの作り方に移つていった。申し込み先、設定方法から始まつて、ページレイアウトや無料で使えるグラフィックのダウンロードの方法、ファイル転送のノウハウまで指導する気になるに違ひない。生駒は逃げ出した。

赤石が佐藤と弓削を相手に話している。本人曰く、完全に昨今のブームに乗せられて、山登りが趣味になったという。佐藤や弓削に行こうと勧めてゐるのだ。

「でも疲れるでしょう」

などと、弓削が頓珍漢な質問を連発して誘いをかわしているが、赤石の話に熱が入ってきた。もうひとりの山登り推進派の紀伊が参入して、ますます勢いがついてきた。生駒がどこで彼らの熱弁を断ち切ろうかと考え始めたとき、朱里と上野が話の輪に入ってきた。

「おもしろそうじゃない」

「だろ」

山登りチームの話の輪は、徐々に大きくなっていった。
中高年の山登り。

まるで合言葉のようなフレーズが、それこそ中年になったコナラ会メンバーには受けるのだろう。

ついに蛇草まで乱入してきて、次回コナラ会は山登りにしようという意見まで飛び出る始末。

「生駒さん。最近、仕事はどんな具合？ 社長業は？」

恵が声を掛けてくれた。

「個人住宅の設計がほとんどだって、さっき言ってたけど、楽しそうね」

生駒は、ようやく自分の話を聞いてくれる人に巡り会ったような気がしてうれしかった。今取り組んでいるプロジェクトの話を始めると、朱里が加わってきて、また最初からさせられることになった。恵の場合は一般的な興味があったただけだが、朱里は設計者同士ということで突っ込んだ話になり、恵は弓削と別の話題に移っていた。

「ところで、朱里。おまえの方は最近どう？ 仕事、楽しいか？」

「そうねえ、楽しいと言えば嘘になる、ってところかな」

「はつきりしない答えやな。今やってる物件、イマイチなのか？」

「ううん。そういうことじゃないわ。今は、銀行の支店の改装工事なんだけど、新しく勉強することがあっておもしろいわよ」

「じゃ、なんで？」

「ちよつと飽きてきたのかも」

「飽きたか……。自分で選んだ道やろ。そんなこというなよ。で、どこの銀行？」

「フフ、千日銀行」

「え、まさかアーバプランでやった例の支店？」

「そう」

「あ、赤石さんが」

「そういうこと」

そこに上野がやってきて、その仕事の件は聞けずじまいになった。
「お邪魔？」

「やっとホームページ講座から逃れて来たか」

「まあね。でも私、ホームページ、興味があるわ」

「ふーん、例えばどんなテーマで？」

「そうねえ。そだ！ 文学作品！ なんてね」

「へえ！ それいい！」

朱里はこの話が気に入ったのか、先ほどまでとはまったく違う
澆刺とした声を出した。

「ものを書くっていうのは自分だけの世界を作るわけでしょ。楽し
そうよね。私も挑戦してみようかな」

思いつきの連発なのだろうが、ふたりはどんな作品を書こうかな
どと話します。

「おふたりさんなら、S M嬢のなんとかとか、っていうのは？」
「こら！」

隣のテーブルでは、弓削が恵に、事業が資金的な事情で危機にな
っているとし小声で話していた。しかし恵の同情の眼差しをかわすた
めにか、次第に強気なことを言い始めた。僕には太い金づるがあり
ますから心配はしていません。持つべきものは友と言いますから、
などと。

困惑気味になった恵が、救いを求めるように夫を呼んだ。

いつのまにか山登り推進会議は解散となり、テーブルには生駒と朱里と上野だけになっていた。

やがて朱里に声が掛かり、竹見沢や蛇草を中心とした大きなグルーブに移っていった。朱里を迎えて歓声が上がっている。

生駒は酔いを感じた。ここで席を立つと上野がひとりきりになるが、ごめんと告げてトイレに立った。

木の下駄をつっかけ、静まりかえった廊下に出た。

大きく息をする。廊下に滞留していたひんやりした空気が、顔や喉に心地よく感じられた。

空間の薄暗さが疲れた目を癒し、麻痺しかかっていた脳にクリアな部分が用意されたように感じた。

14 競争

「先日のコナラ会の雰囲気はわかったけど、今の話はこれから重要な展開をするのか？」

じれた柏原が口を挟んでくる。

「いや、たいした話はない。印象に残っているのは、竹見沢さんがロンドンで開かれた国際なんとか会議で発表した自慢話とか、紀伊の今の現場が不便なところで、かつ所長が頼りないやつで段取りが狂いまくりとか。そんな話。蛇草さんの奥さんが乳がんの手術をしたことも話題になったな。後は、延々と無駄話」

「それで、山登りの話。赤石の誘いに乗ったやつはいるのか？ 次回のコナラ会は山登りにしようかという話」

「いや。予定を決めるところまではいかなかった」

「そうか」

「恵が絶対に反対で。おまえが参加できないってな」

「ふーん。で、具体的にどこの山の話が出たんだ？ 行者還は？」

「出なかったと思う」

「朱里と山登りに行った可能性のあるやつは？」

「分らないな。あ、そだ。セクハラ事件はあったけどな」

竹見沢がいわゆる酔った勢いというやつで朱里に抱きついたのだ。朱里はあっさりそれをはねつけたのだが、場に少々緊張が走ったことは事実だ。

「そういうのってさ、単に見せつけたいだけなのよね」
優がバカにしたような顔をする。

「いつまでたっても、男って単純なんやから」

「やろうな。変なライバル意識がいまだにあって」

「竹見沢さんっていう人が抱きつこうとしたのは朱里さんだけ？」

「そう。ま、赤石さんや蛇草さんに対するポーズやる」

「ライバルかあ。くだらないよね」

「プライド高き大学教授はそれが影響したのか、二次会には来なかった」

そんなところだ、と生駒はコナラ会の報告を終わらせた。

「はあ、なんだかしまりがない話というか……。二次会はオルカで？」

今度は柏原が優に話し始めた。

「さつき蛇草さんが、朱里が弓削を誘って一緒に帰ったって言うんだろ。あのときのことを話しておこう」

上野がそろそろ失礼するわ、と言い出した。

残っていた水割りを飲み干し、濡れたコースターとカウンターをおしぼりで丁寧に拭いて、柏原が取りやすいように前の方に並べた。それにつられて朱里も立ち上がった。

「じゃ、私も帰ろうかな。もう遅いし。弓削くん、一緒に帰らない？ ふたりならタクシー代も半分で済むわ。ね、上野さんも一緒に乗っていきましょうよ。城東区回りで帰るから家まで送っていく」

弓削は赤石と話し込んでいた。

朱里の誘いに、ええ、と応えたきり、また赤石との会話に戻っていく。融資や返済などという言葉が聞こえた。

ふたりはあまり楽しそうな顔をしていなかった。

柏原のような仕事をしていると、客同士の会話が重くなりすぎたときに、少し軌道修正してやる方がいい場合もあることを知っている。しかしその夜は柏原自身も楽しむ側だった。ふたりの話題に割り込む暇はなかった。

「ねえって、弓削くん。もう一時を回っているのよ。いくら五十過ぎたといっても、独身女性がひとりで帰れる時間は過ぎてるわよ」

せかす朱里に上野も加勢した。

「そうよ。そんな話は昼間にしてよね。さあさあ。じゃ、皆さんまたね」

しぶしぶ立ち上がった弓削が、財布を出した。

赤石も立ち上がって三人のために扉を開けてやり、ふらつきながらそのままトイレに入った。

それを目で追っていた恵が、ろれつの怪しくなった口で誰にともなく話しかけた。

「赤石さん、だいぶ、酔ってるわねえ」
頬杖をついている。

「それにしても、相変わらず朱里さんって、若く見える」

曲がった唇から、独り言のような呟きが漏れた。

「ほんとにうらやましい。昔からずつとあんな風にかわいい、っていうか、お日様がパァーッと照つたような雰囲気なのねえ。清々しくて、でも暖かいって感じ……」

恵はほんのりどころか、目の周りは真っ赤だ。

「ねえ、ねえ、健。酔っ払いの赤石さんなんか、彼女が自分よりひとつ年上だって知らなかったのよ。昔のことだけとお。もしかすると、まだ知らなかったりして。ふふ、生駒さんの高校の同級生、っていうのをまだそのまま信じてたりしてえ」

佐藤は柏原との話に夢中だ。

恵は大きな息をついた。

「彼女に興味津々の男がたくさんいたわねえ。今ここにいる人も、全員そうだったんじゃないかなあ」

さすがに佐藤が恵をなだめにかかった。

「おいおい、何を言い出すんだ。酔ってるな、恵」

他の話をしていた者も、恵が次に何を言い出すのかと、興味を持った。

「酔ってないわよお。大丈夫っ」

「いや、飲みすぎだ」

「コナラ会のルールを破って、少し思い出話をさせてね」

恵が自分で頷いた。

「朱里さんは、みんなの憧れの的だった。よその会社からの出向社員という、ちよつとフリーな面もあったからかな。でもさ、上野さんは、ちよつとうれしくない感じだったんじゃないかな。ふたりはとても仲良しだけだね。ハハハ。そっぴや上野さん今もちよつとだけ、どうしようかなって顔してたわよねえ。そんな感じ、しなかったあ？ 思い過ごしかなあ」

恵はカウンターの上で両手を握った。

「フウウ。だけど、朱里さんは結局、誰とも付き合ったりしなかった。」

握り締めた両手の上に顎を乗せた。

「と思う。自分で意識していたかどうかは別にして、仕事場でそんなチャラチャラしたことはない、つき合つてられなかったのよ、たぶん。でも、男達はそんな彼女に余計に参っちゃったのかもしれない。そろそろ時効じゃないかなあ」

恵がトロンと一同を眺めまわした。

「みんなに聞いてみたい」

紀伊がニヤニヤしている。

「だいたいさ、最初のコナラ会ときも、なかなか熾烈だったわよねえ」

佐藤がやれやれという顔をした。

「誰かが、うまくいったのかどうかは知らないわ。でも、もう何もかも昔の話。どうでもいいくらいに昔々。それでも私達、こんなふうに集まつて、いろんな話をするのよ。だから仲間っていうのかなあ」

いくつかの首が、わが意を得たりと頷いた。

「どういうわけか、朱里さんを見るたびに、そんなことを思うのよ。あの夜の男どもの戦いが、よほど印象に残っているのね」

佐藤が、ほれ、と恵の目の前にチェイサーを置いた。

「ありがと。その男どもが誰かということは言わないでおくわ。時効だつて言っただけど、妻も子もいれば、やっぱり勘ぐられるのは厭でしょう。みんな、あのころとは比べものにならないくらい、立派なビジネスマンだしねえ。それにしても、今日のコナラ会、おとなしかった。なんだか寂しいっていうのかな、気が抜けたっていうのかなあ。落ち着くところに落ち着いたっていうのかな、きつと……」

赤石がトイレから出てきて、酔った酔った、と大声を出した。

恵は口から出かけたことを最後まで言わずに、カウンターに顔をうずめてしまった。

誰もが十分に飲んでいた。

恵が黙つてしまうと、バーには急に静かな倦怠感が漂った。柏原が思い出したように手を動かし始め、冷たい水を配った。それを待っていたかのように、生駒たちは口をつけた。

佐藤が立ち上がった。

「じゃあみんな、僕らはそろそろ引き上げることにするよ。蛇草さん、また会いましょう。生駒も、またな。柏原、ありがと。みんなも次のコナラ会まで元気でな」

生駒に手を差し出した。握り返した手に、赤石も手を乗せてきた。恵はまだ飲んでいたいと、少し抵抗をみせてから帰っていった。お開きにいいタイミングだった。

蛇草が立ち上がって、コナラ会はこれにて終了と宣言した。

しかし、その時点まで残っていたのは、生駒、赤石、蛇草、鶴添、紀伊、そして柏原だけだった。

あの日の恵と同じように、優がカウンターの上で手を組み、顎を乗せていた。

「佐藤恵さん、か……。いろんなことを教えてくれるかもしれないなあ。ねえ、ノブ。朱里さんとアーバプランってどんな関係？ それにメンバー同士のプラーベートな付き合い、これも教えてちょうだい」

朱里はアーバプランの社員ではない。

朱里の勤める青山企画とアーバプランとが、南大阪のあるプロジェクトで共同設計をすることになり、アーバプランに出向してきたのだ。出向期間は一年半だった。

「じゃ、そもその始まり、朱里がアーバプランに来たときのことを話そうか」

15 後からホノボノ

アーバプランの始業時間は八時半。生駒が奴隷調教的発想と言っていた朝の体操が終わると朝礼が始まる。中道朱里が紹介されたのはある日の朝礼のことだった。

「大阪府立恵比寿高校から京都工芸繊維大学に進みまして……」
そんな自己紹介に生駒は驚いた。

ほぼ十年ぶりに会った同級生の顔を見つめた。

朝礼が終わるとすぐに声をかけた。

「おはよう、生駒です」

「中道です。よろしくお願いします」

「覚えてないか？」

「は？」

「エビ高三年七組」

朱里は、そうですけど、と少し不安げに生駒を見つめた。

生駒はどぎまぎした。同僚達の好奇の目が気になったからだけでなく、朱里が高校時代の面影を見つけられないほど変わっていたからだ。きちんと化粧をして魅力的だった。

「ああっ！」

朱里の顔が一気にはじけ、白い歯を見せた。

「生駒くん！」

生駒はほっとした。と同時に、懐かしさとうれしさがこみ上げてきた。朱里の笑った顔が高校時代の思い出の笑顔と同じだったからだ。

朱里は、たまたま再会した生駒の引き立てもあって、アーバプランの社員達にすぐにうち解けた。プライベートな集まりにも顔を出

すようになり、そのままコナラ会のいわば準メンバーになった。

「ちょうど同じころに、蛇草さんが担当した千日銀行の支店計画も進んでいたんだ。向こうの担当者が赤石さんだった」

生駒は記憶を手繰り寄せるように話す。

「ああ、そうだったな」

と、柏原も遠いところを見るような目をして応える。

生駒は朱里の出向以降の出来事を、昔話も自慢話も織り交ぜていく。

柏原も負けてはいない。仕事を請けていた弁護士というだけでなく、社内の様々なことに首を突っ込んでいたのだ。むしろ人間関係のエピソードを次々に思い出すのは柏原の方で、生駒が、なぜそんなことを知っているんだ、という顔つきになることも多かった。

しかしやがて、普段なら誰もまともに取り合わない昔話も底をついた。

優がメモをとるペンの動きも止まった。

「ね、蛇草さんっていつもあんな感じ？ 単に、ノブと仲が悪いだけ？」

と、優が現在進行形の話題に引き戻す。

「いつもじゃないけど、むかつくことを言うよなあ。あいつなりの懸命さと受けとれるときもあるけど、辟易することも多いな」

生駒は少し考え込んだ。

「ま、仲が悪いというより、親しくはないということかな」

「相手が生駒だからじゃなくて、誰に対してもあんな感じなんだ。僕にだって」

柏原にくっつくこともある。

「そっという人っているよね。自己中心的な人」

と、優が納得したが、柏原がちょっと違う、と解説する。

「たぶん、どこかに弱さがあつて、攻撃的になるってことだろ」

「あ、分かる分かる、そういう人、いるいる」

生駒はほんの2時間ほど前の、蛇草の言葉を思いだいた。蛇草がかつて、朱里のことを想っていたとしても、今、なぜあれほどまでに。

「それからさ、いまさらの質問やけど、朱里さんってずっと独身？
優の目は光っていた。

生駒は、自分の目がちょっと遠いところを見ていたと恥じた。

「結婚したって話は聞いていないな」

だいたいわかったわ、これ見て、と優がノートを開いて見せた。

「概要のメモ。ポイントはこんなところかな」

メモは簡潔だった。

生駒は自分達の話していたことが、わずかそれだけの内容だったということに、軽いショックさえ覚えた。

「今日来ていなかった人のプロフィールはこれでいい？」

別のページを開いて見せた。

竹見沢、紀伊、上野の名がある。

紀伊孝はコナラ会に柏原のゲストとして参加。M建設の大阪本店勤務で現在は三重県の建築現場に単身赴任中。五十一歳とあった。

上野月世は広告代理店に転職したが独立し、現在はフリーのデザイナー。バツイチで子供なし。大阪市城東区在住の五十一歳とあった。

「うん、このとおり。じゃあ、ユウ、友人相関図みたいなのを作らないか。誰が誰を好きやったとか」

「もう十分。ちゃんと頭には入ったよん」

「そういうな」

「それに、そんなことを紙にしてみようと、それがさも今でも真実であるかのようにひとり歩きするやん。昔の話なんやから、今の推理にどれだけの意味もないと思う」

「はつきり言い切ってくれるやないか。そうでもないかもしれないぞ。現に、朱里は俺の古い古い、つまり高校の級友やけど、俺たちは関心を持ってるやないか。なつ。だからあいつに関連することくらは記録しておいてもいいと思うぞ。それを知らなかったら、おまえの推理にハンディになる」

生駒はいい思いつきだと詰め寄った。

「そこまで言うか。このセンチなおっちゃんは」

「それでかたづけるな」

「だってさ、書くほどのことはないと思うよ。えっと、ノブがアーバプランにいたところには、蛇草さんと赤石さん、今、関西にいる人の中ではこのふたりが最も頑張ってたんやね。竹見沢さんもまんざらじゃなかった。弓削さんは誰とでも仲がよかったから、特に朱里さんにご執心だったかどうかはわからないということやね。後の人は無色透明」

「透明……」

「でも朱里さんは、誰にも特別な興味を示さなかった。恵さんとはかく、おふたりさんが知っている限りでは、なにも起こらなかったということよね」

生駒は唸った。

「ほら、言葉にすると、くだらない話やん」

「うーん、くだらないか」

「そうよ」

「おまえの言い方は味も素っ気もないな。もっと、その、んー、男と女の心のあやというか、表面には決して出さない秘めた思いとか

をだな、そういうものをきちんと把握して……」

「何を言ってるのん。やめてよ。ふたりとも、酔ったん？ 本人から聞くなるとにかくも、ふたりが昔に見た亡霊のような記憶を土台にして、論理的推理なんて、できないやんか」

「俺のよき思い出は亡霊かい！」

「生駒、まあ、いいじゃないか。おまえ、おもしろがってるだろ。

僕らはユウの言う亡霊を後ろに従えているんだから、いざとなりやそれを召還して使役したらいいさ。いや、背後霊かな」

「ところでユウ、生駒が朱里とどういう関係だったか、聞いておかなくていいのか？」

柏原が笑いをかみ殺していた。

「げっ、なにを言いだすんや！」

「さつきから、聞いて欲しそうにしてたからな」

「アホなこと言うな！」

ことさら大声を出したが、優が笑っていないことに気がついた。

「悪い。ふざけすぎた」と、柏原が口元に笑みを残したまま謝った。

「ううん、いいよ。そんなこと、意味がないから。ノブは犯人じゃないし」

「ちよつと酔ってきたかな。ふと思ったんだ。あの頃の朱里、ちよつと今の優くらい年齢だったんだろうなって」

柏原が頭をかいた。

「はいはい、じゃ次は女性陣のことを教えて。今はいいお婆さんの、当時はピチピチの女の子」

「恵と上野さん？ しかしピチピチってのはやな」

「はいはい。でも私はピチピチちゃん。じゃ、聞くよ。朱里さんが女性グループの中のどういう立場で、どう思われていたのか」

了解、とは言ったものの、生駒が思い出す具体的な出来事はあまり多くはない。

朱里のしつかりとしたものの考え方に、他の女性達は無意識のうちに少し距離を置いていたかもしれない。

ただ、朱里自身は人を見下すようなことはなく、出向社員であることを差し引いても、能力をひけらかすこともなかった。

残業を終えて、キタやミナミのパブで飲んだり、休日には同僚達と六甲山へハイキングに行ったり奈良公園まで足を伸ばしたりしてごく普通につき合っていた。

「朱里は上野さんと、特に仲がよかった。あいつが出向してきたプロジェクトの、こちらの担当が上野さんやったから」

それだけではなく馬が合ったのだろう。

そのときの仲の良さは、現在も継続しているようだ。仲間として友として、相談相手として。

しかし、朱里と恵との関係については、生駒はどんな印象も持っていなかった。

「こんなことがあったぞ」と、柏原が後を引き取った。

「覚えているか？ 藤尾って女性。あの子は最初、朱里の扱いに戸惑っていた。朱里が出向してきて、最初の世話を一番若い女子社員の子がみることになった。いわゆるオリエンテーション。仕事の仕組みや日常のこまごましたルールを教えることになった。具体的にいえば、かかってきた電話のとり方や内線電話の回し方とか、経費伝票の付け方といった庶務的なことだろう。ところが朱里の態度の中に、自分は出向社員なので、必要なこと以外は興味がない、という気持ちがあるのを感じたと言っんだ」

「はあ？　なんで、おまえがそんなことを知ってるんや？」

「僕が湯沸室に行ったとき、藤尾が草加に訴えていた。どうにかしてくれって。草加は、あなたは淡々と教えたらいいのよ、って諭していた。ここで楽しく暮らすか、イライラしながら過ごすのかは、

あの人の問題だからって。僕は、草加もなかなかいいことを言うと思っただけ」

「へえ、おまえが湯沸室にまで進出してたのも驚きやけど、恵もきちんと後輩をしつけてたんやな」

「そう。で、そこへ上野さんもやってきた。彼女は、それとなく私からも注意しておくといった」

「転校生が溶け込めなくて、いじめられたという感じ?」と、優。

「いや、そうじゃない。最初だけの話。すぐに仲良くなってたから」

「ふうん」

「推測だぞ。彼女達は、自分の方が、朱里よりもここでは先輩だし、優位なんだ、ということ相互に確認したかったということじゃないかな」

優はまた、フウン、だ。

「彼女らにとつて、朱里との関係は試行錯誤だったとも言える。同年代の若い女性同士だし、仕事上でもプライベートでも、ライバル意識というか負けられないというか、そんな気持ちがあったに違いない。実際、朱里が優秀だし、それになんていうか、ちょっと目立つ女の子だったし。それにたぶん、生駒が朱里に親しく接していたことも関係していたんだろ」

「まさか、それはないやろ」

「でも、勘違いするなよ。気持ちの行き違いは朱里が入ってきたほんの最初だけ」

優が生駒を横目で睨んでから頷いた。

柏原がさつと話題を変える。

「それから、草加のことは生駒も知ってるだろ」

「ん?」

「ちよつと気まずい雰囲気になってたこと。陰口を言われたり……」

生駒は驚いた。

「おまえなあ、それも知らなかったのか。頼りないやつだな。そんなことだから……」

「だから、なんだ」

佐藤恵、当時は草加恵。

確かに、彼女は性格が明るすぎるくせに、変に正義漢。しかも、男から見れば、仕草がいじらしい。

「他の女性達からみたら、なんというか、いろいろとな、気に入くないわけだ。わかるだろ」

柏原は優に氣を使ったのか、具体的な陰口の内容については言葉を濁している。

「へえ。そのことを佐藤さんは知ってたんか？」

「もちろん。おまえだけだろ、なにも知らんのは」

「フン、俺は昔からシャイでおぼこいからな、で、まさか朱里もいじめる側？」

「まあまあ」

「実は、数年前、草加に聞いてみたことがある。でも、もう昔のことだからって、言葉を濁された」

「おい、おまえの話はよくわかんぞ。意地悪事件の主犯は、朱里、上野、藤尾、あるいは他のやつ誰か、という謎かけか？」

「謎じゃない」

「じゃ、なんだ」

「亡霊のような昔話の続きさ」

「はあ？」

「さすがにこれは、想像でものを言ったら、それこそ先入観に囚われてしまうかもしれないからな。ただ、藤尾は違うと思う。草加が会社の打合せ室で泣いてたとき、付き添ってやってたから」

「げっ！ おまえ、そんなことまで見てたんか。俺は全然知らんぞ。おまえ、いったいアーバプランに、なにしに来てたんや！」

「ヘン。おまえだけだ、のんきなのは。以上、亡霊の出る幕は終わり」

優が柏原の最後の言葉ににこりとした。

「つまりさ、朱里さんはちよつと男性陣にチャホヤされてた。それを氣にくわない人もいた。かわいくて正義感の強い恵さんは、いじめにあつてた。何かが爆発するほど陰悪な雰囲気でもなかったけど、お姉さん格の上野さんが、事務所内の女性陣の規律を保っていた。ということね。ありがちな光景つてところかな」

「そう。ありがちな話」

「ね、ところでさ。柏原さんは恵さんのことを草加つて旧姓で呼ぶやん。朱里、上野さん、藤尾。みんな呼び方が違うのね」

「ん、そついや上野さんと草加だけか。旧姓で呼ぶのは」

生駒は、皆が名前で呼ぶのは朱里だけだ、と思った。

「上野さんはバツイチだったよね」

「そう。えつと結婚当時の苗字は……」

優はもう、生駒に聞いてこない。しかし、柏原も、

「んーと、相手の男の名前は……、ハハ、忘れた。でも、ひどい男で、五年我慢して離婚したらしい。幸いというか、子供もできなかったようだし」

「ふん。おまえも覚えてないやんけ」

柏原は喉が渴いたとビールを飲み、なんだぬるいな、という顔をする。

優がつぎつぎに話題を変えていく。

「その女性陣の中で、職種はどういう分担？」

「朱里と上野さんは設計。男性社員に混じつて、頑張っていた。草加と藤尾は総務。後は全員、短期的に来ていた助っ人で、みんなの下働き」

「お、もうひとつ。亡霊を思い出したぞ。朱里と竹見沢が、ん？」
優があからさまに、またか、というような顔をしていた。

「なあ、ユウ。俺達もあのころは、それなりに若者らしく誰かを好きになったり、いがみ合ったり、悩んだりしてたんや」

「まるで思春期やつたような言い方」

「そう。思春期の続き。今でもそうかもしれない。ただ、少年少女時代の思春期より……」

「引っ付いたり離れたりの話はもういいって！」

優にそう言われて、生駒は自分のことさら青い、そしておぼろな青春時代を傷つけられたような気がした。

なんとというタイミングか、オルカには森田公一とトップギヤランの歌が流れていた。

「青春時代が夢なんて、後からほのぼの思うもの……」か。

翌朝、生駒は中道隆之に訪問する旨を伝え、弓削と住道駅で待ち合わせた。

告別式の日も同じ道を歩いたが、あのときに比べて、街並みを観察する気持ちの余裕がある。改札口を出ると「ホットマインド」という関西地盤のハンバーガーチェーンの幟。マンションに向かう商店街には、並木としては珍しいナンキンハゼの木がみずみずしい葉を茂らせ、古風な焼鳥屋の店先には、信楽のタヌキが鎮座していた。朱里が住んでいた街だという思いが改めて沸いた。

マンションは、告別式が行われた集会所と目と鼻の先だった。三百戸ほどの比較的大規模な分譲マンションである。

エレベータを八階で降り、開放廊下を数軒分進むと八〇二号室。黒い柄のダイノックシート貼りの玄関扉の横に、中道と印刷された白いアクリル板がはめ込んであった。

組み立て前のダンボール箱の束と、すでになにかを梱包した箱が四つ五つできつつあるリビングダイニングに招じ入れられた。南向きの掃き出し窓から生駒山が近くに望める明るい部屋だ。

生駒は訪問した用件を切り出した。

「端的に申し上げますと、私達は朱里さんの自殺が不自然だと……」

隆之は、まあまあというような素振りをしてキッチンに立った。生駒の目の前には、何通かの手紙や本。整理の途中なのだろう、乱雑に積み上げられている。思わず一番上の赤い表紙の本を手にとった。それは、恵比寿高校の卒業アルバムだった。

開いたページは生駒と朱里が写っていた。3年7組。

そこに、見なれない制服を着た若者達の集合写真が二枚挟まれていた。男子と女子がほぼ半数ずつ。

朱里が恵比寿高校に転校して来る前に通っていた学校での写真なのだろう。写真の中央に固まって立っている女子生徒の中に、生駒が毎日見ていた高校生の朱里の顔があった。もう一枚には六人の女子生徒が写っており、全員がクラリネットを持っていた。

隆之がリビングルームに戻ってきた。

生駒は、懐かしくて、と弁解してアルバムを元に戻した。隆之は、生駒さんと姉は高校のとき同じクラスだったそうですね、と意に介さず話します。

「姉のことは、実は私も、素直には受け入れたくない気持ちがあります。皆さんで本当の理由を調べたいということですが、もっとストレートに話してください。疑問がある、とおっしゃいましたよね」
生駒は丁寧に、言葉を選んで自分と弓削の体験、そして、なぜ自殺ではないと思うのかを話した。

「姉のことを、そんなに心配していただいて、本当にありがとうございます。本来なら、私達家族がしなければならぬことなのでしょうが、なにぶん私も両親も、姉の仕事のことはもちろん、最近の生活の様子さえ知らないありさまで、手の出しようがありません」

隆之が、姉が父母の勧める見合いを断り続けたことで、仲たがい状態になってしまっていたと打ち明けた。

「父や母は、今回のことで精神的に参ってしまっています。もし、自殺ではなくて、……例えば誰かに殺されたということにでもなりましたら……。両親も歳ですし……」

「お察しします」と、弓削がもごもごと口を動かした。

「あの、生駒さん、弓削さん、私も姉の死の真相を知りたい。しか

し両親のことを思うと、このままの方がいいのかもしれない。そんなあいまいな状態なんです。これ以上、両親に精神的にも肉体的にも負担になるようなことはできないのです。でも、生駒さん達のお気持ちには感謝していますし、おかしい言い方ですが、お役に立ちたいとも思います。私にできることがありましたら、なんなりとおっしゃってください」

生駒は少々肩の荷が降りたように感じた。

「ではお言葉に甘えて。繰り返しになることもありますが、もう一度、最初から聞かせてください」

なぜ死亡推定日が四日ないし五日なのかという疑問。

隆之は、三日の深夜に朱里の部屋の照明がついているのを隣人が見ていること、遺書の作成日が四日の早朝一時半であることによるという。

次に生駒は、告別式の案内状を出した者の名簿を見せてもらえなしかと聞いた。

ありますよ、と隆之はクリアフォルダから、数枚の紙を抜き出した。

「三好さんに作っていただいたものです。姉が勤めていた会社の方や、仕事上のお付き合いのあった方々なのでしょう」

リストには名前と住所、電話番号や勤務先などが記入してあった。生駒達の名前もある。

「実は私、三好さんも存じませんでした。警察署で、彼女の方から声をかけていただくまで」

隆之は告別式以降、三好以外に会ったのは、生駒が初めてだという。

「三好さんから、大迫さんという人を紹介するとおっしゃっていたにいたるんですが、まだお会いできていません。姉が独立するにあたって、お世話になった方だそうですが」

生駒はリストにある大迫の名前の前に丸印つけた。

次は遺留品についての質問。隆之がまたフォルダを開く。

「これがその一覧です。ただ遺留品そのものは、新潟の方に全部送ってしましまして、お見せできるものはなにもありません。車はただ駐車場に停めてありますが」

服装の欄には当日の服装。携行品の欄のリュック内には、財布、食品や飲み物や雨具や化粧品、バンドエイドなど。車内には道路マップといくつかの品物の名が記されてあった。隆之はチーズのこと以外に、気になった点はないという。カメラにはデータは残っていない。なかったらしい。

「警察も姉の遺書を疑ってはみたようです。ですが、この部屋の鍵は姉が身につけていました。つまり、この部屋には誰も入れなかったはずで、遺書は姉が自分のパソコンで書いたものだという結論になったと聞いています」

生駒は最後の質問に取りかかった。

「その遺書ですが、中に私の名前も出ていたそうですね。もし、差し支えなければ見せていただけませんでしょうか」

隆之はフォルダのページをめくるが、プリントアウトしたものがなかったのか、ノートパソコンの蓋を開けて電源を入れた。

そのとき、チャイムが鳴った。

インターホンから威勢のいい声が引越し屋だと名乗った。

「生駒さん、すみません。引越し屋に見積もりを頼んでいたんですよ。申し訳ないんですが、ちょっとお待ちいただくか、続きはまた改めてということにしていただけませんか」

パソコンはようやく立ち上がりかけていて、ウィンドウズが、ようこそなどと生意気なメッセージを表示させているところだ。

生駒はそれを横目で見ながら、できればパソコンそのものをお借りできれば、と申し出た。それから高校の卒業アルバムも、私ののみあたらなくて、と言い添えた。

「あつ、そうしてください。姉のプライベートなことがあるかもしれませんが、気にされずに見てください。結構です。仕事は事務所のデスクトップでしていたようなので、問題はないと思います」

弓削が持ってきたバッグにパソコンを納めている間に、玄関のベルが鳴り、引越し屋の営業マンが入ってきた。

生駒と弓削はマンションを出た。

「上出来やったな」

「ええ。でも最後に、生駒さんが今日のことは誰にも言うな、もし誰かから連絡があつたらこちらに教えて欲しい、と言ったときにはさすがに怪訝そうな顔をしてましたね」

「でも、大事なことやろ。万一朱里が殺されたんなら、今頃犯人は安心しきっているやろうからな。俺たちが嗅ぎまわってる、なんてことを教えてやる必要はない。あ、あれだな」

ホンダのCRV。駐車場に停めてある朱里の車は、外から見ると、なにも積まれていなかった。芳香剤やマスコットの類もない。

「ところで、あいつの部屋はどんな感じやった？ おまえの目から見ると、なにか感じるところはあつたか？」

ふたりは朱里の部屋を仰ぎ見た。

「そうですねえ……、もう片付け始めていたから、部屋の空気みたいなものは薄れてしまっていましたね」

もったいぶった前置きで、弓削が解説を始めた。

「んーと、余計な家具はなくて、あるものはすべてデザインテイストが統一されている。男性が思いこんでいる、いわゆる女性らしさ

なんてものは微塵もなく、どちらかというとドライでワイルド。見せかけの豪華さなんて関係なし。だからといって、いかにもデザインしましたと格好つけているようなものでもない。まあ、そんな感じかな。言葉にすると、インテリア雑誌みたいに嘘っぽくなってしまいますけど」

「インテリアのことを聞いているんじゃないよ。見りゃあわかる。朱里の生活や人間関係、あるいは異性関係については？」

「男が出入りしていたのかどうかってことですか？ わかるわけありませんよ！」

「そうか。俺よりおまえの方が、そんな嗅覚はあると思ってたけど」
「まさか。それにもう何日も隆之さんが寝泊りしているんですから、他人に見られてやばそうなものは、一番に片付けてるでしょうよ」

生駒はずばり、聞いてみた。

「朱里の部屋に入ったことがあるんじゃないのか？」

「まさか！」

間髪をいれずに弓削は否定したが、一瞬、瞳が揺らいだ。

「まさか、僕を疑っているんじゃないでしょうね？」

「それなら、今日、誘ったりしないよ。ちよつと聞いてみただけ」
弓削が見せた一瞬の不安が、真実を言い当てられたことによる不安なのか、疑われているのかもしれないという不安なのか、生駒にはわからなかった。

いずれにしろ、その不安を吹っ切ろうとするかのように、弓削は色々な事柄に無理やりな理由をつけて朱里の暮らしぶり予想を、なおも披露し始めた。

しかし、駅に着くころには、さすがにネタは尽きたようで、
「ちよつと時間ありませんか？ もしよければ、僕の事務所を覗いてくれないか」と誘ってきた。

「ごめん。今から打ち合わせなんや。また今度伺うよ」

「そうですか。残念です。これ、うちのパンフレット」

「ありがとう。朱里のパソコンはオルカに持ってきてくれる？」

「ええ、いいですよ」

弓削と別れ、生駒は改札口を通った。

今もらったパンフレットを開いてみる。弓削らしくシャープなデザインの手帳で、作品集兼用の会社紹介だ。

作品を一通り見て、会社概要や主要取引先の欄を見る。建築関係の会社や広告代理店、各種メーカーなどの名前が並んでいる。千日銀行の名前もある。生駒は弓削の裁量が少しうらやましくなった。いつのまにか立派な手帳を作り、そうそうたる企業と取引関係を作っている。もしかすると、夢も金も手に入れようとしているという意味では、弓削も先頭グループに入っているのかもしれない、と思った。

生駒は朱里のアルバムを取り出して三年七組のページを開いた。学校唯一の理科系クラスで、生徒は四十三人。女子は七人だけ。正門前の築山を背景に整列した集合写真が一枚、中庭の噴水脇の一枚、学内食堂のおばちゃんを真ん中にして撮った一枚。

朱里はどの写真にも満面の笑顔で収まっていた。

そして、校庭の藤棚の下に作られたコンクリートの観覧席で撮影されたカットでは、生駒と朱里は並んで立っていた。

生駒はまだスリムで、腕を組んで斜めに構えて立っている。自分のナルシストっぽいポーズから目をそらし、級友達の顔をじっくり眺めていった。

最後に、アルバムに挟まれていた写真を手にとった。

小さい方の写真は、音楽教室の中で撮った吹奏楽部のメンバーのようだ。それぞれクラリネットを持って、なんとなく締めまりなさそ

うに突っ立っている。

写真中央の朱里は、はにかむように笑っていた。裏には六つのイニシャル。S A、T U、J N……。生駒はJ Nという文字を見つめた。朱里がこれを几帳面に書いている情景を思った。

17 黒猫

その日の夕方、生駒がオルカに着くとすでに弓削と優が座っていた。

「聞きましたよ！ 三条さんは生駒さんの恋人だそうじゃないですか。ひどいじゃないですか！ 隠してるなんて」

弓削がニヤニヤ顔だ。

「柏原！ 喋ったんやな！」

「いつまでもごまかせないだろ。でも、正直に話せというのはユウからの申し入れだぞ」

「そうやん。いつまでも先生なんて言っつて、しゃちこばって話せないやんか」

「でも、恋人というのはやな……」

「さあ始めようか、生駒先生。早速パソコンの遺書を見てみよう」

すでにカウンターの上に、朱里のパソコンが置かれてあった。

緊張するなあ、と電源を入れた。

デスクトップに、ワード文書のショートカットが用意されていた。タイトルは「皆様へ」となっている。

開くと、A4横書きの平凡なレイアウトで、比較的大きな文字が並んでいた。

弓削が声に出して読み始めた。

『お友達や仕事の仲間達へ

皆さん、本当にありがとうございました。

これまでの暖かい友情に、とても感謝しています。

私の人生は、これまでのところずいぶん調子よくいっているように思っておられる方もありますが、本当のことを申しますと、私自身はいつも不安でした。

自分には本当の実力が無いことがよくわかっていたからです。

多くのすばらしい先輩や同僚、そして素敵な友達に恵まれ、皆様の御厚情に支えられていたからこそ、ここまでやってくることのできたのだと思っています。

皆様からいただいたご助言やご指導、私のためにしてくださったことのひとつひとつが思い出されます。

感謝の言葉もあります。

ただ、たいへん自分勝手な受け取り方ですが、本当の実力のない私にとって、そのような皆様のお気遣いに甘えることが、いつしか私自身のわずかな自信をますます喪失させることにもなっていたのです。

おほめをいただくことがあれば、それには値しないと、時として挫折を味わうような気分になんてなっていたのです。

私は、自分を追い込んで再出発しようと決心しました。

今まで教えていただいたことを活かして、新しいスタイルのビジネスにチャレンジしようと、お世話になった会社を辞め、開業の準備を進めてきました。

精一杯やってきました。

でも、やはりここでも、手を抜いていると指摘する自分自身の意識があつて、これを打ち消すことがどうしてもできないのです。

うまく表現できませんが、冷静に自分を見つめているもうひとりの自分を納得させるためには、もっと一生懸命にするしかない、そのように追い込まれた気分になるのです。

しかし私は、自分の力の限界が分かっていますから、その頑張りの成果は不十分なものでしかないということもたちまち明白になるのです。

毎日が消耗の日々です。
疲れしました。

ここ数日は、もうどんな小さな気力さえ沸いて来そうにありません。

生駒さん、せっかく励ましていただき、多くのご助言も頂いたのに申し訳ありません。

私も節目の年齢になりました。と、いうわけでもないのですが、もう、すべてを清算したいと思います。

月並みな言い方ですが、お世話になりました。ありがとうございました。

どなたか、勝手なお願いですが、新潟の家族に私の暮しぶりや、元気で幸せにいたことを伝えてくださいませんか。よろしく願います。

年八月四日

中道 朱里

□

生駒はしばらくものが言えなかった。

柏原は宙を睨んで、目の玉を前後左右に動かしていた。

生駒はもう一度自分で遺書を読み返し始めた。唐突に、柏原が声を張り上げた。

「おいおい生駒、なんともおまえ、複雑な顔をしているぞ。しっかりしてくれよ」

「……」

「惑わされたのか！　そもそも、今こうしているのは、おまえの勘から始めた話だからな！」

と、快活に吼えた。わずかに微笑んでさえる。

「さあて、せっかくだから、他にどんなものがあるか、見てみよう。弓削、すまないけどそれ、こっちに下ろしてくれないか。自分で探したい」

柏原が調理台の受けに置かれたPCを前にして、早速ファイルを開き始めた。弓削もカウンターの内側でパソコンを覗き込んでいる。

生駒は朱里の遺書といわれている文書を、朱里自身が書いたものとして意識しながら聞いてしまった。

朱里の死を、なんとか食い止めることはできなかったのか、とさえ思ってしまった。

柏原に指摘されて我に返ったものの、心のひだを振るわせた風は容易にやみそうにない。むしろ朱里自身が書いたものであるという当たり前の結論でいいのではないかという気にさえた。

遺書の中には、確かに本当の実力がないとかもうひとりの自分とか、消耗の日々とか、わざとらしい言葉が並んでいる。いつも真剣で、少し大げさな彼女自身の言葉と思えなくもない。自分はとんだ思い違いをしていたのではないか……。

しかし生駒は、意識して軽い口調で声をかけた。

「なにかおもしろそうなものが見つかったか？」

「まあ待て。ん？ 生駒、まだ迷ってるのか。情けないなあ」

困惑が声に出ていたのだろう。

自分の迷いを口にしなくては、気持ち収まらなかった。

「しかし、さっきの遺書はよくできていたぞ」

「ふん」

「仕事のことが、俺とのか、なかなか……」

柏原が顔を上げた。

「あのなあ。僕には、あの遺書は朱里が書いたものじゃないという可能性が高まったとは思えないけどな」

「だから、なぜ？」

「どうにも説明くさい」

「まあ、そうやけど……」

「それに節目の年齢ってなんだ？ あいつは五十一歳。それに遺書の最後で、なぜおまえに謝ることがある？ 変だろ。謝ったり礼を言う相手なら、三好や出資者の大迫じゃないのか？」

「うん……」

「それに見てみる。パソコンの中身。マイドキュメントもDディスクもスカスカだ。サラピンのパソコンじゃないのに。誰かが手当たり次第に削除したという臭いがプンプン」

生駒は食い下がった。

「しかし、これをどうしてあいつ以外のやつが書くことができたんや？ あいつの部屋に誰が入ることができたんや？」

優が指摘する。

「思いつきを言ってもいい？ 親しい間柄なら、鍵を渡しておくこともあるよ。特に、近くに住んでいる人に。万一鍵をなくしたときに便利やし」

ちらりと弓削を見るが、平気な顔をしている。男性である自分は該当しないといいたいのだろう。

「さあ、生駒、もういいかな。そんなことより、朱里はミステリーを書いてたんか？」

「そっぴや、朱里さんの部屋に、何冊か推理小説がありました」

話題転換を歓迎したのか、弓削が朗らかに言う。

「なるほど。おまえら、いつまでもそっちでふんぞり返ってないで、これを見てみる」

優は立ち上がりかけたが、柏原の周りにスペースがないのを見て座り直した。

「みんなそっちに行ったら窮屈や。何か知らんが、読みあげてくれ」

生駒は遺書の文面の検証は後で考えることにして、柏原が読み始めようとするものに意識を集中することにした。

「よし。このファイルはDディスクのミステリーというフォルダの中にある。ウェブページだ。青いイーマークのやつ。「cat」とか「plant」とかのタイトルがついている。並んでいる順番通りにまず「cat」からいくぞ」

前かがみになって画面を覗き込み、

「ご挨拶。突然の葉書に驚かれたことと思います」と、読み始めた。
「……そうですね、ミナミの『はり重』くらいかな。だめだった人には……」

「ちよつとこれ、ノブ！」

生駒にも、以前聞いたことがあるような、という不思議な感触があった。そして『はり重』の名前を聞いた途端に思い出した。

「これ、あのブログよ！」

生駒は両手をカウンターについて、聞きのがすまいという態勢になっていた。

柏原が読み進む。

「間違いないよ。一字一句同じものかどうかは別にして、これは数カ月前のあの風変わりなブログ『幸田さん』やん！」

「あ、これ！ 僕のところにもはがきが来ました！」

と、弓削も声をあげた。

六月の初旬、梅雨前の快晴の日のことだった。

Pフラットで気持ちのいい風に吹かれながら、優はジンジャー、生駒はアイステイーを楽しんでいた。

「ちよつとこれ見てみ。今日来たんや。怪しい感じやろ」
取り出したはがきに、優が目を走らせた。

「私の友達にもこんなのがいるねんなあ。自己紹介みたいなホームページやブログを開設して。匿名でそんな自己紹介をしても、意味ないと思うんやけど。でさ。遊び心を出して、そのホームページの開設者が誰かを当てると言うねんやんかあ。ま、新手の自慢話やねたぶん、これもその手のお誘いとちがう？」

「へえー、ホームページの開設なんぞ面倒なことをやっておいて、まだその上に、こんな面倒くさいことをするやつがいてるのか。よっぽどの暇人か」

「暇やかraというんやなくて、ちよつとした遊びなん。それにホームページの開設なんて面倒でもなんでもないよ。ブログならもつと簡単。いいやん。たぶんこれ、ノブの友達なんやから、付き合つてあげたら？」

優が官製はがきに視線を戻す。表は手書きで丁寧な文字が並んでいる。裏の本文はプリンターで打ち出されたものだ。もちろん差出人の名はないし、消印は大阪中央郵便局となっていた。

いい天気だった。

空は快晴。

テラスの横を人工の滝が流れ落ち、風向きによつては水飛沫が飛んで、木々の葉を濡らしている。

「ねえノブ、たぶんね。このはがきの人は華道関係か……」

「何を考えているのかと思つたら、そんな暇なことをやってたのか」「満ち足りてこそ、ミステリーを楽しめるんよ」

「で、暗号の解読か？」

「そう。このURLのアカウントが『kouda-7』でしょ。コウダナナ、幸田奈々っていう人いる？」

滝の水をくぐり抜けたひんやりとした空気が流れてきては、生駒や優の顔を撫でていく。

「おらんぞ、そんなやつ」

「でもこれじゃ暗号にならないし。アルファベットを並べ替えると華道にもなるわ。でなければ、ひとつひとつの文字にバラバラの意味があるのか。例えばkはキッチンで、oはオフィスで、uはユニットバス、ダイニングでアトリエか……、ん？」

「もう止めとけ。せつかくのんびりしてるのに、そんなことに頭を使いたくない」

しかし、生駒も部屋に戻った途端、優が『幸田さん』と名付けたそのホームページを早速開いてみたのだった。

『幸田さん』は、ブログだった。ブログタイトルは無題。

『こんにちは。突然のはがきに驚かれたことと思います。怪しいことに係わり合いになりたくない、と思われたことでしょう。』

でも私は、あなたがよく知っている友人ですから、安心してください。

まあ、もうここにご訪問くださったということは、半信半疑であっても、一応は信じてもらえているということでしょうね。

結論を言つと、私は、「私は誰でしょう」という単純な遊びを試みたくなつたのです。

これは、ただその遊びのためだけのブログです。

いわゆる日記風です。期間限定二カ月くらい、最低、五、六回位は続くかな、と思っています。

このブログの開設者、つまり私が誰か、最初に分かった人には夕食をご馳走しましょう。

そうですね、ミナミの『はり重』くらいかな。＼(＾o＾)ノ
だめだった人には、なにもありませんm(――)m。

私の暇つぶしに付き合っていたかくわけですから、当然、参加費は不要です。

ちなみに、葉書は十人ほどの人に出しました。関西在住の人ばかりです。皆さん同士は必ずしもお知り合いではないかもしれませんが。

では始めます。第一回は猫の話です。

よろしく願います。早く私を見つけてくださいネ。

猫

私は飼い猫である。

猫は人につくのではなく、家につくと言われているようであるが、必ずしもそうではない。

あの人、つまり食事と寝床の用意とウンチの処理をしてくれる人は私を連れてこの街に引っ越してきたが、私は前の住まいに帰りたいたと考えたことはない。そう考えないのは、私がまだとても若いからなのかどうかはわからないが。

私とあの人、の住まいから、山がよく見える。あの方はバルコニーに出て、山を眺めることができることを気に入っている。大阪に住む人なら誰でも名を知っている山だ。

あの方は、いつかは富士山に登ることを楽しみにしていて、その手軽なトレーニングとして、あの山にちよくちよく登っているようだ。私には、なぜそんなことが楽しいのかわからない。

先日、私も自転車の前カゴに入れられ、もう少しでその麓まで連れていかれそうになった。マンションを出て、数十メートル行ったところで危険を感じ、カゴから飛び降りて一目散に家まで帰ったが、可愛げのないやつと思われたかもしれない。

あつ、ということはやっぱり私も「家につく猫」なのかもしれない。

さて私の行動範囲は、まだそれほど大きくはない。

我々が住む、いわゆるペット飼育可能マンションと言われる、猫や犬にとってはなんともやりきれないネーミングの建物のバルコニーづたいに、近所の家を一軒ずつ覗いてまわることにずいぶん日数をかけたからである。

しかし、ようやくその近隣確認作業も終了し、いよいよ街に繰り出したところだ。とりあえずのところ、あの人が立ち寄るようなところは探索済みだ。

最もよく立ち寄るのは言わずと知れたコンビニエンスストア。

それからスーパーマーケット。そこで私のフードを買う。クリーニングを出したり、雑貨、日用品を買うのもそこだ。

それから、パチンコ屋の前の青いのれんの食堂で、たまに夕食をとっている。

私はあの人の外出中は外に出されている。あの人が帰って来るまでまともな食べ物にありつけないだけでなく、部屋に入れないのだ。あの人は夜遅い日に限って、その食堂に行き、なかなか出てこない。困ったものだ。

最後に私の自己消化胃、いや紹介をしておこう。

近所の人達から、かわいいといわれている黒い猫。避妊手術を受けさせられた。名前はルーと呼ばれている。

六月二日 ㍿

メッセージの後には、大写しにされた猫があくびをしている写真が掲載されていた。黒い毛並みの猫で、尾は長い。細身の赤い首輪。コンクリートの上で撮影されているが、場所を特定できるものは写っていない。

始めたばかりのブログは、これだけの内容だった。

イラストやお奨めリンクやブログパーツの類は一切なく、白い背景に普通のフォントの明朝文字だけが並んでいた。

この情報だけでは開設者の見当さえもつかなかった。

優が念のためにと、ページを丸ごと保存した。

「大阪で誰でも名前を知ってる山って、金剛山、生駒山、信貴山、二上山、六甲山、比叡山、えっとポンポン山、愛宕山……」

「ユウもなかなか詳しいな。でも、最後の方は誰でも知っているわけやないし、比叡山や愛宕山はバルコニーから眺めるっていう印象の距離じゃないな」

「でも、大阪に住んでいるとは言っていないよ」

「ん、そうか」

「でも、大阪に住んでいる人ならって断つてあるところを見ると、やっぱり金剛山、生駒山、信貴山、六甲山くらいが妥当なところかな。あ、まさか茶臼山！」

「どこよ、それ」

「知らんのか！」

それ以降、『幸田さん』はほぼ一週間ごとに更新されていったのだった。

18 あの日にかえりたい

そして数日後。

『サボテン

サボテンとは、自分の意志で動くことのできない、つらい生き物であることよ。

あの腐れガキ猫に幾度転がされたことか。テーブルから落ち、鉢から抜けて、根を剥き出しにしたときの痛みと心細さは誰にもわかるまい。

育て主はそのたびに植え直してくれるが、たいがいのことではへこたれることのないわしでも、これほどまでに幾度となく傷つけられ、もはや根がなくなってしまうては生きてはいけない。

せめて、体皮から水分を補給しようとかんばってはいるが、いかんせんこの暑い夏のこと、蒸発していく割合の方が高い。体内に蓄えてあるものがなくなったときに、わしの最期となる。

ごみ箱に捨てられる日まで、あとどれくらいか。

長くはない。

死ぬ間際に、まだ周りが見えるうちに少しでも記録に留めておこう。

わしが植えられている鉢は、机の上に置かれている。

直射日光があたらないのが以前のわしの悩みだったが、今のこの身ではむしろそれがありがたい。

机の上には、わし以外はノートパソコンが置かれてあるだけだ。

育て主は徹底した整理好きだ。机はもちろん、部屋中を常にきちんと片付けているのだ。あの腐れ猫にかき回されるのがいやで、収納せざるをえないのかもしれないが。

客がまれに来ることはあっても、それが女であれ男であれ、泊ま
っていくことはない。

テレビを見ることはめったになく、クラシックのレコードを掛け
ていることの方が多い。

本棚には様々なジャンルの本が並んでいるが、文学作品は多くは
ない。最近の文学賞受賞作品が少々と、著名作家のミステリーが数
冊あるだけだ。

六月七日
『

掲載されている写真には、貧弱な丸いサボテンが小さな素焼きの
鉢にのっかっていた。

その後方に、ピンボケのパソコンと人の手が登場していた。パソ
コンを操作しているその手も、一部見えている腕も、なんとなくふ
つくらとしているが、男女の区別はつけようがない。パソコンは黒
いノートだということがわかるだけ。ディスプレイにもなにが表示
されているのかはわからない。

背景には、白い壁がぼんやりと写っているだけだった。

優が危惧したとおり、第一話の猫のページは、すでに削除されて
いた。

『子供

ああ、あのなあ、スイミング行ってやんねんでえ。僕らと同じ
スクールの。そやから知ってるんねん。

大人のクラスやから、どんなこと習うてんのか、よう知らんけど、
僕らのクラスの横で、ずつとクロールで泳いでる。

えっ、スイミングスクールの場所？

団地の横の道をずーと行くねん。そんなことより、家を知ってる

で。あのマンションや。

なあなあ、あの人、おもしろいねんで。

大人のくせに、僕らが噴水のところで遊んでたらな、バトミントンしようか言つて、ラケット持ってきてくれはるねん。ほんで一緒に遊ぶねん。

バトミントン、まあまあ上手や。

僕らか？ 学校から帰ったら、たいていこの辺で遊んでるで。
六月十三日』

文章は短かったが写真はあった。

団地の中庭らしきところに、直径二メートルくらいの噴水池のよ
うな建造物があつた。

水は出ていない。その回りを数人の子供達が走りまわっている。
周囲の緑は豊かで、レンガ舗装の上に十分な木陰を作っていた。
古い公営住宅をイメージさせた。

そして、今回はもうひとつ写真がついていて、緑色のスイミング
キャップをかぶった人物がクロールで泳いでいた。

この話で基本的な属性が推測できた。ひとり住まいの、たぶん女
性……。

オルカには荒井由美の「あの日に帰りたい」が流れていた。

柏原がブログを黙読している。

生駒は、「青春の後姿を人は皆忘れてしまふ、あの頃の私に戻つ
てあなたに逢いたい」という歌詞を、心の中に転がしていた。

「もう間違いないよ。これ、朱里さんにも来てたんやね。……とい
うことは、『幸田さん』は、ノブと朱里さんと弓削さんの共通の友

人ということになるやん。で、スイミングに行くんやから、やはり女性かな」

「どうかなあ。ということは、コナラ会の女性陣のひとりですか」
弓削が眉をひそめている。

「大阪で有名な山の近くに住んでいる人よ」と、優が手帳を開く。
「えっと、佐藤恵さんは奈良の帝塚山。上野月世さんは都島区か。第一話のときに、自転車で山の麓まで行く話があったけど……」

立ち上がり、カウンターの後ろに回って、弓削の後ろからパソコンを覗き込もうとする。

「都島区からは、ちよつと無理かなあ。帝塚山からなら、生駒山に……」

「それもきついやる。それに、夜遅く駅前の食堂で晩飯を食ってるというのは、恵じゃない。旦那も子供もいるんやし」

「そうやねえ。じゃあ、それ以外の女性陣？」

「関西にいてる奴でも、最近は、とんと付き合いがないからなあ」
「ノブの方は付き合いがなくなったと思ってても、向こうはそれほど遠い存在と思ってないのかもしれないやん」

「うーん。どうにもこうにも、ぴんと来ないなあ。それになあ」

生駒たちの共通の友人という説は、少し考えると欠点があるということがわかる。

つまり、『幸田さん』が朱里と友人で、かつ生駒とも友人であっても、三人が共通の友人同士だとは限らない。弓削が入って四人になっても同じことだ。

生駒や朱里、弓削はいわば同業者。

互いに知らないけれども、共通の友人がいる可能性はある。

それに、『幸田さん』は友人という言葉を使っているが、友人と

いうほどの仲ではなく、知人という程度かもしれない。それなら範囲はぐんと広がってしまう。

とてもコナラ会メンバーに絞り込めるものではない。

しかし、このブログの記録が朱里のパソコンに保存されていたことは事実であって、これを素通りしてしまうわけにもいかない。そもそも、朱里の事件に関係するものかどうか分からないが。

「あ、そうか！　もしかすると、朱里さん自身ということもあるやん。ウェブページを、記念にファイルとして保存しておくかもしれないし」

優が、もつとよく見ようと体を乗り出す。胸を押し付けられた弓削が、たまらず「代わりますよ」と顔を赤らめた。

優は自分で手を伸ばし、落ちてくる髪を耳の横で押さえながら「station・files」というフォルダの中の画像を開いた。

「ねえ、ノブもこっちに来て見たら？」

やれやれ、と生駒は立ち上がったが、パソコンを覗き込むなり、素っ頓狂な声を上げた。

「ありゃ！　この写真、もしかして住道駅？　おい、弓削、どう？　ほら、この」

画像は駅のコンコースらしきところを写し出していた。

雑然としていて、いろいろなものを捉えている。

何の変哲もない近代的な建物の内部で、床は白っぽいタイル貼り。素材はわからないが天井も白。光線の加減かもしれないが、柱や壁は肌色のように見える。画面の右手には屋外への出入り口が並んでいるが、露出オーバー。白く飛んで、景色は分からない。

「どうも、そんな気がするんやけどなあ」

「そうですね……」

画像の中央に男性らしき人物の後ろ姿が比較的大きく写っていた。派手な縞模様のワークシャツにジーンズ。白いスニーカー履きで手ぶら。

無帽で髪は短く刈り上げ、中年太り。

男の前方に、旅行のチラシのようなものを差し込んだラックが三本。

その先にはワゴンと、青い帽子をかぶった女性店員とスーツ姿の男性客。

百円、ケーキ、タイムサービスと大書きした緑地に白文字の幟。さらにその遠方に、駅の自動改札機が見え、横には売店がある。天井から吊り下げられた丸い時計が、五時二十分を指していた。掲示板の前には数名の人物。

画面の手前左側には、喫茶店のような店の窓の一部と、ピンク色の幟の裾の一部が写っている。

駅には違いない。

しかし、鉄道会社名や駅名など、場所を具体的に示すものは画面に入っていない。

「そうかもしれない……。でも、よくわかりません」

優があっさりその画像を閉じ、「clarinet」というタイトルフォルダを開いた。

「これはクラリネットの話か。ね、ノブは何番目まで読んだっけ」「忘れたよ。たぶんスイミングの話」

優が再び「station」の画像を出した。生駒はまた言う。「やっぱり住道駅や。この店、『ホットマインド』のように見えるし」

柏原を真中にして、四人は顔をくつつけるようにして、画面を覗

き込んだ。

店の設え、改札口まわりの雰囲気、外部への出入り口との空間的構成……。

「住道からなら、生駒山の麓まで、自転車で行くと思えば行けるかな」

「じゃ、朱里がこのブログを……」と、柏原が唸る。

このブログには重大な事柄が隠されているのかもしれない、『幸田さん』が誰なのかを突き止めなくてはいけない、と生駒は思った。優がピンと張った声で次のファイルを読み始めた。

『クラリネット

私はこの楽器を何度やめようと思ったことか。

小さいころから習い始めたものの、自分で満足できるほどには上達しない。

今は小さな社会人バンドに入って活動してはいるが、発表の場がそれほどあるわけでもなく、練習にも行ったり行かなかったりで、熱が入らない。

燃えるものがないのだ。

ではなぜ続けているのか。

趣味だから？

楽器の手入れをしていると心が休まるから？

楽器のできない人に対してかすかな優越感が持てるから？

かすかな優越感……。

そうかもしれない。決して褒められた理由ではないが。

先日、珍しく京都のバーで出演していたときのことだ。

演奏後に、客席から私にだけ呼びがかかった。

きちんとスーツを着こなした紳士が、私のために注文をとってく

れた。

こういうところで聴くクラリネットって、珍しいですね。
今の演奏、とてもよかったですよ。

こんな店では、単にバックグランドミュージックとして演奏しているだけですから、心に響く演奏をする人は少ないですね。
耳を傾けている人も少ないですし。

でも、あなたの今の演奏を聴いて、ほのぼのとした気分になりました。

そう言っ、私の演奏を賞賛してくれた。
ただそれだけのことだ。

でも、私はうれしかった。

つかの間、ちょっとした演奏家のような気分になれた。

では練習になぜ熱が入らないのか。

改めて考えてみると、この楽器には苦い思い出の方が多くように
思う。

練習に明け暮れて、若い日々を台無しにした高校時代。
報われなかった努力。

そうだ。

しばらくこの楽器から離れよう。

そして、今新しく挑戦しようとしているものに集中しよう。

六月二十一日』

黒いクラリネットの写真が付いている。

「そっ、いや、高校のとき、朱里は吹奏楽部に入っていたぞ。クラリ
ネットをやっていた。お、これこれ」

生駒は隆之に借りてきたアルバムを取り出した。
柏原と優と弓削が、ものめずらしそうに生駒や朱里の昔の顔を眺めた。

校庭の藤棚で撮影された集合写真……。

「あ、これ、朱里さんですね」

「ノブも、こんなにスマートやったんや……」

「しみじみ言うなよ」

オルカのBGMが移り変わっていく。

八神朱里が、思い出は美しすぎて、と歌っていた。

19 思い出は美しすぎて

……高校時代。

休み時間。

生駒は校舎の三階の廊下を歩いていた。

薄いピンク色の人造石が貼られた廊下は、白い漆喰の壁が艶の出した木の腰壁と相まって、いかにも伝統校らしい雰囲気醸し出していた。

生徒達の騒ぐ声がよく響く。

青いペンキがこつてりと塗られた鉄の枠窓は重く、お世辞にも美しいとはいえない大阪浪速区の街並みの風景を縁取っていた。

唐突に後ろからぶつかられて、危うく持っていたノートを投げ出しそうになった。

やれやれまたか。

「危ないなあ。もうちょっとで階段から転げ落ちるとこやないか。俺を殺す気か」

ニコニコしながら後ろに立っているのは、同じクラスの津並美香だった。

「今度はなんや？」

美香は、まだなにも言わない。

ボーイッシュな髪型に大きな目がチャームिंग。

生駒は、フーと大げさなため息をついてから、立ち去ろうとした。

が、美香は後ろからすばやく生駒の袖を取ってくる。

数ヶ月前に美香に同じことをされたときには、心が波立ったもの

だ。

女の子と腕を組んだり手をつないだりすることは、たまにはあった。好きな子が相手ではなくても、クラスの大勢で奈良公園にピクニックに行ったときなどは。

いわば、おらかな若人の楽園にでもいる気分になったものだ。ふたりきりのときには恥ずかしくてできないことが、友達と一緒にのときなら冗談として許される。

しかし、校内で美香に袖をつままれたまま歩くという照れくさくて頼りない接触は、腕を硬直させ、指先ひとつで体全体を押さえ込まれたような気分だった。

「なあ、頼むから、突き飛ばす挨拶というのは止めてくれないかな。しまいにむち打ち症になるかも」

「そうやね。でも生駒くん、案外、喜んでたもん」

「アホいえ。それとな、袖をつまむのも、格好悪いからやめろ」

「シャイだなあ。妹みたいでいいやん。だいいち、学校の中で腕組むわけにもいかないでしょ」

「一緒のことや。いいから、放せ」

「はいはい。ねえ、知ってるでしょ。朱里と木下くんのこと」

これは生駒にとって、避けて通りたい話題だった。特に美香に追求されるのは。

「先週の何曜日やったん？」

「なにが？」

「ダメ、ごまかしても。聞いたんやから。生駒ちゃんと木下くんが、朱里の家まで行ったこと」

「誰から聞いた」

「誰でもいいでしょー。あれ、これって秘密なん？」

生駒は階段を降り始めた。美香にまだ袖をつままれている。

「それで、どうやった？ 朱里には会えたん？ ねえねえ、なぜそんなことしたん？」

「おまえが自分で木下に聞け」

「そんなことできるわけないやん。生駒くんやから聞いてるんやんか」

美香が、袖を右へ左へと引つ張った。通り過ぎる生徒が見て見ぬふりをしている。生駒の耳たぶが熱くなっていた。

「だから、放せって」

生駒はあの夜の出来事を話すつもりはなかった。というより、人に話すような特別なことはなにもなかったのだ。

「ねえ、隠すようなことなん？」

食い下がってくる美香。

この女生徒が付き合っている木下は、生駒の級友だった。

しかし実は、調子のいいやつ、という少し不愉快な感情も併せ持った友情である。ただその感情が、軽い嫉妬かもしれないということに、生駒は気づいていた。

先週の休日に、その木下が朱里の家に行ってみることを思いついたのだ。

もし、家の外からでも朱里の気配を感じることができれば、彼にとつて満足できる成果だった。

いわば、子供っぽく、少々気の弱いアドベンチャー。

ただ、もし朱里に姿を見られたなら、みつともないことこの上ないし、軽蔑されるかもしれない。あるいは警戒されるかもしれない。そこで、ちよつとした街遊びの延長であることを強調するために、生駒を誘ったというわけだった。

生駒は気が進まなかった。

しかし、本心はどうだったろう。

アドベンチャーの標的は朱里だ。興味を持ったことも事実で、結

局は、その他愛ない企てに付き合ったのだから。

そして今になって、予想通り生駒は自分の軽はずみな行為に幻滅していたのだった。

生駒は階段の踊り場で立ち止まった。

「なんで俺に聞く？」

「そうねえ……、あなたが私の友達だから、かな。それに生駒くん、朱里のこと、好きなんですよ」

「な！」

「いいじゃんか！ むきにならなくても！ ねえ、お願いやから、あなたの友達を、青春の悩みから解放してよ」

「思いつきで、だれかが好きやなんて、あんまり言いふらすもんじゃないぞ。いいか」

「はい。でも、それってどういう意味？」

「うるさい！」

どうせ木下が、自分から美香にしゃべったのだろう、もしかしたら生駒に頼まれて付き合ってたとしても言ったのかもしれない。急に腹立たしくなってきた。

「この前の日曜。自転車で朱里の家に出かけた。木下がどうしても頼むって言うから、付き合ってた。えらい迷惑や。木下は朱里の家の近くやからいいけど、俺は」

「何時ごろ？」

「晩の八時前」

「それで？」

「家の前まで行った。それでおしまい。あいつ、朱里を呼び出すわけでもなく、電話するわけでもなく、まして忍び込むわけでもなく、ちょこつと家の様子を見ただけ。すぐに帰ってきた。あほらしい」

「それで木下くん、どんな感じやった？」

「どんなって」

「だからさあ、うれしそうやったとか……」

「んなことは、おまえが自分で聞け。だいたい、この話、木下から聞いたんやろ？」

「え、なんでよ？ まさかあ」

「ちがうんか？」

「ううん、ちがうよー」

「なら、誰から聞いたんや？」

「朱里」

「嘘つけ！」

「あのね、朱里は知ってたよ。生駒さんと木下くんが、て・い・さ・つに来たって」

生駒は顔に血が昇るのを感じた。

「てつきり、朱里に会ったのかと思ってたのに」

生駒はその場を退散した。顔のほてりを美香に悟られなくなかった。

恥ずかしさで足がもつれそうだった。

教室には戻らず、そのまま校庭に出た。風にあたりたかった。

校庭の向うに通天閣が見える。

渡り廊下にクラリネットのケースを抱えた女子生徒。

音楽教室のある別館に歩いていく。

朱里だ。

と、朱里は藤棚の下ベンチに座り、生駒に気づいて、大きく手を振ってきた。

優が挟んであった写真をつまみ出した。

「これは？」

生駒は朱里の前の学校での写真だろうと説明してやる。

「どういう理由かは知らないけど、誠光学園高校に一年行ってから、

「エビ高に転校してきたんや。朱里は俺よりひとつ上」

「ふーん。これさ、裏、見て」

「ん？」

「物騒なこと書いてある」

「並んだイニシャル。」

「殺人予告」

「ええっ！」

確かにS・A・T・U・J・N・Y・O・K・O・K・U。

六人の女子生徒の名。

「古いインクだ。たまたまだろ」と、柏原がにやりとした。

20 ひろこず

㊦ 食堂

ああ、最近、来てくれはるようになったあの女の人な。うちらみ
たいな食堂には珍しいお客さんや。晩に女性ひとりで来てくれはる
んやから。

おとうちゃん、覚えてるやろ。いつも晩遅くに来て話し込んでい
く女の人。ほら、ちよつとスラツとした。

あの人、この近所のマンションで、ひとり暮ししてはんねんで。
こないだ来てくれはったときに言うてはった。

顔出してくれはるんは、だいたい九時とか十時くらい。

仕事の帰りやて。遅うまで頑張りはんなあ。

なんやようわからんけど、デザイン関係の仕事をしてはるんやて。
そんなん考えると、ほんまに頭が下がるわ。

おとうちゃん、ほんまによかったなあ。

ああいう洒落た女の人も来てくれはるようになったんも、思いき
って店を改装したからやで。

このカウンターもびっくりするくらい費用かったし、椅子にも
お金かけたけど、そのかいがあつたやんなあ。

六月三十日

㊦

写真には、六十前後の女性が小さく写っていた。

青い和服にエプロン姿。

気さくそうな丸い顔が笑っている。ただ、カメラ目線ではない。
店内風景だ。

真新しい白木のカウンターには大皿に盛った色々な料理が並んで
いる。後ろの土っぱい色の壁には黒板が掛けてあるが、文字は小さ
くて読めない。本日のおすすめなどと書いてあるのだろう。

造り付けの棚には数十本の日本酒の瓶が並んでいる。それぞれが違うラベルなので、各地の地酒などを飲ませる店のようだ。

☐ 駅

冗談やない！ 言いがかりはやめてくれ。

俺がいつ、あいつをつけまわしたあ？

ふざけるな！

駅からたまたま一緒の方に歩いて行くだけで、ストーカー呼ばわりか！

もう中年のおばはんが、ええ歳こいて、自意識過剰なんじゃ！

ええつ、なに！ 俺の行き先？

家に帰るんや。

決まってるやろ。

向こうに、M金属工業の寮が見えてるやろ。あそこや。

あのおばはんのマンションの向こうや。

いったいおまえら何を考えとるねん。

なんでこの俺がそんなアホなことで、警察に同行せなあかんねん。ほんまにえらい迷惑や。

もつええやろ。帰らしてもらうで。

さてさて、これで私のお話は終わりです。

大いに自慢たらしい部分もありましたが、自己紹介という意味で大目に見てください。

赤面の至りですが、くれぐれも「いやなやつ」と誤解しないでくださいな。

さあ、後は待つだけ。皆さんお待ちしていますよ。

た・の・し・み ム (*´・`*) マタネー

七月十八日 ㊦

この回は、写真はなかった。

「これでおしまいカ」

柏原が気の抜けたような声を出した。

優が狭いところで強引に伸びをして、弓削をのけぞらせた。

「結局、このクイズ、正解者はいなかったということかな。解説編がないんやから」

「青いのれんの食堂のおばちゃんと、M金属工業の寮か。弓削、ありがたいことに明日も忙しい日になりそうやな」

そう言う生駒を、柏原は感心したように見て、フフンと笑った。

生駒は隆之の携帯番号を押した。

「隆之くんの話では、クラリネットと水着やスイミングキャップは部屋にあるそうや。サボテンはない。キャットフードはあるけど、黒い猫は見かけないということやった」

今日は普通に営業するというオルカを出て、弓削とJR天王寺駅で別れた生駒と優は、阿倍野近鉄百貨店の裏にあるおでん屋に向かった。

朱里のパソコンは柏原に預けてある。

朱里がああのノートを日常的にどれほど利用していたのかはわからない。

ただ、キーのテカリからすると新しいものではないのに、保存したデータがほとんどなかった。

エッセーの下書きのようなもの。

これには会社を辞めて独立するに至った心情が箇条書きで記され

ていた。

料理のレシピ集。

家庭料理というよりお手軽なパーティ料理のレパートリー。

商業デザイン、ポップデザイン、パッケージデザインなどといったタイトルだけのフォルダ。

インターネットのお気に入りには、ポータルサイト、行楽地ガイド、東京の案内のページがいくつか、天気予報、交通情報、経済ニュースのサイトなどが登録されているだけだった。

「言い忘れてた。今日ね、赤石っていう私の友達に電話してみたのよ。もしかと思ってさ」

「生をふたつ」

「そしたら大当たり。旦那の名前は剛志で、千日銀行に勤めているんやて」

「ウズラ卵と、はりはり巻き。それとひろうずとジャガイモ。全部二個ずつ」

「やっぱり関西は狭いよねえ」

「あ、その白いのなに？ はんぺん、それも二個」

「その友達っていうのは、昔コンパニオンやったときの仲間。というか、大先輩。向こうがずいぶん年上やし、親友というほどでもなかったから、最近はご無沙汰やったんやけど」

「へーえ、そんなこともあるんやな。で、優は旦那の方に会ったことがあるんか？」

「うん、一回だけ。ほとんど記憶にないけど」

「ふーん。さ、食べよ」

「だいぶ前やしね。彼女の結婚披露宴のとき。あれ、なに変な顔してるん？」

「ふーん、そうか……」

「えっ、あーっ！ そっか！ ノブも新郎側で出席してたん？ じやあ、あのときに私達、顔を会わせてたん？ うへ、恥ずかし！」

優はしきりに腐れ縁やねえ、などと言いながら、ひろつずをいじくっている。

「あっ、ちよっとお　ということは、柏原さんとも会ってたってこと？」

「そう」

「うへ！　腐れ縁」と、また言っつて、優はひろつずにかぶりついた。

「それでさ、彼女と来週、久しぶりに会いましょうということになつてね。薫さんっていうねん。覚えてる？」

「ああ」

「へえ、珍しいやん。……なんか、怪しい」

「なにが？」

「なぜそんな昔に一度会っただけの人の名前を覚えてるん？　赤石さんがいつも話題にするん？」

「いや。彼は、家族の話はまずしない」

「じゃ、なんで？」

「薫っていう人、旧姓は？」

「えっ？　あ、ええええっ！」

生駒は知らん顔して、ジャガイモにかぶりつく。

「そんなあ！」

「おい、ひろつずが口から出てるぞ」

「まさか、まさか！」

「ハハハ。そう！　柏原の妹」

「うつそー！」

「俺と朱里も、そういうこと」

「高校卒業以来、会ったこともなかったのに、何年も経ってから再会した。赤石さんと柏原もそう。アーバプランのクライアントの担当者が赤石さん。付き合っていた弁護士事務所の使い走りが柏原。ふたりは大学のときのクラブ仲間やった。ひょんなところで再会し

た。たまにはあるよな、そんなこと」

「たまにつて、あるかい！ そんなこと、めったに」

「ふたりは大学の柔道部仲間。もうひとり、紀伊という男の話も出てたやる。あいつも同じ柔道部。三人まとめてチューリップって呼ばれてたらしいで。赤、白、黄色」

「はあ」

「で、この三人はお互いの家にもよく行き来して、柏原と妹も含めた四人で遊びに行くこともあった。そして、いつのまにか赤石さんと柏原の妹は結ばれた。相当な晩婚だけどな。さすがの柏原もひっくり返つたらしいぞ」

生駒も楽しい気分になっていた。

「腐れ縁つていうのは、単に古いというだけじゃなくて、すえた臭いがするとか、もつと有機的に複雑な変化が進んでいる関係のことを言うんやろ。俺たちのはそんなんじゃない」

「ううん、私達のはそういうもんかな。ちょっと臭い始めてたりするやん」

21 つたない聞き込み

局地的集中豪雨ともいえる激しい夕立のせいで、オルカの前の路地には大きな水溜りができていた。

今は、先ほどまでの空が嘘のように晴れ上がり、九月のまだ力のある太陽が輝いている。

「調査の報告をしてもらおうか」

生駒と弓削と優がオルカに集まっていた。二度目の推理会議である。

「なんか楽しんでるやろ」

「当たり前だ。陰気な顔してこんなことできるか。やってられないと思うからこそ、意識的に楽しんで気持ちを鼓舞しないと」

そうか、と生駒もにやりとした。

同感だった。

柏原は弓削にも同意を求めたが、こちらに笑顔はない。生真面目なこの男のことだ。あるいはまた西畑刑事の訪問でも受けたのかも知らない。

生駒にとって、弓削はまだ嫌疑の外には出ていない。しかし、事実を解明したいという申し出を断るわけにもいかなかった。不適切な言い方かもしれないが、推理会議に参加させておいて、様子を見ようと柏原とは話し合っていた。

「それにしても、最近、柏原、センチ過ぎないか」

オルカには今日もまた、ぐつとくる歌が流れていた。

「なんで、いちご白書をもう一度なんや」

「おおブレネリ、なんかよりいいだろ。さあ、報告」

「ああ。昨日の夜、上野さんから連絡が入った」

「で、なんと？」

「とりあえず朱里が死んだことを伝えただけ。すぐに帰国するって」
「了解」

「次は、三好千草って女性に会った件。彼女の話は……」

朱里と三好は、青山企画の先輩と後輩の関係である。

三好は朱里から新しく設立するデザイン会社に誘われ、ふたりは同時に会社を辞めたのだという。

三好は朱里が起こす会社に飛び込むことに不安はなかった。
むしろ、自分達の実力で仕事をしていける環境に魅力を感じていた。

朱里のデザイン力や実績と、理解者でもある顧客とのつながりを活かして、新しいプロジェクトに情熱を注いでいけることに夢を持っていた。

会社を設立する準備作業も楽しかったし、順調な滑り出したともいえた。

安心感といえば、朱里の顧客で、長い付き合いのある大迫という男が、パトロンとして協力してくれていることも大きかった。

唯一の気がかりといえば、新会社の人的財産ともいえる提携デザイナーの参加者が、このところの不況のせいで廃業している者が多く、関西では優秀な人材がなかなか集まらないことだった。

しかし、とりあえずは小さく始めればいいわけで、まずは会社の基礎固めが先決だった。

ところが、頼りにしていた朱里が自殺した。

当然、非常に困った事態になっている。会社は正式に登記する前だったものの、実質的には数件の仕事ですでに始まっていた。

「三好は今後のことについて、今はなにも考えていないそうや。た

ぶん、再就職先を探すことになるやろうとは言ってたけど」

「そうか、大変だな。いくら設立前でも、清算することはたくさんあるだろう。かわいそうに。それをひとりで処理するんだから」

柏原の反応に、生駒は告別式の日、喫茶店で涙ぐんだ三好の黒い装いを思い出した。

「で、肝心の朱里の交友関係は？」

「ああ、それについては」

「中道さんの交友関係？ 仕事以外のご友人のことですね。あいにくですが、ほとんど知りません」

三好は、握り合わせた両手を口元に持っていた。背筋を伸ばした姿は、祈りを捧げているように見えた。

古びた事務所の内装は、清潔な白い色に最近塗り替えられている。雑然とさまざまなものが散らかっている。三好の質感の乏しい白い肌は、心なしか青みがかって見えた。

やつれた様子。

そう感じる理由が、無造作に後ろに束ねた髪が乱れているせいなのか、化粧けがないからなのか、張りのない疲れた声のせいなのか、生駒はわからなかった。

「ほとんど、ということとは？」

「はい、でもお付き合いをされていた方はおられたようです」

「青山企画の人ですか？」

「いえ、それは違うと思います。それなら私にもわかると思います」

三好はなにも答えることができないようだった。

生駒は、追及調にならないように気をつけていたが、リラックスして初対面の人に事情聴収まがいのことをするのは難しいものだった。

つい、先を急いで詰問調になってしまふ。

それに、今日の会談には、もうひとつの意味があった。三好のアリバイを確かめることも重要な目的だったのだ。三好には個人的に聞きたいことがあると面談を申し込んでいたのだが、それを切り出す糸口はまだなかった。

「厚かましい質問ばかりしてすみません」

「いえ。生駒さんのお気持ちは、私にもよくわかりますから。それに、ご家族の方のご希望でもあるのでしょう？」

はい、と生駒は嘘をついた。

「ところで、警察はあなたのところにも来ましたか？」

「ええ」

「どんな話をされましたか。よろしければ聞かせていただだけませんか」

三好は伏せていた目を上げ、久しぶりに生駒の顔を見た。目が潤んでいた。

「ええ。でも、警察の方の参考になるようなことは、なにもなかったでしょう」

「立ち入ったことをお聞きしますが、資金面では大迫さんという方からの出資だけなのでしょうか」

「はい。でも、中道さんは将来的には、銀行からの融資も受けたいとおっしゃっていました」

「千日銀行ですか」

「はい。赤石さんという支店長さんが懇意だとかおっしゃって、最近頻繁にお会いになっていたようです。生駒さんともお知り合いの方だろうと思います」

「ええ。そうです。ところで大迫さんという方はどんな方なのでしょう。つまり、支援されていた理由というか、中道さんと、その…、どんな関係なのか……」

三好が久しぶりに笑顔をみせた。

「お会いになるんでしょう。そうすればわかります。それに、支援の理由は直接お聞きになった方がいいと思いますよ」

私達の会社は人が資産なので、設備投資はそれほど必要ない。事務所も知人の好意で、ただ同然で貸してもらっていると三好は説明してくれた。

生駒は迷った。

沈黙が流れた。口を開かねばならなかった。

「えーと、それから警察にどんな話をされましたか？」

三好がまた目の下を暗くした。

「私の場合はアリバイを聞かれましたよ」と、生駒は朗らかにいった。

「あつ、そうでした。私も、中道さんが亡くなった日の居場所を聞かれました」

「あれは、なんとなく落ち着かない気分になるもんですね」

そういつて、生駒は待った。

「あの……、私は、八月四日は友人とドライブに……。五日はいつものように朝からここに出社しましたが、中道さんは来ませんでした。連絡がないのはおかしいと思って、携帯に何度も連絡を入れましたけど、繋がりませんでした。昼からは、予定をしていた打ち合わせにひとりで出かけました。行き先は姫路です。午後二時に着きました。そのように警察官に答えました」

「そうですか。土曜日は出勤ですか？」

「ええ。週休二日なんて、贅沢いつてられませんから、あ、ちょっと待つてください」

三好が手帳を開いた。

「あつ、すみません。この日はお休みでした。中道さんがたまには

お休みにしようとおっしゃられて。このところ働きすぎて、ふたりとも疲れているからと。それで私は、一日中家でゆっくりしていたと思います」

「なるほど。ところで、中道さんが山登りに行くことは聞いてられましたか？ 八月四日か五日にです」

「いいえ……」

生駒は礼をいって立ち上がった。

生駒の報告を聞きながら、柏原が「悲しくてやりきれない」を口ずさんでいた。

「ケツ、調子に乗ってるな」

「それで四日はドライブだと言ったな。誰とだ。確かめたか？ それに三日の件はどうだ？」

「アホ。そんなことできるか。あの人は関係ないと思う」

「なぜ、そう思う？」

「なんとなく。彼女は悲しんでいる。告別式のときも泣いていた」
「そのように見えた、ということだろ」

柏原はさらりと言つてのける。

おまえなあ、と言ったきり、生駒は反論ができない。

「うっ、わかった。そのとおり。でも、彼女には朱里を殺す理由がないやろ」

「人殺しの理由なんて、部外者には窺い知れないぞ。本当の動機が明らかになるのは、犯人が捕まってから」

柏原は腕を組んで、すました顔をしている。

次は弓削の報告だ。あの写真はやはり住道駅のコンコースだったという。

駅の北側には、青いのれんの食堂。店の名は桔梗。

「実は僕も何度か入ったことのある店です。で、おばちゃんにコンナ会のときの写真を見せたら、どう言っただと思います？ 僕のこと

は全然覚えていませんでしたけど、朱里さんを見て、この人はうちの客だ、と言ったんです！」

「あれはやっぱり朱里さんのブログ……」と、優がつぶやいた。

弓削は食堂の女将にコナラ会の会報の取材だとかまかして聞き込みをしたらしい。

22 プライバシーのかけら

「ああ、この女性は知ってますよ。ちよくちよく来はるからね」

「ああ、やつぱり。よかった。それで、いつもどんな感じでしたか？ えーと、普段、何時ごろに来てましたか」

「そうやねえ、晩の八時とか九時とか。もっと遅いときも。うちは夕方からしか店を開けてへんから」

「はい。で、なにか彼女が話していたことを覚えておられますか」

「そうやねえ。少しくらいは話したことはあるけど、常連さんというほどでもないよってなあ。どんな話と言われても……。ところであの人、なんていう人？」

「あつ、すみません。中道っていいいます」

「ふーん。中道さんね。話したことというても、あの人の仕事のことかくらいで。私らにはようわからんけど。ちよつと待ってや。思いう出すよってに。ん、そやそや、設計関係の仕事をしてはったんやけど、会社を辞めはって。あ、そか。そんなこと、あんたらも知ってはるわな。あんたさつき、コナラ会って言うてたね。それ何の会？」

弓削はでたらめな説明をした。

「へえ、会社勤めの人もそれはそれでたいへんなんやね」

「はあ。それで彼女は会社を辞めたことで、なにか言っていましたか」

「そうやねえ、今の仕事は楽しんでるって言うてはったけど。今度来はったら、聞いとこか？」

「あつ、いえ、いいんです。今度の記事は内緒の企画なんです。中道さんはいつもひとり来ていましたか」

「いつもはね。あ、ちよつと待ってよ。そう、ふた月ほど前になるかな、男の人と一緒に来はった。しやけど、あんた、なんでそんな

こと聞くのん？ どんな記事、書くつもりなん？」

「実は中道さんは、あの…、いえ、その男の人というのは、どんな人ですか。そうだ、この中にいますか？」

弓削はもう一度コナラ会の集合写真を取り出した。

「うーん、そうやなあ、覚えてへんなあ」

弓削は赤石の顔を指で示した。

次に紀伊の顔。そして蛇草や竹見沢の顔。最後に生駒の顔も。

食堂のおばちゃんは首を捻っていたが、やがてあきらめて写真をぴらぴらさせ始めた。

「あんた、取材っていうより、なんや刑事の聞き込みみたいやな」
悪気のある言い方ではない。ニヤニヤしている。興味が沸いてきたという様子だ。

「すみません。新米なものですから、取材のしかたがまだ飲み込めなくて。それで、なにかどんなことでもいいですから、覚えておられることはありませんか。その男の人について。例えば眼鏡を掛けていたとか、太っていたとか、どんな話をしていたとか」

「そうやねえ。あの人と同年輩くらいで……。感じの良さそうな人やったような気がするわ。なぜかってわからへんけど、印象だけ」

「はい」

「それから、あ、そだ。きちんとしたグレーのスーツを着てはった」
「はい」

「山登りの話なんかをしてはったなあ。今どきはエリートっぽい人も山登りなんかをするんやね。後は、うーん、だめ。覚えてない。悪いなあ。あんたに氣いつこて、言えへんのとちゃうんよ」

「そ、そうですか。じゃあ、中道さんはその男の人をどう呼んでいました？ さんづけ？」

「うーん。いや、もうなんにも思い出されへん。悪いけど」

「はい……」

「ところで、あんた、取材してるんやろ。この店のことも、ちょっとは聞いてえな」

ということでありました、と身振り手振りで熱演の弓削は、ホッと息を吐き出した。

「大活躍やな」

「へへ。まあまあ参考になりそうな話だったでしょう」

「その相手の男が誰なのか、こいつは興味あるな」

グレーのスーツは誰が持っていたても不思議ではない。しかし暑い時期のことだ。

例えば塾講師の蛇草や医者鶴添はスーツを着て出かけないかもしれない。

「設計事務所やデザイン事務所の社長はどうだ？」

「まず着ないな。そもそもスーツというものを持ってない」

そうですね、と弓削も相槌を打つ。

「それからM金属の寮。ありましたよ。朱里さんのマンションの裏に。でも……」

柏原が大きく頷いた。

「あつ、そうや！ 柏原さん！ 妹さん、薫さんっていうでしょ……」

……

こんなタイミングで優が素つ頓狂な声をあげた。柏原を驚かせようという意図がありありだ。

「フフン、生駒から聞いたぞお」

「なんやあ。びっくりさせたろと思ったのに！」

と、見事にあては外れてしまう。

「ユウ、生駒はなあ、おまえのことはなんでも僕に話してくれるんだぞお」

「おい！ ややこしい言い方をするな」

「へえー、ノブがあ？」

優が子供のように、カウンターを叩いておもしろがった。

「ねえ、ね、柏原さんも、私のこと知らなかったやろ。何年か前に会ったことがあるって」

「ああ。妹の友達なんて興味なかったし。ただただ、やかましい連中」

「失礼な！ だいたい、披露宴で騒がしいのは、新郎の会社の人っていうのが相場やん！」

「はいはい。本題に戻るぞ。弓削、今なにか言いかけてたな」
弓削が神妙な顔をしていた。

「はい……、どうもあのブログの主人公、住道に住んでいるように見えるんですが、僕には朱里さんだという気がしないんです」

「朱里だとまだ決まっていないぞ。でも、なぜそう思う？」

「いえ、理由は特にないんですけど……。らしくないというか……」

確かにそうだった。

「まあなあ……。ま、今はまだペンディング。さてと、次は紀伊の話しよう」

優の顔が引き締まった。

柏原が電話で聞いたことを披露した。

「あいつは朱里が死んだことを知らなかった」

三重の工事現場が忙しいので、大阪には盆休みの三日間しか帰っていない。犯行日前後は現場から出ていない。証人は大勢いるらしい。

「次は竹見沢さん。こつちの話は少し興味があるぞ」

朱里は大学に竹見沢さんを訪ねていた。しかも何度か。

六月下旬ごろまで。竹見沢さんの専門の色彩工学をインテリアデザインに活用できないかと聞きに行ったらしい。が、竹見沢さんい

わく、実のところ朱里は、もつと実質的な協力を頼みたかったようだ。会社の顧問として。

生駒はおもちゃの金槌で頭をぽかんと殴られたような気がした。ちよつと寂しい。大学教授の箔など、デザインの仕事に関係ないと思うが、朱里あるいは彼女が起こそうとしている会社にとっては価値あるものだったのかもしれない。

「竹見沢さんは断つたらしい。忙しいからって。きっと振り回されるのは堪忍ってことだと思うけど」

友として飲みながら相談にのる、というようなシチュエーションなら気は楽だ。

会社の取締役や顧問として名を連ねるといふことなら、確かに振り回されるという表現で逃げ腰になるのもわかる。

しかも彼は、国立大学の教授だ。しかし生駒は、竹見沢が先輩ぶっているわりに水くさいとも思うのだった。

「朱里さんが竹見沢さんに会いに行っていたということですか……」
弓削の顔にも、心なしが落胆の色が浮かんでいる。

「三日、四日は福岡で開かれた学会に出席したし、五日は学校に出たので、アリバイは問題ないらしい。ま、彼の話もうのみににはできないけど。男と女の関係なんて、長い間にどうなってしまうかわらないからな」

「なんだか意味深な言い方。で、とりあえず要マークと」
優が手帳に書き込んだ。

「彼は関わりたくないのだろう。珍しく、迷惑そうな口ぶりだった」
「ケツ。告別式の日、喫茶店で話したときはハイだったくせに」
弓削が文句をいう。

「だいたい、告別式だからってハイになる人がいますか？」
普段は物静かな弓削が息巻いている。竹見沢も嫌われたものだ。

「でも、あの人を調べるのなら慎重にやらないと。ボタンを掛け違
うと、どんどん不愉快になりますからね」

プライドだけはおもいきり高い男なのだ。高くてもいいのだが、
悪いことに彼の場合はそれが表に出ている。

「秘書か誰かに、朱里さんが大学に出向いたときのことを、聞いて
みるというのはどうですか？」

柏原がぽんと手を叩いた。

「そうしよう。ユウの出番だな」

「は？」

「俺たちは竹見沢さんにすぐわかってしまっ。ユウ、なんとかごま
かして聞く方法を考えてくれ」

「げげっ、それってむづかしそう」

といいながら、優はやる気満々。

竹見沢の専門について、生駒たちが知っている範囲の知識を手帳
に書き込んでいった。

「じゃ、次、行くか」

柏原は佐藤が京都市内で資産活用セミナーに参加してプログラム
通りブースに座っていたことを主催者に確かめていた。

「ところで優秀な生駒には、ちょっとしんどい役がある」

「昔、サラリーマンのときに上司がそんな言い方をしとった。たい
へんやりがいのある仕事のようで、ありがたいことです」

「鶴添さんのこと。おまえは誘っていないんだろ。蛇草さんに誘わ
れてきた。うーむ、なんだかなあ。なぜ？」

「たいした理由はないぞ」

「そうじゃなくて、なぜ蛇草さんは鶴添さんを誘ったんだ？ 蛇草
さんは先日の会合を単なる飲み会だと思っていたわけじゃない。そ
うだろ？ なのに朱里と親しかったわけでもない鶴添さんを誘って

きた」

「おかしいか？」

「理由がわからない。たいした意味はないかもしれないけど、この前の蛇草さんの態度と矛盾しているように思わないか？それに、誘われたからといって、なぜ鶴添さんは来たのか。あの日は平日だ。あの時間ならまだ午後の診療が終わっていなかったはず。途中で診療所を閉めてまで来たわけだ。ということは、なにか意図することがあったと考えられないか。どう思う？」

「なるほど、難題やな。それを俺が聞くのか？」

「そう」

「しかし、あまりあのふたりと縁がないんやけどなあ。気が重い…

…」

「生駒ならやれる」

「あのなあ。ところで、何で今、白い靴下は似合わないなんや？」

「生駒も好きだっただろ」

「もうちよつと選曲を考えろ」

生駒の文句に耳を貸さず、柏原は朱里のパソコンをカウンターに上げた。そして、

「悩ましいものを見つけたんや」と、アグネスちゃんのような笑い方をした。

「おまえ、まさか」

「へへ。ちよつと申し訳ないことをしてみた」

「メールを読んだとか」

「あかんのか」

「おい。威張ることか」

そうは言いながら、生駒は身を乗り出していた。

「受信フォルダは空っぽ。で、メールを受信してみた。うまくいったぞお。見てみるか？」

「プライバシー意識のかけらもないやつやな。ま、しかし、で？」
受信トレイには百通ほどのメールが並んでいた。ネット銀行からの連絡やメルマガ、広告がほとんどだったが。

「あつ、上野さんからのメールが来ている！　げ、開いてる！」

「読んでみたいか？」

「うっ」

「たいしたことは書いてなかったさ。ヨーロッパからの暑中見舞いみたいなもの。どうだ、見るか？」

柏原は今度は平山ミキの様に笑った。

「い、いや、やめておく。顔を合わせられなくなる」

「律儀な生駒先生、か。じゃ、このメールは？　ユウ向きのニュースだ」

と、なんの躊躇もなくひとつのメールを開いた。

「あ、なんてたつてミステリー倶楽部」と、優が顔を近づける。

「あれ？　知ってたのか」

「うん、よく見るよ。ここ、老舗のサイトでさ」

「有名サイト？」

「ネットで素人の作品を公開してる。メンバー制で、そこそこレベルは高いみたい」

「ふーん。朱里はこのメンバー。読むだけじゃなく、投稿してたみたいだ」

「へえ！　興味ある！　ねえねえ、読んでみよ。原稿あるんでしょ」
優のテンションが一気に上がっている。

「ある。長いぞ」

「げっ、もう読んだんや！」

柏原がテヘへと笑った。

「ずる！」

「話の筋は……」

「しゃべるな！」

「原稿より、サイトのほうが読みやすい」
柏原が「なんてたってミステリー倶楽部」のサイトを慣れた調子で開いた。

「あ、この作品、今年上半年期のグランプリ！　すごい！　ユーアイ
っていうのは、朱里さんのJulliyのUとIか。うわー、楽しみ
！」

「どという仕組みや？　掲載日は六月十五日になってるけど」

「うん、アマチュアがこれぞっていう自分の作品を投稿するやんか」
「おう」

「サイトの方は送られてきたテキストを統一形式で一カ月半掲載する。その間にたくさんの人が読んで投票するねん。グランプリをとった作品は、別枠で永久掲載してもらえるってこと」

「名誉だけか？」

「こんなのに実利を求めて、どうするん」

優は自分が最も見やすいようにパソコンの向きを変えて読み始めたが、いくらか読まないうちに、大きな声をあげた。

「これ、読んだことがある！」

「は？　ユウ、お前、なんでも読んでるなあ」

「へへ。あんまり昔のJPOPは知らないけどね」

「ん、これか？　白雪姫といわれた天地真理の水色の」

「そんなこと、聞いてないって。だいたい、推理会議の雰囲気合
ってないって」

「あの人にさよならを言わなかったのぉ」

「はいはい」

23 出資の約束？

翌日、柏原は妹に電話を入れた。

ひさしぶり、遅くなっただけ結婚記念日おめでとう、旦那どこに出かけたか？

薫は言いにくそうに、その日、旦那はひとりで出かけたと思えた。しかし柏原は妹の言葉の中に、そんなことは信じてはいないというあきらめと、不満を押さえ込んだニュアンスを嗅ぎ取った。

赤石が夜遅くになって、誰もいなくなったオルカに入ってきた。

「悪いな。急に呼び出して」

「いいさ」

不機嫌そうな顔をしていた。

「僕はおまえら夫婦のことに口出ししないように気を使ってきた。というより、関知しないことにしてきた。なにしろ僕は、夫婦ふたりがお互いに知る必要のない昔のことまで知っている」

柏原は赤石が好きな竹内マリアをかけてやった。

「夫婦といえども、元はといえば他人同士。知り合う以前の相手のことなんて、知らない方がなにかいいからな。しかもおまえは昔から干渉されるのが人一倍嫌いだ。だから僕は、できるだけおまえ達から離れている」

「なにが言いたい」

「八月三日はなんの日だ？」

「……」

「おまえらの結婚記念日」

赤石はカウンターの上に乗せた自分の手の平をじっと見つめていた。

飲みかけのジントニックにm小さな泡が浮かび上がってははじけて消える。

「妹を大事にしてくれなどと、保護者面して言うつもりはない」

「……」

「今日話したかったのは、八月三日、その日のことだ」

赤石は凍りついたように黙っている。

柏原は待った。

「……わかった。あの日のことを話せと言っただろ」

「ああ」

「考え違いをしないでくれ。朱里と一緒にだったんじゃない。実は……」

……

言葉を震わせ、グラスに手を伸ばす。

柏原も赤石から眼を離し、自分のコーラを注ぎ足す。

「実は八月の十日に、支店で夏の恒例イベントがあったんだ。うちの頭取の出身が鳥取の境港で、今年のイベントはその物産展をすることになっていて……」

コーラが軽い音をたてて、泡がはじけた。

「僕はスーパーサラリーマンなんだ」

赤石は自嘲ぎみに笑ったが、すぐに表情を消した。

「イベントの前に、どんな街なのかを見ておきたくて。あの日しか、時間が取れなかった」

ポツリポツリと言葉を繋いでいく。

「薫に言ったら、一緒に行きたいと言うだろう。結婚記念日だしな。最近、どこにも出かけていないし……」

竹内マリアが、友達以上の気持ち、胸に閉じ込めてきたけれど、と歌っていた。

「ところが僕は、あの日、ある女性に……、いや、一緒に鳥取に行

ったわけじゃない。勘違いしないでくれ。朝、ちょっと会って話す用があつた。しかし、それで……、まあ、ごまかしてしまった……」

「すまん。先日ここで追悼の会をしたとき、話したとおりなんだ。まさか、アリバイを聞かれるとは思っていなかった」

「聞かれることが分かっていたら、もうちょっと違う答えを考えていた」

柏原は頭に両手を持っていき、髪をしごいた。

「いや、そうじゃない……」

「まあ、本当に鳥取に行つたんなら、いいさ」

柏原は赤石の目を見た。

見つめ返してくる瞳には、何が宿っているのか、硬い殻をかぶっているかのように、なんの動きも見られなかった。

「正直ベースで話そう。あの日のことをアリバイとして、もう一度きちんと説明してくれ」

「……わかった」

グラスに目を落とした赤石は、竹内マリアが歌う歌詞を心の中になぞっているかのように、目を閉じた。

「朝早くに車で家を出た」と、話し始めた。

京橋で人に会った。

しばらく立ち話をして鳥取に向かった。ひとりで。

昼前には境港の町に着いて、事前に調べておいたところを見てまわった。有名な鬼太郎ロードや漁港や水産物販売店など。

そして、まっすぐ家に帰った。着いたのは七時ごろ。

それからまた家を出て、支店で作業。遅くなったのでビジネスホテルに泊まった。

「証人になってくれる人は？」

「いない。しかし会社に土産を買って帰った。証拠にはならないかもしれないが」

「京橋で会った人というのは？」

赤石が目上げ、柏原ト目が合った。

「言いたくなければいい。気になったただだから」

赤石はなおも柏原を見ていたが、やがてあきらめたように、

「……上野さんだ」と呟くようにいった。

「えっ？」

「たいした用事じゃない。パソコンのソフトを貸してあげる約束をしていたただだ」

「そうか……」

「貸して欲しいといわれて……。デジカメの達人というソフトで……。実は、夕食でも、ということにしてただけど、数日前になつて彼女が予定を変えて欲しいと言ってきて、朝に……」

「もういい」

「ところで、もう一度聞くけど、朱里との付き合いはなかったのか？」

「ない」

「……」

「しかし、なんか会ったことはある。新しい会社を興すので、相談に乗ってくれということ。生駒さんの話と同じようなものだ。それだけ」

柏原は少し考えてから、また聞いた。

「コナラ会のメンバーのことで、知っていることがあるか？ 例えば銀行員としての仕事に関連したことでも」

「……」

「弓削なんかはどうだ？」

赤石が目を剥いた。

「言えないか」

「それなら、弁護士としての柏原に話すぞ。守秘義務のある事項だ。……そう、彼は一時、資金繰りに困っていた。僕の、というか店のお客さんだが……」

「二次会のときに話し込んでいたからな。そんなことじゃないかと思っていた」

「でも、たいした問題ではない。彼の思い通りにしてやった。それに、それは朱里のこととは全く関係ない。いいか、誰にも、僕から聞いたと言わないでくれよ」

「ああ」

赤石が不満ト不安が入り混じったようなため息をついた。

「もうひとつ聞くけど、これ、知っているか？ 私は誰でしようという趣向のブログ」

「ん？」

「つまり、クイズみたいなもんだな。まあ、ちよつと読んでみる」
赤石は渡されたものに目を通し始めたが、すぐに目を上げて、げんなりした顔を見せた。

「どうだ、知らないか？ 趣旨を書いた葉書が生駒や弓削のところには来たらしい」

「なるほど……。それなら、たぶん僕のところにも来た」

「そうか、来てたか」

「それがどうした？」

「朱里が作者かなと思った」

「……ちよつと言わせてもらっていいか」

「おまえも生駒さんも、おかしいぞ」
「なにが」

「やりすぎだ。もう止めたらどうだ。警察の調べでは、朱里は自殺

したということになっているんだろ。生駒さんの気持ちもわからないわけじゃない。しかしなぜ、あえてほじくり返す。ご家族の方の気持ちも考えてみる。おもしろ半分ですることじゃないだろ」

蓄積した怒りが漏れ出てくるように、赤石の声がだんだん大きくなった。

「それに、本気でコナラ会のメンバーを疑っているのか？ まさかな！ それなら、なにをしようとしているんだ？ 僕は、自殺だとか殺人だとか言われても、なにも知らないし話すこともない。そもそも関心もない。冷たいやつだと思うなよ。こんなことは、素人が好奇心にかられて手を出すようなことじゃないんだ！」

柏原は、何も言わず、コーラを飲み干した。

赤石は興奮したことを照れたように、もついいだろ、と立ち上がった。

大迫は三条優の顔を見るなり、はじける笑顔になった。

誰が事務所に入ってきてきても気にもとめない女性社員に声をかけるまでもなく、大迫はぼんと立ち上がって近づいてきた。

心斎橋筋に近い雑居ビルの三階。三つばかりの机の他は、うずたかく積み上げられたダンボール箱で埋め尽くされていた。

擦り切れて緑色の糸が見えるソファ。

座るように勧めながら、大迫は出勤してきたばかりなのか、暑いですなど、やたらと額や首筋をタオルハンカチで拭った。

差し出された名刺はやけに白くて分厚く、湿った感じがした。

「中道さんのことは、本当に残念なことでした。ウチはアメリカ村に雑貨店を五店舗出しておるんですが、中道さんとは最初の店からのお付き合いでした。あれからかれこれ、もう十五年にはなりますなあ」

「中道さんとは、青山企画の担当者としてのお付き合いだったんで

すね？」

三条は単刀直入に聞いていく。

「うちの店の内装工事を青山企画に注文したら、担当者として付けてくれたのがあの人やったということですよ」

大迫は泉南で日用品屋を開いていたが、知人の紹介でアメリカ村で商売を始めることになったという。

青山企画とは第一号店からの付き合いらしい。

「田舎もんがたまたま当たったということですよ」

「まあ、ご謙遜を。ところで、社長さんは担当者としての中道さんを、どう評価されておられましたか？」

「ええ、それは優秀な人でした。私らみたいなぼつと出の素人の店が、有名な雑誌に取り上げられたりもしました。それに親切なお人でして。内装工事が完了してから、よう顔を出してくれはりましたね。ポップ広告のデザインを考えてくれはったり、いろいろな人を紹介してくれはったり、ほんまに助かりました。大げさな言い方したら、うちの店がここまで大きくやって来れたのも、中道さんのおかげやと思つて感謝してます」

大迫はソファに浅く腰掛け、思い切り脚を広げている。

向かいに座る三条が目やりに困るほど、はちきれんばかりの腹を、ガラスのセンターテーブルに押し付けていた。ネクタイをしていない開襟シャツのボタンの間からは、白い下着が見えていた。

「ところで、中道さんが会社を辞めて独立するにあたって、社長さんが資金的な援助をされていたということを知ったんですが、それは本当ですか？」

「いや、それは違います。援助は一切していませんし、そんなことはする気はおません。誰からそんなことをお聞きになったんです？」

大迫は心外だという顔で否定した。

大げさな表情。三条も負けじと焦ってみせる。

「ええーと、すみません。三好さんがおっしゃったのは出資をいただいていたということでした。慣れない探偵の真似事をしているものですから、緊張してしまっただけで」

大迫はもう一度やわらかく睨んだだけで、元の人なつこい笑顔に戻って、自ら話を進めだした。

「出資していたのは三好さんのおっしゃるとおり、本当のことです。中道さんが独立してデザイン事務所をやらはるということでしたんで、できる協力だけはさせてもらおうと思ひまして」

五百万円を振り込んだという。

事務所改装の費用、パソコン購入費などに使われたらしい。それとは別に車も購入したという。

「条件ですか？　なんでそんなことをお知りになりたいのかわかりませんが、隠すことやないんでお話しますとね。特段のことはないんですよ。配当は、ちゃんと利益を出せるようになったら、という簡単な取り決めだけだね」

「そうですね。それにしても社長さん、大変なことになりましたね。こういう場合、その出資されたお金が戻ってくるものなのかどうか知りませんけど」

大迫が目を剥いた。

「そりゃ、返してもらうつもりでっせ」

「会社はまだ正式には、設立されてませんからな。出資の約束はなかったことになると思ってます。ただ、今は三好さんがとにかく混乱してはりましてなあ。こう言うとなんですが、三好さんひとりではあきませんわ。まあ、今はとにかく三好さんは挨拶回りで忙しい。会社の設立は中止するという説明にです。それが先決ですね。まあ

私も、中道さんが死んですぐに金返せとは言いにくいですし」

大迫は洗面を作り、ソファの上で尻を動かした。

「こんなことになってしもうて、えらい損害なんですわ。実はこの出資の話、周りの者には反対されたんです。銀行とかにもね。もつと私自分の会社が完全に軌道に乗ってからにしたらどうやということですね。この春に五店舗目を出したんですが、これが今までよりずっと大きい店でしてな。よっぽどがんばらんとあかん店です。しかし、私としたら中道さんを信用してましたし、青山企画にもなにかと助けてもらいました。いろいろおましてな。私としたら応援せんわけにはいきませんでしたんや」

そういつて、がぶりとコーヒーを飲み干した。

「それにしても、なんで自殺なんか……。いや、もう、中道さんがなんで死なはったかというようなことは、どうでもええことです。すみませんね。きつい言い方をしますが、はっきり言うて、私はがっかりしてます。三条さん、わかりますやろ」

三条の相槌の打ち方がうまいのか、話は訓話じみてきた。

「私らみたいな零細なところは、金にはうるさいもんです。お金を意味のないことや無駄なものに使うてたら、周りから笑われますんや。三条さんも、この事務所を見てもうたらわかりますやろ。まあ、今度の話は、結果的にはああいうことになったわけで、私にしたなら、えらい格好の悪い話でしてな。あの金をよう取り戻さんかったら笑いもんですな。ほんまに」

三条は話題を変え、アリバイを単刀直入に聞いた。

大迫はすらすらと答えた。

「四日と五日は出勤で、十時ごろ事務所に出て、昼からはいつものように店舗回りです。夕方からは同業者の会合に出席しました」

「日曜はお休みではないんですね」

「うちの休みは火曜日だけですわ。このところそれさえ取れてま

せん
「

24 硬直した三つの星

生駒の事務所に上野が訪ねてきた。

入ってくるなり、小さな紙袋を押し付けてきた。しゃれた万年筆が入っていた。

「ミラノのお土産。それで朱里のことだけど、どういうことなの？」
ぎこちなく椅子に座った上野。以前の朱里がしたように、部屋を眺め回したりはしない。

「崖から？ 恐ろしいことだわ……」

肩を震わせた。疲れきった顔をしている。

生駒はメールや電話では言えなかったことを丁寧に説明した。

「ということで、上野さんにも協力して欲しいんです」

退職後、生駒は上野にくださったものの言い方をする人が多い。

先輩ぶったところがなく穏やかな話し方をする上野は、誰からもうなごみ系の女性だと思われる。

朱里と比べて華やかさやチカリと光るものはないのだが、いつのまにか場に溶け込んでいる、そんな存在だと生駒は思っていた。

「もちろんよ。なにをすればいい？」

「まず、朱里が自殺したと仮定して、なにか心当たりは？」

「心当たり……」

「朱里とたまに会ったりしてたんですか？」

「うん」

「なにか気になることはありませんでしたか？」

「思いつかないわ。というより朱里が自殺するなんて、とても信じられない」

「じゃあ、殺されたと仮定したら？」

「うそでしょ！ とんでもないことよ。朱里が殺されるなんて。あなたも知っているでしょ。あの子はとてもいい人よ。まさか殺されるなんて……」

突然、涙声になった。

生駒は、上野からなにも聞き出すことはできないのではないかと思った。この女性は自己主張の強い人ではない。場に溶け込んでいくというのは、逆の言い方をすれば、存在感が薄いということである。今も朱里の死に際して、それがたとえ殺人事件だったとしても、自ら行動するとは思えない人だった。

「じゃあ、怒らないで。みんなに聞いていることだから。上野さんのアリバイを教えてください。八月四日、五日のです」

恵から聞いていたことだったが一応は確かめた。

「アリバイ？ ああ、そういうことね。四日から恵とヨーロッパ旅行だったの。昼ごろに関空から飛行機」

「じゃ、三日は？」

「一日中家にいたわ。旅行に備えていろいろ準備。朝一番だけは出かけたけど。実はね、赤石さんと会ったのよ。パソコンのソフトを貸してもらったの」

「へえ、そうなんですか」

「うん。本当はさ、彼が鳥取に行くっていうから、一緒に行きたいって言ってみただけど、あんまり乗り気じゃなかったみたいだし。旅行前だから、おとなしくしておけっていうことね」

そういつて、ほのかに微笑んだ。

「わかった。じゃ、これ読んでみて」

上野は目の前に置かれた紙を覗き込み、朱里の遺書をゆっくりと目で追った。読み終えて目を上げると、困ったような視線を生駒に向けた。

「なんて言ったらいいのか……」

「俺も最初にこれを見たとき、なんともいえない気分になった」

上野は目を落とし、ハンカチを出して鼻の上から押さえた。そして目をつぶった。生駒は腰を浮かせ、上野の肩に手を置いた。薄い白いブラウスを通して温かさが伝わってきた。

「今度はこれ」

「なに？」

弱々しい声に、恐れに似た戸惑いがあった。

相当のショックを受けているはずだった。電話で朱里は殺されたのかもしれないと伝えたときの、息をのんだ声がまだ生々しく耳朶に残っていた。

生駒は笑ってみせた。

「知らないかな？ あるブログをプリントアウトしたものなんやけど」

上野は読み始めたが、すぐにまた下を向いてしまい、知らないわ、と小さく首を振った。

「ごめん。辛いときにしょうもないことを聞いて。こないだも、蛇草さんに怒られた」

生駒はそれらの紙をクリアフォルダに戻す。顔を上げた上野の目が赤かった。

「こないだっていうのは、オルカにみんなで集まったとき？」

「そう。佐藤さん夫妻と弓削、蛇草さん、鶴添さん、赤石さんが参加してくれた」

「あら、竹見沢さんは？」

「用があるって」

「へえ、一番興味ありそうなのに」

「まあね」

生駒の顔に、そして上野の顔にも小さな笑みが浮かんだ。

「それで、みんなのアリバイはどうだったの？」

上野は目頭を押さえてから、無理に茶目っ気を出したというように聞いた。生駒は順番に解説した。

「ふーん、そうなの……」

「もう一度聞くけど、なにか、朱里のことで気になったことはないですか」

上野は改めて考えているようだった。そしてなにかを言いかけて止めた。

「あ、言いかけて止めないでくださいよ」

「たいしたことじゃないわ」

生駒は黙って上野の言葉を待った。

「直近で朱里と会ったのは七月の始めごろだけど、元気そうだったわ。実はね、一緒に山登りに行こうと誘われてたのよ。最近、山登りは彼女のちょっとしたブームだったみたいで」

「へえ！ それで？」

「うん。そのときは日にちはそのうちってことで、行き先だけ決めて……。お互い、忙しくて」

「行き先って？」

「比良山……」

「へーえ」

「一応はね。でも、大峰山も候補のひとつだったわ。大普賢岳が弥山から八経ヶ岳のコースで……」

「へえー。ちょっと待って。ね、大峰山行きはどっちの希望？」

「朱里よ」

妙な具合になってきた。

「行者還岳は？」

「ギョウジャガエリ？ どこそれ？」

生駒は説明してやった。

「ふうん。その山は、話に出なかったと思うなあ。ちゃんとは覚えてないけど」

「そうですか。で、ふたりでいろいろなところに行ってたんですか？」

「ううん。私、山登りはしたことないの。で、朱里に誘われて、今度行こうかって……」

また涙声になった。

「ねえ、生駒くん。朱里が自殺するなんて……、新しい会社に燃えていたし。なんていうのか、それに……、あの子は負け犬タイプじゃないのに」

「うん。でも、今のところ、なにも証拠らしいものはないんです。警察は自殺の線では固まってしまったようだし、俺たちはこうして知り合いに意味もなく聞き込みするだけ。はつきり言つて、なんら進展していない」

「コナラ会メンバーが怪しいって、本当なの？」

「いや。ただの仮定。俺の名前が遺書に出ていたからというだけのこと」

上野は考えているようだった。

「ねえ、さっきのブログ。はがきが来たって、それまだある？」

生駒は、ない、と答えた。

「そう……」

「同じものかどうかわからないけど、私にも来てたのかもしれないわ。友達だから安心して見るとかなんとか」

「あ、それぞれ。やっぱり。上野さんにも来てたのか。それで、見た？」

「ううん、なんだか、うさん臭くて」

「そうか……」

「さっきのがそうなの？」

生駒は再びファイルを開いた。

「で、これ誰？」

上野が一枚ずつ目を通し始める。

「わからない」

生駒は、誰にそのはがきが来ていたか、そして朱里のパソコンにウェブサイトとして保存されていたことを説明した。

「じゃ、朱里じゃないの？ あなたや私や弓削君たちに共通する女性の親しい友人といったら」

「まあね。内容が事実やつたら」

「あつ、そうか。事実だとは限らないわけね。でも、自分が誰か、当てて欲しいんでしょ？」

生駒はもどかしかった。

ブログの作者が朱里であることは、ほぼ決まったようなものだったが、依然として違和感があったし、本人にそれを確かめようもない。

しかも、ブログの作者が分ったところで、事件の解決に結びつくわけでもなさそうなのに、こんなものにすがらなくてはいけないことが腹立たしかった。

「わかったら私にも教えてね。それから、なにか私にできることはない？ 調査のお手伝いとか」

生駒は、なにかあれば連絡すると約束した。

そして、できたら中道隆之くに朱里のことを話してあげたら喜ぶんじゃないかな、引越しを手伝ってやればもっと喜ぶだろうとも伝えた。

それからしばらく沈黙気味な時間を過ごして、上野は帰っていった。

生駒は蛇草に電話を掛けた。

蛇草は追悼会議の誘いがあったときに考えたことを、いらついた声ながらも、こう説明してくれた。

まず喫茶店でのこと。

気になることがあった。竹見沢のテンションがやけに高かったことだ。いつものことだと言えなくもないが、葬式の後であんなにはしゃぐというのは変だ。

それに正直なところ不愉快だった。

蛇草は朱里が自殺したとは最初から考えていなかったという。

刑事の訪問を受けたとき、強烈な違和感を持ったからだ。遺書に生駒の名、というのはおかしい。書くとするなら竹見沢か赤石だと思っただからだという。蛇草は朱里が竹見沢の教室に足繁く通っていたことを知っていたのだ。

「どうして知っていたんですか」

「鶴添から聞いていたからや」

竹見沢は、鶴添の診療所で持病の肝臓病の治療を時々受けているという。診察後、無駄話もするそうだ。

「すると、一番怪しいのは誰か。竹見沢。おまえもコナラ会のこと覚えてるだろ。竹見沢の態度の馴れ馴れしさ」

蛇草は鶴添を追悼会議に同席させ、ストレートに竹見沢を追及するつもりだったというのだ。

「それなら、追悼会議のときに、その話を出してくれたらよかったのに」

「まあな。でも、おまえもそれくらいのはわかっているんやと思ってた。朱里のことを最もよく知っている、生駒くんが誘ってくれるんやからな」

「また、へんな言い方を」

「でも、そうやる。ところがどうや、あの会議の内容は。責めるつもりで言ってるんじゃないから気にするなよ。おまえからは竹見沢の夕の字も出なかった」

生駒は驚いていた。

同時に、自分に真剣味が足りなかったのかもしれない、とも思った。

「男と女の関係なんて、いつどうなっているか、わからんからな」蛇草が柏原と同じような台詞を口にした。もう齒に衣着せる気はさらさないようだ。

「俺はあいつを疑っている」

生駒が言葉を搜していると、また蛇草の不機嫌そうな声が聞こえてきた。

「しかし、なぜあいつが朱里を殺す必要があったのか。大学教授がスキヤンダルを恐れて？　どうもしくりこないやろ。相手が生徒ならスキヤンダルやろうが、いわゆる不倫程度じゃな」

まだ生駒はまともな反応ができないでいた。

「あるいは俺の思い過ごしで、他に誰か怪しいやつがいるのか」自問する蛇草の声はますます暗い。

「理由はいくらでも思いつく。そしてその理由の中に、具体的な犯人像を伴うものがある、ピタリと照準が合うやつがいたら、それが誰であれ、俺が」

受話器から、どろりとしたものが耳の中に入ってきたように感じた。

「ちょ、ちょっと待ってください。直接行動に出る前に教えてください」

「ああ。それがおまえじゃなかったらな。そんなところでいいか？」

「また、そんな。あつ」

すでに電話は切れていた。

生駒はげんなりした気分になった。

鶴添に電話する気は失せていた。そしてもうその必要もない。

今、耳にした不機嫌な声。

いつもの声。

その声に精気を吸い取られたかのように、生駒はがっくりと椅子に落ち込み、束の間、呆然と意識をさまよわせた。

いつから蛇草の竹見沢への憎悪は、あれほど大きくなっていたのだろう。

同僚としてアーバプランに勤めていたころは、そうではなかった……。

いや、よく考えると、そもそも彼らは同じ指向性を持っている者同士というわけではない。

偶然に同じ会社で働くことになったのであって、表面的に仲良く見えてはいても、それは同僚という枠の中にいるときだけのことであって、縛るものが外れて十年も経つと、性に合う合わないがはっきりしてくるのも仕方のないことなのだ。

とはいえ、平常時ならギクシャクすることはない。誰にでも気に入った相手とそうでもない相手はいるが、それなりに折り合いはつけられるものなのだ。

ところが今回、朱里の死という衝撃と、さらに疑問が、しかも身内のコナラ会メンバーが、という仮説が目の前に提示された。

難なく押さえ込まれていた憎悪が、これをきっかけに表面に染み出てきても不思議ではない。

追悼会議をひとり用があるからと欠席し、もうひとりはその男を糾弾するつもりで参加してきたのだった。

「犯人捜しか……。コナラ会のメンバーなあ……」

この事件の主要な登場人物かもしれないと思ってはいたものの、そもそもそれは、希薄としか言いようがない思いつきだった。

むしろ、メンバーの潔白を証明することになるだろうという楽観的な確信さえあった。

中に犯人がいるかもしれないなどと、一瞬たりとも本気で考えてはいなかったのに。

「蛇草さんだけじゃなく、案外、みんな……」

生駒は、自分の側からしか物事を見ていなかったことに気がついた。

自分の思いだけでメンバーをリードし、朱里の死の真相に取り組んでいる気でいたことに気がついた。

そして、メンバーをヒアリングの対象にしか見ていなかったことにも気がついた。

彼らも生駒と同様に、朱里の死の真相は知らないはず。

しかし、それぞれに蓄積してきた感情があり、何らかの思いや意図があつて追悼会議に出席してきたという、当たり前のことにようやく思い至った。

壁に貼ったコナラ会の写真が目に残った。

出会つて二十年以上にもなり、各々五十を超えようという歳の男や女たち。

長いため息が出た。

朱里をめぐる三つの星。

つまり赤石、蛇草、竹見沢。

彼らは互いに牽制しあうだけでなく、いつしか敵対する相手とな

っていたというのか。

見かけ上は硬直して、あるいはバランスを保って動かない星。

しかしその間の空間に、目には見えない力を及ぼしあっていたのだ。

その力をかき乱していた朱里。

竹見沢に足繁く通い、最近では赤石にも急接近していたという。

その様を、後ろから見つめる蛇草。

そして弓削は、その関係の中でどんな位置にいるのだろう。

「くそう……」

生駒は机に肘を突いて両手で顔を覆った。

疲れが肩の上にのしかかっていた。

目を閉じると、まぶたの裏に様々な情景がめまぐるしく映し出された。

それらは質感の伴わない断片的なイメージがフラッシュしているようなものだったが、やがてその中のひとつ、些細な出来事が一連の繋がったシーンとして浮かび上がってきた。

25 ヤドカリ

生駒がアーバプランを辞めることになる年。

社員旅行は沖縄への一泊二日の旅だった。日頃の不愉快面を引っ込めて、さっぱりと楽しもうとしていた。

後二カ月程で担当しているプロジェクトが峠を越す。そのときに退職届を出す決心ができていた。

那覇空港からタバコ臭い観光バスに乘せられ、団体客専用の大食堂に連れて行かれた。

水っぱい刺身ランチをビールで流し込む。昼間から中途半端に酔って、連れまわされるおサルよろしくぞろぞろとバスにまた乗り込み、誰もが連れていかれる観光名所に向かう。

「なんだか浮かない顔ね。しかたないわよ。しっかり値切った団体旅行なんだから」

そう言いながら隣に座った上野は、ポーチからガムを一枚抜き取って生駒に寄こした。

「新人のころなら宴会もおもしろかったけど、さすがにね。いい大人が連れまわされてお決まりの宴会。もうあきあき」

上野はガムの包み紙をきれいに折り畳んで、前の背もたれについている汚らしい吸殻入れに放りこんだ。

「ね、今日の夕方はどうするの？ 主だった連中は釣りをするみたいだけど」

日頃の疲れが溜まっているだろうということで、観光は早々に切り上げてホテルに入り、七時からの宴会までは自由行動ということになっていた。

「せっかく来たんです。沖縄らしい村を訪ねたいもんですけど、時間が中途半端やし、ま、そのあたりの散策かな」

「そのあたりって？」

「ホテルの周りにはなにもない。観光客が見に行くようなところでも上野さん、案外こういうところがおもしろいかもしれませんよ。小さな町でしょう。たぶん、ひなびた漁港で、小さな商店街がある。市場もあるかもしれませんが。そんなところをぶらぶらして、なにかおもしろいものがないかって。ま、期待はしてませんけどね。でも、いくらなんでも着いてすぐに風呂は早いでしょう」

「タウンウォッチングか。一緒に行つていい？」

「もちろん。でも、退屈しても知りませんよ」

バスの後方の席では、竹見沢と蛇草が釣り談義をしていた。南の海でトロリングをしたことがあるとかないとか。

ホテルには露天風呂と太平洋の雄大な眺め以外に、たいしたアトラクションはない。せめてもの客寄せのために、釣道具の貸し出しとポイントまでの送迎サービスがあるという。お遊び程度のものだが、会社の慰安旅行などでは人気のメニューらしい。

ふたり以外にも釣竿の貸し出しを予約している者は多かった。

「熱帯魚みたいなもの、釣れても食べられないだろうな」

「そうですね。でも添乗員に聞いたら、普通のチヌも釣れるそうですよ。もしかするとチヌのような魚ということかもしれないけど」

「どこで釣れるんだ？」

「ホテルの前の波止で釣れるらしいです」

釣り組はそれなりに盛り上がっていた。

それに比べて生駒の方は散々だった。

商店街も市場も、あるにはあった。看板のついた街灯が設置されているなら商店街、数件の生鮮食品の店が集まっているなら市場、と呼ぶならば。

しかも時間が遅いせいか活気がない。目を引く特産物を売っているわけでもない。

たちまち通り抜けてしまうと、もう何の変哲もない街並みに変わり、その先は、小学校の校庭の向こうに、赤土が剥き出しになった荒れた農地と海岸線が見えるばかり。

生駒と上野は言葉少なくそのまま歩いて海岸に出た。

スニーカーに赤い土埃がついていた。

生駒は、自分には女性に対して構えたところがあるということがわかっていた。

だから今日のように、上野の方から一緒に歩こうと言い出されたことに、わずかな驚きを感じていた。

一緒に仕事をするが多かったし、仕事に対する上野の態度に感化されてもいたのだが、友情や愛情に近い親しみを持っていたわけでもなかったからだ。

波打ち際に並んで座った。

市場で買った小粒のサーターアンダーギーを紙袋からふたつ摘み出し、後は袋ごと上野に渡した。

目の前には、海と空しかなかった。

沈みゆきつつある秋の日差しを背中から受け、ふたりの影が砂浜に長く伸びていた。

聞こえるのは穏やかな波の音だけ。

生駒は上野の影の頭を見ていた。

「生駒くん、会社を辞めようと思っているんじゃない？」

「えっ」

半分囁んだサーターアンダーギーのかけらがパラパラと砂の上に落ちた。

「わかるわよ。態度で」

「そうですか……」

生駒は、もうみんな感づいているのか、となんとなく気が楽になったように感じた。

「あなたが辞めたら、雪崩をうったように皆も続くと思うわ。私もね」

上野もサーターアンダーギーに噛みついた。

「でも揉めるでしょうね」

「揉めないですよ。僕が辞めるくらいのことです」

生駒は上司の顔を思い浮かべたが、上野が思いがけないことをいった。

「あなたはお目付け役だから。朱里の」

「は？ なんですか、それ」

「言葉どおり。みんながそう思ってるってことね」

「へえ。でも違いますよ」

そう言ったものの、どう違うのかを説明する気にはなかった。今のうちに、人から言われたり、あるいは感じることもあったが、生駒はいつもあえて強く否定はしなかった。どう説明すればいいのかわからなかったし、そう言われて不愉快ではないからなのだろう。

「ふふ。生駒くんのその困った顔も見れなくなるのか。ま、せっかくの旅なんだし、そんな話は帰ってからね」

上野が食べかけのサーターアンダーギーを、ぱくつと口に放り込んだ。

「ちよつと待つて。朱里の話と僕が会社を辞める話と、何の関係があるんです？」

上野が目端で笑った。

「実は私もそうなのよ」

「はあ？ お目付け役ってこと？」

さあね、と上野はふたつ目のサーターアンダーギーに挑戦している。

「彼女は釣り組かな」

今頃、朱里は大勢の仲間達と、おおらかにはしゃいでいることだろう。

上野は自分で言い出しておきながら、もう話題にする気はないようだ。

砂の上にぼんと寝転んでしまった。

生駒は自分の退職のことを話題にしたいわけはなかったが、他に話すことをすぐには思いつかなかった。少なくとも、美しく匂い立つ女性がすぐ横で寝転んでいるというシチュエーションで黙っているのは気まずかった。

「上野さん、僕が辞めたらみんなも辞めるって、どういふことなんですか？」

と、水平線を見ながら言った。

「そんな気がするだけ。しない？ ま、いいか」

上野はいつものように、浮かんだ思いを心の中に収めてしまう。

波打ち際に小さな鳥が降り立った。

ちよつと駆けては止まり、餌を探している。

波音と共に静かな時が流れていた。

「あつ、弓削くん！」

上野が起き上がって手を振った。砂浜を歩いて来る弓削が見えた。

「あいつ、またひとりでスケッチしてたんやな」

生駒は小さな声でいった。

「さっきの話、まだ誰にもしないでくださいよ」

「いいよ」

「やあ！ お似合いのカップルですね！」

陽気な声が砂浜を渡ってきた。手に持ったスケッチブックを振っている。

「いいのが描けたー？」

それには応えず、弓削は小走りに近づいてくると、
「だめですよ。海ばかり」

と、上野に並んで腰を下ろした。

「砂浜を歩き回っただけで疲れましたよ」

スケッチブックには大きなヤドカリが描かれていた。

「うわ、すごいね！ 精密に描かれてる」

「こいつ、動きますからね。ほとんど想像ですよ」

「でも、すごい」

「へへ。ところで、おふたりさん、こんなところで何を語らってたんです？」

「タウンウォッチングのあてが外れてね」

「そうですかあ？ ね、上野さん」

弓削がわざとらしく探るような目を流した。上野はにっこりとしたまま、ヤドカリの絵を見ている。

「ね、あの話でしょ。生駒さんどう言っていました？」

上野が目を上げずに言った。

「生駒くん、少しずつみんなに話した方がいいと思うわよ」

弓削がすかさず声をあげた。

「やっぱり！ 生駒さん、辞められるんですね！」

生駒は、そんなさっぱりしたもの言い方につられた。

「ああ、近々」

「そうでしょう、そうでしょう」

「そろそろ挑戦しないと時間切れになりそうな気がして」

「ええ、ええ、わかってますよ。ここでくすぶっていても先が知れてますからね」

「まあな」

「僕もそう思います。先輩達を見ているとあせりを感じて。あ、お

ふたりのことじゃないですよ」

生駒は胸の中に温かいものが流れてきたことを感じた。

しかしこの同僚に向かつて、辞めた方がいいよとは言わなかった。独立や転職は自分で決めることだから。

「あまりに情けないですよね」

「情けない？」

「そう。仕事の取り組み方とか。いろいろとね」

弓削は怒りをこらえているような顔つきになった。

上野が後を引き継いでいく。こちらの声はいつものように朗らかだ。

「そうよね。生きていけるだけの報酬をもらうだけ。一生働いてもそれ以上のことはない。お金という面では魅力はないわよね。それに、私達のような職種の人にとっては、なんていうか、夢がないわ。もがきながらもいい仕事ができたとして、それは会社の実績であって、私個人の仕事としては誰も見てくれない。身内や関係者の間では評価されたとしても、社会的に見たら私という人間は存在しないのと同じ。本人はその気で一生懸命やっていたとしてもね」

弓削が頷いた。上野からサーターアンダーギーの袋を受け取って早速手を突っ込んだ。

「だからといって自分の名前を売ることがなにより大切だとは思わないわ。でも、正當に評価されたいと思うのは自然なことよね」

生駒も同調したくなった。

「ずっとサラリーマンで通すというのもひとつの道。でも、自分の可能性みたいなものに夢を持っているなら、挑戦することもひとつの選択肢。裸になってしまうけど」

「そうですね。上野さんもいつもそうおっしゃってます」

生駒は上野と弓削がこんなことを話し合っていたのかと、意外な

感じがした。

「でも、誰かに我慢できないということも、退職の理由になると思いますよ。きつかけといった方がいいかもしれませんけどね」

「誰かって？」

生駒の問いに弓削は驚いた顔をしてみせた。

そして、わかっているくせに、というように首をすくめた。

それから三人は黙って海を見た。

このとき生駒は、辞めた暁にアーバプランの退職者の同窓会をしようと思いついた。

夢を持って入った会社に別れを告げ、それきり個人的な縁も切れしてしまうのは、なんとも寂しかった。たとえ個人の間には不協和音があつたとしても。

夜、宴会には竹見沢らが釣った数枚のチヌの姿造りが出された。

竹見沢と蛇草は得意満面。このふたりにだけ釣果があつたらしい。自らホテルの調理室に出向き、特別に作ってもらっていた。

生駒は海岸での告白が尾を引いて楽しめなかった。上野や弓削もどことなく浮かない顔をしていた。

26 腐れ縁

三条優が向かったのは豊中市にある北大阪大学だった。

理学部人間色彩光学研究室。

午前中に保険会社の勧誘員を偽って研究室に電話を掛け、竹見沢が昼から四時ごろまでは不在であることを確かめていた。

教授室と間仕切られた秘書席で、若い女性が留守番をしながら文庫本を読んでいた。

突然訪れ、用件も言わずに、ただ待たせてもらうという女性客に閉口した様子であったが、購入しておいた手土産を渡すと、しかないというように椅子を勧められた。

「あの、竹見沢先生がお戻りになるまで一時間ほどかかると思いますよ。助教授の岡さんやほかの先生方も今日はお休みですし、秘書の柳本さんも竹見沢先生とご一緒なんですけど、それでもかまいませんか？」

留守番の女子学生は、大げさに困ってみせる表情と笑顔がくるくる変わって、なかなか可愛げのある人だった。

三条が秘書机の横に置かれた待合用ベンチに腰掛けると、女子学生の横顔を少し見上げるような姿勢になる。秘書席はとても狭く、すぐ真横からの視線を感じて、女子学生はこわばったように座り直した。

三条は最初からハツタリでいくことにした。

「私、先生とはもう十年以上前からの知り合い。たまたま近くに来たから、せっかくだから寄ってみようと思って。あなたのおじやまはしないから。あ、なに読んでらっしゃるの。でも、噂によれば、相変わらずプレイボーイらしいわねえ、あの人。今日はちょっとかかってやろうと思っているのよ。あら、ごめんなさい。学生さん

に言うことじゃなかったかな」

三条は一気に喋って、この女子学生の興味の芽を吹き出させてから、答えやすい問いを用意した。

「あなたはどんな研究をしてらっしゃるの？」

すぐに学生のぎこちなさがほぐれてきた。この子も時間を持てあましていたのだ。

三条はよどみなく話すこの学生に好感を持った。

竹見沢に女性の客が来ることがあるのかと聞いてみた。さりげなさを装いながら、はつきりと興味があるのだということをはからせるように。女子学生はさらに打ち解けた様子になって、目の前の訪問客の肩を持つようにいった。

「いいえ。あなたの他には、誰もお見えになったことはありません。いつもこれ、ありがとうございます。ここのパイクッキー、おいしいんですね。いつも先生より私達が喜んで頂戴しています」

住道駅前にクレマーという、大阪ではそこそこの通った洋菓子店があるが、朱里が手土産を持っていくとすれば、ここのパイクッキーではないかと、駄目でもととの勘を働かせたのだ。女性に人氣だし、このところ小さなブームにさえなっている。

作戦は大当たりだった。

いつもはお土産のクッキーを食べる役割で、それを持ってきた客の顔を見ていなかった学生が、今日は秘書席で留守番をしていたのだった。

そして、その山本彩香という女子学生が、今までの来客だった朱里と三条を同一人物だと勘違いしたのだった。

「うれしいわ。ねえ、先生は私のこと、あなた達になんておっしゃってるのかな。学生さんの間でも噂になったりするのかな」

竹見沢は学生とよく飲みに行ったりするタイプの学者で、本人曰

く、学生達から人気があるという。

彩香は朗らかに笑って、三条の質問に躊躇なく答えた。

「ええ、酔った勢いで秘書の柳本さんが先生にお聞きになったことがあるんです。あなたのことを。どういう関係なのかって、単刀直入に。そしてたら先生、むちゃくちゃに照れて、どうということはない、あの人は昔からの友達で、色々な相談事を頼まれているとおっしゃいました」

「フッフ、その通りね。それから？」

「なんだかとても嬉しそうでしたよ。あ、あの、私からこんなことを聞いたなんて言わないでくださいよ。つまらんことを言うなって怒られますから」

そついいながら、まだ話し足りなさそうな顔をして目を輝かせている。

三条はこれから先、どう聞き出せばいいのか、笑顔の中で必死に考えていた。

「言わないわよ。私の方こそ、くだらんことを聞くなって怒られるからね。でも、どうなのかしら。先生は女子のみなさんに人気があるんですよ。危険人物よねえ。いろんな噂があるんでしょう？」

彩香はニヤニヤして、言いたいけど言えない、というような顔だ。

「さつき秘書の柳本さんっておっしゃったわね。あの方はどうなんでしょう？」

「ないでしょうね。本人はともかく、先生の方は」

はつきりと否定する。三条は、もしかするとこの子も、という気がしてきた。

「学生さんと一緒になって、先生はまだ青春を謳歌されているのね。きっと、あなたは可愛がられているんでしょう。変な意味じゃなくてよ」

「そんなことはないですよ。用事を言いつけやすいということだと

思います」

なるほどそうか、と三条は思った。

こらえた笑い声をたててから、少しゆっくりめの口調で聞いてみた。

「フフーン、怪しいわねえ。ね、私はどうかしら？」

「そうですねえ」

「わくわく」

彩香の嫉妬心に火を近づけてみたのだが、さすがに言葉に迷ったようだ。

「ただの、あつ、ごめんなさい！」

「ううん、いいのよ。言ってちょうだい。古い付き合いなんだから気にしないわ」

「ただの腐れ縁だって」

「ハハハ」

もういい。

朱里と竹見沢がどういう関係なのかを知ることではできなかったが、少なくとも親しい関係だったということは感じられた。三条は最後の質問をして切り上げようと思った。

「ところでちょっと変なことをお聞きするけど、いい？ 八月三日に、先生がどこにおられたのか覚えてらっしゃらない？ 先生とお会いたいと思っていただけ、行き違いになってしまったみたいで。もし私の間違いなら謝らないといけないから」

「福岡におられましたよ。学会があつて。私も連れて行っていただきました。かばん持ちですけど」

「じゃあ、私の間違いか。残念。とつちめようと思ってたのに」

彩香はにこりと小首をかしげている。

「あなたも連れて行ってもらったの？ なかなか名誉なことじゃない。おふたりで？」

「いえ、助手の人と一緒にです」

「それで三人ずっと一緒だったのね」

「はい。いえ、帰りはばらばらで。先生はもう一泊、福岡に」
なんとなく彩香の口ぶりが重くなってきた。

「そうなの。あなたと助手の先生と一緒に帰られたというのに、ひとりだけ福岡に残って。それも意味深ねえ」

「はあ。でも私もひとりで帰りました。あの、苦手なんです。舟木さんが。それで、わざと一本遅い新幹線を予約して」

初対面の相手に、彩香は自分のゼミの助手が苦手だという。

微妙な乙女心か。

ただ、三日は学会だが四日は？だという。竹見沢の説明とは微妙に違う。

「ずばり聞くけど、四日、あなたも一緒だったんじゃない？」

彩香は三条が予想していたほどには戸惑わなかった。

しかし、読みかけの本をゆっくり閉じた。

「誤解しないでね。あなたを責めるつもりなんて全然ないのよ」

彩香はまだ本に手を乗せているが、見返したまなざしは冷静で穏やかだった。

「こんなことを聞くのは、失礼だと思うでしょうね。でも少し話をさせてね。私達くらいになると昔の友達とか仲間って、とても大切なものなのよ。あなた達くらいの年齢の人達が、誰かを好きになったり憧れたりするのと同じように。もちろん私達も、そうしてきたわけ。それが結婚まで進むこともあったし、そうならないこともあった。完全に切れてしまうこともあったし、いまだに憧れの人の上まで続いていることもある。たとえば、お互い別の人と結婚したとしてもね。細く長くっていうか、今でも小さな思い出が少しずつ積み重なっているのよ。ひとつひとつは他愛ないことの積み重ねでも、それが十年以上にもなると、それはそれで重みがあるのよ。まあ、腐れ縁とも言っけどね」

彩香は素直に聞いているようだが、三条は彼女がこんなカビ臭い話に興味を持つはずがないことを知っていた。

ただ前振りとしては、年齢的に少々無理があったとしても、せずにはおれない話だった。

そして結論に向かった。

「それでね、竹見沢さんにもそういう人がいるのよ。お互いにね、腐れ縁。フフ、私じゃないわよ。私はいわば昔から繋ぎ役。というか、調整役。先生と同年輩の女性よ。八月三日の夜、竹見沢さんを待っていたのは、実は私じゃなくて旦那さんも子供もいるその女性。もう一度聞いわね。彼女の新しいライバルはあなたなのね。若くて聡明で、その上とてもチャーミングで、五十おばさんにはとてもかなわない、あなたね。だからといって、嫉妬に狂うなんてことはないから気にすることはないのよ。彼らの単に古い友達関係だから」

彩香は微笑んでいた。三条も微笑んでいた。

「返事がないのは認めたことと見なすわよ。フウー、私も変よね。彼女に代わって竹見沢さんの新しい彼女を確かめちゃうんだから。私も彼女と腐れ縁ってことよね」

三条は声を出して笑った。

彩香も、そんな友達っていいですよ、と笑った。

「誤解がないように言わせてね。竹見沢さんが若い女性に目移りするのはいいのよ。そういう巡り合いがたくさんある職場なんだし、彼は素敵ですものね。彼女の方も幸せに暮らしているんだから、それを犠牲にするような恋ではないわけ。でも、不倫とか浮気とか遊びとか、どちらかといえば陰のある言い方ではなくて、昔の憧れをそのまま持っているとも言えるのかな。そんな、ささやかな関係なんだけど、でも竹見沢さんの新しいお相手がどんな人か、それだけ

はやっぱり知っていたいわけ。わかるでしょ」

彩香は、クッキーご馳走様でした、それにお話、楽しかったです、もう行かないと授業が始まりますから、と席を立った。

三条も一緒に部屋を出た。彩香が階段に向かう。微笑みかけた三条にちょこんと頭を下げ、彩香は、じゃ、またと、颯爽とした足取りで駆け去って行った。

三条は竹見沢のアリバイが成立したことを確信した。

27 謎の男

柏原はパソコンを前にして憔悴していた。

保存されているデータファイルやアプリケーションソフトを開いて、更新日時をチェックし、内容を読んで、気になる点がないかどうか、目を通そうとしていた。なんらかの作為があることを実証しようとしていたのだ。

しかし、この面倒な作業はほとんど空しく終わった。

それでも、ブログの原稿フォルダを見つけ、中に収められたデータが、先日読んだミステリという名の付いたフォルダの中のウェブページと内容が一致していることを確かめていた。

そして住道駅だという画像。

ウェブページと対で納められている画像のプロパティ。

作成日が四日一時五十九分で更新日は二日二十三時十六分。原稿フォルダの方は作成日が四日一時四十九分と十分前で、更新日は二日二十三時十六分と同じ。

しかし他のデータは少し様子が異なっていた。

ウェブページの方は、おのおののページごとに異なる日付で、画像もテキストも作成日と更新日は同時刻。それぞれの日に、ウェブ上からダウンロードされたということだろう。しかし、原稿の方はいずれも作成日は八月四日で、数秒と違わない。更新日はバラバラで、おのおのウェブページに記載された日付と同日か数日古い。つまり、これらは八月四日にまとめてコピーされたということになる。

したがって、住道駅だという画像だけがイレギュラーに更新日の日付が新しいということになる。

そして、原稿フォルダにその画像とセットであるべきストーリーカーの話のテキスト原稿がなかった。

明らかにこの短い話が、なんらかの謎を提示しているように見えた。

画像の中央に写っている男。

これは誰か。

それさえわかれば、一気に真相に近づくかもしれない。

そんな気がして、緑色と白の大きなストライプ柄のシャツを何度も眺めてはため息をついた。

大学生になった生駒は、それなりに忙しかった。

学業の方はそうでもないが、ふたつのクラブを掛け持ちし、バスに乗ってふたつのキャンパスを行ったり来たりしていた。

家庭教師のアルバイトは週に三日。普通自動車と自動二輪の運転免許を取り、北海道から沖縄まで走り回っていた。学生集会にも顔を出し、ダンスパーティーやスキーツアーにも行った。

高校の卒業時には、朱里とはもう会うこともないかと思っていたが、大学生になった後も時々は一緒に出かけた。

朱里の通う大学の文化祭。阪急神戸線の岡本の駅で待ち合わせた。暮れなずみ、しんと冷え込んだ奈良公園の飛火野。

黄色く色づいた御堂筋。

当たり障りのない会話の数々……。

生駒は思う。

あのとき、朱里に恋をしていたのだと。

高校時代の憧れのクラスメートが、今、少し大人になって、ルージユの匂いをさせて、隣にいる。

それだけのことで、数年前にはあけすけに言えたことが、もう言

えなくなっていた。

好きだというわずか三文字の言葉さえ。

ただ、高校時代の思い出はある長さのストーリーを持って記憶に留まっているが、大学生になってからの朱里との思い出は、かすかな断片となってしまった。

心に残る言葉の、あるいはシーンのひとつやふたつ、あってもよさそうなものだったが、脳のどこかに沈殿してしまい、浮かび上がっては来なかった。

それらの思い出が、どれも苦いものだったからかもしれない。

デートといえば、なんとなくいらついた気分で、手を繋ぐことさえなく、ただ歩き回るばかり。

朱里が死ぬ直前、独立すると言いに来た夜、彼女の方から手を握ってくれたことが、朱里の体に触れた最初で最後のことだったのかもしれない。

いつ、どこで、何を話して別れたのか。

いや、プツリとした別れというようなものは、なかったのかもしれない。折鶴が色褪せていくような別れ……。

はたして、付き合っていたといえるのかどうかさえ怪しく、生駒は自分の幼さを呪うのだった。

ただ、はつきりと言えることは、あの頃、生駒の心に朱里が住んでいたということだけ。

生駒はそんなことを思いながら、ユウと腕を組んで天王寺の町を歩いた。

「すごいことを発見したぞ！ 住道駅のコンコースの写真！」

生駒と優が店に入るなり、柏原が得意満面でまくしたてた。

「お、今日は。回る回るよ、時代は回る……」

弓削がすでにビールを飲みながら、生駒達を待っていた。

「中島みゆきか。どうだ、今日はちよつとセンチに、アグネスの白い靴下はもう似合わないでしょう、なんてのは？」

生駒のどうでもいい提案を全く無視して、柏原がビールをふたつ、カウンターに置いた。

「男の後ろ姿が写ってただろ。そいつの画像を拡大して、目を皿のようにして調べたんだ。そしたら、驚くなよ。なんとあの画像、合成されてるんだ」

「へえ！ ということや？ 朱里が？」

「いや、そうじゃない。犯人がやったに違いない！」

「合成？ さっぱりわからんぞ。絵が出てから、ゆっくり説明しろ」
「その前に」

ウィンドウズの文字がまだ浮かんでさえ来ないパソコンを睨みつけながら、柏原がブログの原稿を発見したといった。

「やっぱり朱里の」

「先走るな。その話は後だ。まず弓削の報告を聞け。ちよつと妙な話だ」

朱里のマンションに噴水はなかったし、M金属の寮は女子寮だったという。

「へえ、女のストーカーかいな」

ため息をついて、弓削は、

「なんだかあのブログもいい加減な感じがしてきましたね」と、がっかりしている。

「あまりリアルじゃ、しんどいということじゃないかなあ。作者もその辺のことがわかっていて、あえていい加減さを装っているとか。いわゆる照れ隠し。だいたい、自分のことを話すのに、猫とかサボテンとかに語らせるってさ、自意識が強い割に、精神的に弱い感じ

もするやん」

優が解説めいたことを言う。

生駒は朱里のことを悪く言われたような気がした。

「ユウ、つまり、朱里のブログじゃないって言いたいんか？」

「うつん。そうやなくて、もし朱里さんやったとしたら、そういう精神状態やったんかもしれないってこと」

「要は、朱里のブログやったということが結論か？」

佐藤夫妻と赤石、そして上野にもはがきが来ていたが、生駒たちはあのブログが朱里のものであるかどうか、まだ決め手を見出せないでいた。

疑問がいつまでも疑問のままで、ストンと落ち着かない、なんとも居心地の悪い状態が続いていた。

ただ、原稿があつたのなら、ブログは朱里のものと決まったようなものだが。

ようやくパソコンが完全に立ち上がり、ハードディスクへのアクセスランプが消えた。

「あのストーカーの話の写真ね」

「そう。さ、お待ちかね。拡大するぞ」

「おい、中島みゆきの次はユーミンのルージユの伝言と違うんか。」

で、その次は拓郎だろうが。雰囲気的には。なんで、蜂のムサシが死ぬんだ。それに、アグネスは、」

「うるさい」

拡大した部分は、ジーンズの裾のあたり。

周囲に背景らしき画像の小さな白い断片が残されており、元の画像の背景であるコンコースのタイル目地の黒いラインと合っていない。

弓削が食い入るように画像を見つめて、なるほど……、と唸った。

「この男性は貼り付けてあったんですか……。ブログに掲載するために手直したんでしょうか？」

「とは限らない」

柏原がやけにきつぱりといった。

「この画像、作成日は八月四日一時五十九分で更新日は八月二日二十三時十六分。朱里が死ぬ直前に加工され、死んだとほぼ同時期にコピーされたんだ」

ギクツとするようなことを言う。

優がカウンターをパンと叩いた。

「ちよつと！ 説明してよ。作成日とか更新日って。作成日ってのは撮影した日じゃないん？」

柏原がにやりとした。

「へへ。実は僕も知らなかった。デジカメで撮影してパソコンに取り込んだ日は作成日。どこからコピーしたり、ウェブからダウンロードした日も作成日。新規に作成したことになるんだ。でも、加工して上書き保存しても作成日は変わらない」

「じゃ、更新日は？」

「加工したりして上書き保存すると、作成日は変わらず更新日が変わる」

「ウェブから取り込んだときには更新日はどうなるん？」

「取り込んだ日さ。ウェブから取り込むと作成日と更新日は同じだね。わかった？」

「コピーしただけなら作成日は変わって、更新日はそのまま変わらないんやね？」

「そう」

「すると、作成日より更新日の方が古い日付ってこともあるんやね」「そうそう」

優は理解したようだ。

生駒は当然の思いつきを口にした。

「ということは、わざわざそんな加工をしたわけやから、この男に何らかの意味があるはず、と」

「そう。更新日を頼りにすれば、加工されたのは朱里が死ぬ直前の八月二日」

「じゃ、柏原さん。原稿の方の画像はどうなん？ 今、見せてくれたのはウェブページの方の画像でしょ？」

「さすがユウ。話についてこれてるな」

「あたりまえやん」

柏原が原稿の方の駅の画像を開いた。

こちらの画像にも加工の跡があった。更新日はウェブの方と同じ時刻。

「ということで、やはりこの画像だけが、朱里が死ぬ直前の八月二日に加工されたってことになる」

「おまえ、さっきから何度も朱里が死ぬ死ぬって、やめてくれないかな」

「気にするな。その方が日付が頭に入りやすいだろ」

「あれ？」

優がパソコンをいじっている。

「テキストの原稿がない」

「ほら、生駒。ユウのようにアクティブに考えないと」

「フン。で、なにがないんやて？」

「原稿フォルダにはストーリーカーの話がない。画像だけあって、テキストデータがないねん」

「そうか！」

弓削が突然、大声をあげた。

「目立たせるためじゃないですか？ メッセージですよ。この画像に、気を向けさせるための」

柏原がにやりとした。

「僕もそう考えた。僕らが注目したのは、その思惑通りじゃなく、弓削が住道駅だと言ったからだが、いずれにしろこの画像が気になつてしかたがない」

「そして、この男に注目している」

「犯人の挑戦状！」と、優が言い放った。

「朱里さんが加工したとは限らないわけやんか。ということは、これ、ね？」

「推理小説の読みすぎ」

「じゃ、この人、誰なん？ こいつが犯人よ、きつと」

柏原がパソコンを操作する。

「まだ、話の途中だ。他のファイルはどうだったか。ウェブページの方はそれぞれ別の日で、作成日と更新日は同日同時刻。不自然さはない。それぞれの日にウェブからダウンロードされたということだろう。しかし原稿の方はすべて作成日が八月四日の同時刻。更新日はバラバラで、おのおのウェブページのものより数日古い。つまり、原稿はすべて八月四日にまとめてコピーされたということになる」

「匂いますよね。特にその日付は」

「だれかが、この原稿データ一式を朱里のパソコンに入れたとすれば……」

柏原がそういつて優を煽った。

「自分のブログを使って挑戦状を叩きつけてきたのよ！」

「おい、ちょっと待ってくれ」

生駒は三人の顔を見ながらいった。

「みんな、先走ってないか？ まず、あのブログ。だれのものか。」

これはどうや？ 感覚的には朱里のものに見える。そうやったよな」
三人とも頷いた。

「なのに、今、あたかも犯人のブログであるかのような、そして犯人がなんらかの仕掛けとして利用したかのような口ぶりや。ここで間違ったら、正しい結論に行き着かないぞ。朱里自身が加工したということも考えられるわけで……」

生駒は悩んでいた。

ブログの作者は朱里か。脈絡からみれば、その結論になるだろう。しかし、誰かが仕組んだものという可能性を考えると、その常識的な判断こそが犯人の思う壺ということになる。

もっと直接的な証拠はないものか。

生駒は弓削の様子を盗み見た。

目を伏せて猛烈に考え込んでいる。そう装っているだけかもしれないが。

「万事休すですね。この男が誰なのかがわからないんじゃないか」
その弓削が大きく伸びをした。

実際、生駒もこの議論には疲れていた。

「朱里さんのサイトかどうか、結論が出ないし」と、優も腕組みをする。

「いずれはつきりするさ」

柏原が笑い、急にバーテンの顔になって、お代わりは？といった。さりげなく、話題を変えたかったのかもしれない。

今日のオルカは久しぶりにビートルズが掛かったと思うと、次の曲は青い三角定規の「太陽がくれた季節」だった。

まったくそんな気分ではなかったが。

「ところで、なあ柏原。朱里のあのミステリー。あれは今度のこと

「関係あると思うか？」

「グランプリ作品『水霊の巫女』か？　そうやな……。そんなことより、彼女の最初で最後のエンターテイメント作品かもしれない。あれはそのつもりで楽しんでやれよ」

28 気のない返事

「おう、生駒か。……なに！ 画像は貼り付けられていない？」

受話器から柏原の興奮した声が響いてきた。

「ああ、同じように拡大してみた」

生駒は優が事務所のパソコンに保存していた『幸田さん』のブログを開いていた。

「男は写っている。同じ人物のようだ。でも、貼り付けた形跡はない」

「やっぱり八月二日に加工したということやな」

「しかし、理由は？ 人物そのものは、どう見ても同じやつに見えるぞ。人物のサイズは加工した方が微妙に大きいけど」

生駒は柏原から送ってもらった同じ写真を見比べていた。

「それにもうひとつ。朱里のパソコンには書道の先生の話がなかった」

「なんだそれ」

「もともと公開されたブログでは、最後からふたつ目は、書道の先生が語るといふものやった。ユウが俺のパソコンに残してくれていた。メールでそっちに送っておく」

「ユウのお手柄か」

「なんでも残しておく性分らしい」

『書

ええ、ええ。あの人は熱心な生徒さんです。

うちに来はってから、かれこれ五年にはなりますか。

まあ、お習字の上達には、終わりというものはございませんからねえ。

今度引越しされて、以前よりずいぶん遠くなられたそうですが、今まで通り、ちゃんと阿倍野の教室まで通って来はります。

もう私も年ですし、新しい生徒さんはお断りしてますねんけど、あの方にはずっと続けて欲しいと思いますねえ。

いずれもつと上手になりはって、ご自分の教室を開かれるようになって、上手にやっていきはると思います。

それから、なんでも、絵画もお好きやそうです。

ご自分でお描きになるのですよ。

ご謙遜されて、一度も見せていただいたことはございませんが、絵がお上手なことがお仕事にも活かされて、それが楽しいとおっしゃってはりますよ。

ご旅行や山登りをされたときなど、簡単にスケッチされて、帰られてからじっくりと描かれるそうです。

人に付いて習われたことはないそうで、見よう見真似で始められたそうです。

いろいろおできになられる方でしてね。

外国語や音楽や写真などもお上手だとか。

うらやましいですね。

私らみたいな古い女には、とても真似は出来ません。

興味のあることにはほんと飛び込んでいかれるようでして。

見かけは少々おとなしいお人なのですが、芯には強いものをお持ちなんでしょうね。

常になにかに追いかけられているような気がしている、とおっしゃったことがあります。そうして、ご自分を奮い立たせておられるのだと思います。

七月七日 ㊦

書の作品の写真が掲載されていたが、生駒にはなんと書かれてあるのか読めなかった。

「趣味の悪い自慢話みたいなもんやな。これを朱里が書いたとは思えない、という気になってきた」

「そうだな」

柏原との電話を切って、生駒はため息をついて「水霊の巫女」を開いた。

優が部屋に入ってきた。

「あ、また読んでる」

「おはよ」

「あのさあ、ノブが何度も読み返したい気持ちはわかるけどさ」

「いや。俺は考えてるんや。グランプリをとったミステリー作品の『水霊の巫女』と『幸田さん』のブログの出来栄えに、こつも差があるのはなぜなのか」

生駒にとつて、このミステリーの存在が、推理する気力を維持させていく原動力だった。

捜査はさほど進んでいない。新しい情報は少なかったし、真相に近づいているという確信は全くなかった。

朱里は、この作品がグランプリを取ったことを知らずに死んだのだ。

そう思うと、生駒はなんとしてでも真相を解明するのだという決意を新たにするのだった。

「だからねえ、何度も読み返すのもいいけど、もっと推理しようって」

「推理か……」

「そう。怒らないでよ。漫然と思い巡らすより推理よ。論理的思考」

生駒はようやくパソコンから目を離し、テーブルの端っこに腰かけた優の顔をまっすぐに見た。

「なにか考えがあるようやな」

「ううん、ないよ。でも、これだけは言える。このミステリーには朱里さんの事件にぴったり符合するようないことはないと思う。でも、なにかの示唆かもしれないとは思うけど」

「ロープか……」

「そうかもしれない。あるいは、事件とは関係ないけど、ある記述が誰かを特定できるのかもしれない、とかさ」

「それと感ずるところは、なかったような……」

「そのつもりで読んだ？ 私はわからなかった。コナラ会メンバーにしかわからないことなのかもしれない」

「なにかあやふやな話やな」

「うん、そう。朱里さんがなぜ殺されたのかわかっていないけど、金銭が絡んだことじゃないみたい、よね。なにか別の目的のために排除したかったって感じ。あるいは、なんらかの憎しみ」

生駒は少し驚いて優の言葉の続きを待った。

「どんな憎しみかなあ。復讐？ 嫉妬？ 怒り？ ノブの昔話は聞いたけど、私にはその深いところにあるものはわからない。犯人にとって、どの憎しみを理由にすれば、自然な発想として朱里さんを崖から突き落とそうという意思が出てくるのか」

「人を殺しておいて、なにが自然な発想なもんか」

「思い詰めた人にとっては、ということ。そろそろ、例の亡霊達を召還する時期かもよ。あ、うそうそ。絶対に必要ないと思う」

生駒はため息をついて、またパソコンに目を落とした。

「サイトの方で読んでるん？」

「いや。原稿」

「サイトの方が読みやすいよ。作品に対する意見交換の掲示板もあるし」

「いや。生の原稿の方が、なんとなく」

「ふうん。ノブはそうかもね」

プリンターが軽やかな音をたててテキストを排出し始めた。
優がプリントアウトした「水霊の巫女」を持って、ソファに寝転がった。

生駒は、足をぶらつかせて読み始めた優の後ろ姿に微笑んだ。

空は、いつのまにか秋の訪れを告げていた。

太陽もそろそろ現役を降りるというような態度で、覇気がない。
生駒は久しぶりに紅茶を沸かし、ゆつくりとした朝を過ごしていた。

「柏原か？ あのブログやけど、朱里のじゃない。住道駅の画像を
駅員とハンバーガーショップの店長に見せたら、撮影日が特定でき
たんや。今年の六月二日金曜日。百円ケーキの出店は金曜日だけで

……」

「それで、なぜ朱里じゃないとわかるんだ？」

「あいつはその日、東京出張やった。三好さんに確かめた。まさか
百円ケーキや店の幟が貼り付けられているのかと思って画像を調べ
てみたけど、その形跡はない」

「ふーん」

「あん？ なんやおまえ、反応がないなあ。あいつのブログじゃな
かったことがはつきりしたんやぞ」

「ああ、わかった。で、誰のだ？」

「それはわからない。ん？ おい、なんか、気のない声やな。どこ
か具合でも悪いんか？」

「いや、そういうことじゃない」

柏原の精気のない声に、生駒はいらだった。
「なら、なんや？」

「僕はいつもどおりだ」

「しかし、一昨日の推理会議でも、おまえからはなににも……」

それ以上言うのをやめた。

生駒自身、自分達の推理に限界を感じていたからだった。

「ふう！やなあ」

大きなため息が出た。

あきらめ、あるいは倦怠感を吐き出したのかもしれない。

「ところで、みんなの返事はどうやった？ はがきの件」

「あれを受け取ったのは、ほんの数人だけだったようだ。それに、
まともに受け取ったやつは誰ひとりいない。生駒以外は誰も『幸田
さん』のサイトにアクセスさえしていない」

「やっぱりな。あんな怪しいもの」

「でも、おまえは見た」

「俺やない。ユウが好きなんや。ああいうの」

「そういえば、弓削はどうしてる？ そもそもその依頼者は」

「ああ、電話はよく架かってくる。こまごました情報や思いつきを
言ってきたり、俺たちの考えを聞いてくる」

「相変わらず熱心なことだな」

「……柏原。おまえ、やる気なくしてないか？」

「そういうことじゃなくて、弓削の熱心さが不思議なだけだ」

「そりゃそうやる。あいつは……」

「あいつは、なんや？」

「いや、軽々しく口にするとまずい」

「まずいか……」

とにかく柏原の声は沈んでいた。

電話を切るタイミングを互いに言い出しにくいかのように、あま

り意味のない話題がだらだらと続いた。

ここしばらくは、朱里の調査の合間に仕事をするというような毎日だった。しかし調査の進展は、実質的にはほとんどなかったといっ
っていい。

住道駅の男の後ろ姿を、食堂の夫婦や三好、そして上野に見せても収穫はなかった。

生駒には、肝心なことがなにひとつわかっていないように思えた。わかつていないどころか、朱里は殺されたのだという仮説の上に、ばらばらの無関係な事実や想像を単に積み重ねて、それを推理と呼んでいるだけだ。そんな自己嫌悪があった。

だからといって、事態を進展させるアイデアがあるわけでもない。これ以上、朱里の死をもて遊んではいけないのではないか、という思いが時として頭をかすめるのだった。

柏原の態度も変わった。

生駒の報告や相談に生返事をしてくることが多くなっていた。考えることに疲れた、お前達でやってくれ、自分は降りる、と言っているようにさえ聞こえた。

一時は探偵役として推理をリードし、生駒や弓削や優にあれこれと指示を出していたのに、最近ではすぐにバーのマスターの顔に戻ってしまう。

生駒にとって唯一の救い、あるいは推理を継続させる熱意を喚起してくれるのは弓削の存在だった。

三日をあけず電話を架けてきて、生駒を鼓舞するようなことを言ってくるのだった。

柏原との電話を切ると、その弓削から電話が架かってきた。

忙しすぎてなにも手伝えなくてすみません、というのが最近の弓

削が切り出す定型の挨拶だ。しかし、生駒から弓削に伝えるニュースはめつきり少なくなっている。

「ところで生駒さん、さっき思い出したんですけど、確か赤石さんのホームページに、行者還岳の登頂記録が載っていたように思うんです。だいぶ前のことです。参考になるかもしれないので見られたらどうですか。僕は今出張中なんですが、帰ったら見てみようと思います」

サイト名は近畿秀峰探訪とかなんとか、そんな名前だったという。弓削がこらえたような笑い声をたてた。

「了解。見てみるよ。ありがとう」

「あ、礼なんて。手伝えなくて申し訳ないと、いつも思っているんです」

朱里さんの件はここが踏ん張りどころですよ、などと弓削が言うのを聞いて、電話を切った。

グーグルで検索すると、近畿秀峰探訪というサイトが出てきた。しかし、開こうとすると、ページが見つかりませんと表示された。

29 ストラップのシャツ

優が入ってきた。生駒は携帯を充電器に差し込んで、大きく伸びをした。

「やれやれ。疲れたな」

「誰？」

「赤石さん」

生駒は赤石の近畿秀峰探訪というサイトのことを説明してやった。

「お、新情報やん！」

「閉鎖したんやと。忙しくて更新できないからって。まだ事件に首を突っ込んでるのか、くだらんことを聞いてくるなと、えらい剣幕やった」

優はバッグをソファに放り出した。

「ノブ、なんだか友達なくしそうやね」

「素人探偵ではここらが限界ということやな。あー、くそっ。友達を失くし、事件は迷宮入りか！」

「こういうのを閉塞感っていうねんね。柏原さんもやる気なくしてるみたいやし、隆之さんも朱里さんの部屋を引き払って帰ってしまったし」

しかし生駒は、柏原を責めるつもりはない。

何の根拠もない生駒や弓削の疑念から推理を始め、探偵役を自ら引き受けて店を何日も貸切りにしたにもかかわらず、行き詰ったのだから。

「コナラ会もこれで終わりかも」

それにもまして、生駒の気を重くしているのは、昔の仲間達を片っ端から疑ってかかったことだった。

もちろん本気で疑ったということではない。少なくとも自分では

そう思っている。しかし仮定の話とはいえ、様々な可能性を何日も考え続けてきた今となつては、相手を目の前にして心底そう言いきれるかという心許なかった。

「紅茶、飲むか？」

「うわ。ありがとー。ね、柏原さんは弓削さんのこと、なんか言ってた？」

「いや、たいして」

「よくあるやん。犯人は犯行現場に戻ってくるとか、犯行を臭わすなにかを現場に残していくとか。あるいは、自分の犯行の成果を見せびらかしながら、かつ嫌疑の外にいるために自分で通報するっていうのが」

「そうやな」

「柏原さんはまだそんなことを考えているのかなって」

生駒はその考えに反対はしないまでも、リアリティを感じていなかった。

「まあなあ」

「でもさ、あの人、きつとなにか隠していること、あるよ」

「なぜ、そう思う？」

「さあ。勘よ」

「勘ねえ」

「さあてと、私の報告をするよ。薫さんの家に行つて来てん。都合がなかなかつかなくて、延び延びになつてさ」

生駒は「新手の情報か」と、一応は耳だけ向けた。

「なんだか、彼女、変わつてた。悩みがあるんやて」

生駒は熱い紅茶の湯気を吸い込み、いい香りだ、と言いつつむせた。

「ノブ、ちゃんと聞いてよ。おもしろい話なんやから」

「他人の奥さんの悩みなんて、聞きたいとは思わないぞ」

「そんなんじゃないよん。薫さんは旦那のことで悩んでるねんなあ」
「ほら見る。そんな話を聞いて柏原に告げ口でもするんか？ それとも俺が赤石さんを諫めるんか？」

「えーい、最後まで黙って聞け！」

優がむきになってテーブルを叩いた。

「うわっ、紅茶が」

「旦那が浮気をしてるって確信があるわけじゃないんやけど、この頃なにかおかしいっていうねん。夫がやたらと山登りに出掛けるって。それもいつもひとり。ちなみに薫さんは山登りなんて絶対に行かない女性」

生駒は、ふーんと気のない返事をした。

「なんていうのかな、始めは漠然とした不安やったんやて。つまり、なぜあんな疲れるだけのことに興味を持つのか、なにか家庭に不満があるのか、ストレスが溜まっているのか、っていう妻としての不安ね。それがいつしか、山登りというのは嘘じゃないか、あるいはひとりじゃないんやないかという不信感に変わったのね」

「ほー」

「彼女、専業主婦やんか。ひとり息子の手が離れてくると、自分の存在価値を強烈に見出すようななにかがないことに気がついたんよ。かわいそうにさ。いくらお稽古事に打ち込んでも、もともと器用な人やから、そつなくこなしてしまつて、燃えることができないんやと思う。そんな毎日。そうしてだんだん、家庭の中での自分の立場が希薄に感じられてくる。自信もなくなってきて、最後には夫が自分を必要としなくなったのではないかと思ってしまうわけよ」

「はあ」

「退屈によるストレス。怠惰から生まれる疑心。そういう関連ね。でも彼女は賢い人やから、自分がそういう精神状態になっているということもよくわかつているのよ」

前置きが長すぎたかな、と言いながらも優は話し続ける。

「でさ。薫さんはとうとう我慢ができなくなって、というか、出来心って彼女は言ってたけど、夫の行動を覗いてみる気になったんやて」

「へえ」

「で、夫宛てのメールを読んできた。旦那さんの方は、妻がパソコンを扱うことができるなんて思ってもないんやて。妻がパソコン講習会に行ってたことさえ知らないそうよ。それでね、どうやったと思う？ 案の定、彼女、パニックになってしまった。ちょっとノブ！ 起きてる？」

優がティーカップを摘み、テーブルの上でカチカチと音をたてた。ああ、と生駒は目を上げた。

空になったティーカップに伸ばしかけた手を頭に持つていき、薄くなつた頭皮を擦った。

「それで薫さんは、ひとりで悩んでたんよ。でも落ち着いてきたら、誰かにこの話を聞いてもらいたいと思うようになったんやね。もちろん誰でもいいわけじゃない。旦那と全く関係のない人にね。で、私の登場」

優がハハハと声をたてて笑った。

「はあ、それで？」

「でも実はね、彼女の話聞いて、私、笑ってしまった。何年か振りに会って、旦那の愚痴ばかり聞かせる方も変だけど、それを聞いていきなり笑い出す方もひどいよね」

「そうやね」

「でも、これは笑うよ。彼女、とんでもない勘違いをしてたんやから。どういうことが、わかる？」

「いや。知りたくもないな。そろそろ本題に入れよ」

「まあまあ、順番があるんやから。でね、旦那にさ、ある特定の女

性から何通もメールが来てるんやって。そしてなんと最新のメールは、八月三日に会って欲しいという内容。それに返信済みのマークはあるけど、送信済みフォルダには残されていない。ところがね。その八月三日っていうのは、旦那が山登りだと言って出かけた日。彼女は目の前が真っ白になったんやってさ。さて、その女性とは誰でしょう?」

それは上野だと生駒は思った。

しかし首をすくめただけで、優の話の続きを待った。上野の件なら優も知っているはず。

優のニヤニヤがますます大きくなった。

「メールの送信者はアルファベットでTOSHIMI。どう? わかる? 私はすぐにぴんと来たよん」

「はあ」

「これって弓削俊美。ね、ね、おかしいやろ」

「はあ、ハ、ハ」

「薫さんにそれは、って教えてあげたら、彼女、弓削さんのことは知ってた。彼女、自分の勘違いがわかって、急にお喋りになってさあ」

「フウワアーン」

あくび交じりのため息が出た。

「こら、ノブ。いつまで私に話を続けさせるつもり? ここまでの話でなにも感じないん?」

「フウエ? なにを?」

「だからさあ、旦那っていうのは赤石さんのことやんか。赤石さんは三日のことはどう言ってた?」

「鳥取に……」

「喉が渴いた。喋りづめで」

優の笑顔は消えていた。

生駒は目の周りをこすった。強くまぶたを閉じ、ぱっと見開いた。

「赤石さんは鳥取に行ったということやった」

「そう。それに赤石さんは薫さんにどこの山に行くと言ったと思う？」

眠気が振り払われた。

「どこ？」

「目が覚めた？ 薫さんはこう言った。三日の朝、旦那は大峰の行者なんとかという山に登ると言って家を出たって」

「行者還！」

「そう」

「なんと！」

「赤石さんは夜の七時ごろに帰って来た。それからまた赤石さんは家を出た。会社で作業だからって。そして翌朝のご帰還」

優が生駒の顔を覗き込んだ。

「どう思う？」

優はニツと口元をほころばせたが、生駒は背中に鳥肌が立ったように感じた。

椅子に深く座り直す。もう一度説明してくれとは言わなかった。

「赤石さんが行者還に行ったというのか。八月三日に……」

生駒は口を引き結び、背筋を伸ばし、そのまま天井を見つめた。

「あつ、そうそう。その日は結婚記念日なんやて。旦那はすっかり忘れてしまってるって薫さんは笑ってた。ノブは覚えてた？ 私とノブが初めて会ったはずの日」

生駒は笑わなかった。

優の顔にも笑みはなかった。

「ノブ、あれ見せてくれる？」

「ん？」

A4版のプリントアウト。

朱里がメールで送ってきてくれたコナラ会の記念写真。
優の指がその記念写真の上を滑っていく。

生駒は、あつと言ったきり、絶句してしまった。

次の言葉を搾り出したときには、口の中が渴いていた。

「いつ気がついた？」

「さつき」

生駒の口から唸り声が漏れた。

「あの画像を最初に見たときから、どこかで見たなという感じがしてたんだよ。薄くて感じのいい緑色と白の大きなストライプ。なかなかこんな柄はないやんか。いつも目に入ってたのにね」

生駒は写真の男の満足そうな笑顔を見つめた。

ストライプ柄のシャツを着た赤石が、照れた顔の朱里の肩に手を置いていた。

生駒は思った。

いつの時点でか、柏原は赤石の嘘に気がついたのかもしれない。

赤石の妻は柏原の妹だ。優より情報に近かったといえる。

優と同じように、あの男のシャツにも気がついてたのかもしれない。

生駒は頭に血が昇って、目の周りが熱くなってくるのを感じた。

柏原はそれに気づいていて……、だから最近……。

「ね、これは？」

写真には「スティング」のチケットの半券がクリップで留められていた。

「内緒」

優は少し悲しげな目をしたが、なにも言わなかった。

生駒が勢いよく携帯電話を掴んだからだった。

しかし電話が繋がるなり、柏原の、ちよつと待て、僕の話が先だ、
という大声が流れ出てきた。

「……ええっ、なんやて！ どういうことや！」

30 行者還岳

午前十時半。

生駒は阪神高速道路松原線を南に向かつて飛ばしていた。

さつき柏原が電話で伝えてきた、とにかく朱里が死んだ現場に急行してくれ、という言葉がまだ耳に残っていた。

今はゆつくり説明している暇はない。

とにかく行ってくれ。一刻も早く！

蛇草さんと鶴添さんと赤石が、朱里の追悼のために行者還岳に向かった。

とんでもないことが起きるかもしれない。

いや、念のためだ。無駄足になるかもしれないが。

生駒、悪い。

とにかく追いついて、ことが起こりそうだったら、それを止めてくれ。

詳しいことは帰ってから言う。今すぐ出てくれ！

柏原はもう一度、頼む、といって電話を切ってしまった。

生駒は緊迫した言葉に背中を押されるようにすぐに出発し、ハンドルを握っている。

なにがどうなっているのかわからなかった。

ただ、赤石の名前が出た。今は柏原を信頼して動くしかないと思った。

西名阪道路に入り、大和郡山出口から国道二十四号を南下。

三〇号に入ってから山間部の道路をひた走る。

数週間前、オルカで生駒自身が説明したとおりのコースである。

修験道の聖地も、今や大阪から三時間ほどで行くことができる。観光客も訪れるようになり、新しい村営温泉場は季節を問わずキャンプ客や行楽客で賑わうようになった。公衆トイレのあるドライブインでは、大阪ナンバーとなにわナンバーが数珠繋ぎになって駐車していた。

河合の集落を左折し、清流脇の道を遡っていくと、いよいよ川迫溪谷に差し掛かる。

大峰山系から湧き出た冷たい水が豊かに流れ下っている。道は溪谷とぴったりくつついて、切り立った崖を伝っていく。曲がりくねった細い道は、対向車が来てもかわせる幅はない。

道のいたるところに転がっている人の頭ほどもある大きな落石を避けながら、生駒は慎重に車を進ませた。

大峰の代名詞、山上が岳の南斜面から流れ下る水と、弥山の北斜面から流れ下る水が合流する地点。

そこにコンクリートの橋が架かっていた。傍らには朽ちかけたあずまや。その前に、かろうじて二、三台の車が停めることのできるスペースがあった。行者還岳への登山口である。

朱里の車が発見されたのは、林道をもう少し奥に入ったところだったそうが、生駒は見に行くことはしない。

すでに午後一時を過ぎていた。

車から降り、先客の車のナンバーに目をやる。

なにわナンバーと大阪ナンバー。

携帯電話を取り出したがすでに圏外。

登山靴の紐を結び直して軍手をはめ、歩き始めた。すぐに、人がひとり通れるだけのゆらゆらした吊り橋を渡ることになる。

錆の浮いたワイヤ製の手すりをしっかりと握り、白く逆巻く急流の上に、そろりと一步を踏み出した。

登山道はいきなり急登だった。

たちまち汗が噴き出す。

山の西側から、山頂に向かって高度を上げていくことになる。

細い山道に覆い被さるように灌木が繁茂し、人の行き来がほとんどないことがわかる。

ごろごろとした石を踏んで歩きにくい。

尾根に出るまでの樹林帯は、沢の湿気でねっとり蒸し暑く、息が詰まるような思いだ。

うつそうとした緑以外に見えるものはない。散策のつもりでゆっくり登るのであれば、こういう道も楽しいのだろうが、ただ先を急ぐだけの今の生駒には、苦難以外の何物でもなかった。

喘ぎながら三十分。

ようやく関西電力の鉄塔が見えてきて、視界の利く尾根道に出た。溪谷を挟んで眼前に弥山が迫っている。頂部が美しく尖っている。大峰の主峰と呼ばれるだけのことはあって、大きな山塊が荘厳な印象を与えている。

尾根に出たことで、日差しがともに生駒の顔を照らし始めた。

鉄塔の下まで来て、初めての休憩をとる。

倒れ込んだといっている。べったりと地面に座り込んだ。

生駒は、ちよつと頑張りすぎやな、と声に出した。

オルカで皆に見せた地図を広げた。

朱里が倒れていたという現場まで、まだ三割ほどしか進んでいない。今日は特に暑い。体力を温存しながら登なければ。

柏原が口にした万が一のこと、というのが気になっていた。もう昼飯にしてもいい時刻はとくに過ぎていたが、暑すぎることに気持ちが急いでいることで、とてもそんな気にはなれない。それにしてもほんまにどういうことや、柏原のボケはなんにも説明しくさんと、と生駒はまた口に出して悪態をついた。惜しむように、ひと口ちびりとペットボトルの茶を飲んで立ち上がった。

そこから一時間ほどは尾根道だ。日差しが眩しいほどに明るい。手を使って登るほどの難所はないが、アップダウンが激しく、視界が広がるところに出るたびに小休止を入れたくなる。やがて尾根が細り、いよいよ頂上に向かっての急登にさしかかってくる。目指す崖はもうすぐだ。

吊り橋を渡ってから人の姿を見ていない。赤石ら三人はまだ上にいる可能性が高い。行者還岳に登る道は一本道ではないが、生駒は最もポピュラーであろうと思われるルートを選んでいた。

山もみじの大きな根元を回り込むと、眼前に巨大な岩肌が見えてきた。

南を向いた大きな崖。

遠くからでも、それとわかる行者還岳の特異な山頂部の形状が眼前に迫っているのだ。

幅広の刃の切っ先が地面から突き出たような山頂部の崖。道は迷うことなくその崖に向かっていている。

生駒は歩調を速めた。

近づくにつれ、それまでの比較的明瞭な山道は、やっと足を乗せられるくらいの細さになっていった。

ついに崖の手前に到達した。

眼前左手に岩肌がそそり立ち、シダやごく小さなかん木がかるうじて貼り付いている。

右手は垂直かとも思える角度で深く落ちこみ、木々の梢が百メートルほど下に広がっている。

見上げると、岩とその頂部に生えている木々が、青空をちょうど半分に切り取っていた。

行く手には、岩肌をわずかに削り取った頼りない足場が続いている。ところどころに鉄のはしが横倒しに掛け渡されているが、細いそのはしご段に一足ずつ乗せて進んでいくのは、なかなか思い切りが必要だ。はしご段の隙間から容赦なく絶壁のはるか下が目に入る。かるうじて頼れるものは、部分的に張り渡された鎖と、応急措置のようなトラロープだけだった。

このような崖をいくつか繰り返し登っていくと、主尾根であるいわゆる奥駈け道に出る。そこに避難小屋があるはずだ。奥駈け道を北に折れ、二十分ほど登ると行者還岳山頂への小道が左に分岐する。このあたりのルートは、朱里の事件以降、何度も地図を眺めて頭に入っていた。

朱里はこの先のどこかの崖で転落したのだった。

目の前のロープに手を触れてみた。黄色と黒のまだら模様のロープは真新しい。

先が輪になった鉄の杭が岩に打ち込まれ、そこにしっかりと結ばれていた。

もし、この崖に足を踏み出し、一步、二歩、三歩、ロープにつかまりながら、かるうじて靴を乗せることのできる足場を確かめながら進んでいるとき、このロープが外れたらどうなるだろう。

踏ん張れるものではない。

もちろん落ちればひとたまりもない。

生駒は、崖の下に視線を向けた。

強い風が吹いていた。

木々の梢が揺れている。

気の早い木がすでに紅葉を始めている。

聞こえてくる音はない。

鳥のさえずりさえもない。

真昼の山の中は、うつろなほどに静かだった。

「生駒さん！ 生駒さんじゃないですか！」

突然の大声で、生駒は飛び上がりそうになった。

足元から、小石がぱらぱらと崖の下へ放物線を描いて落ちていき、思わずバランスを崩さぬようにしゃがみこんだ。

さっと振り返ると、ふたつの人影が見えた。

声の主は鶴添だった。木々の間に立っている。蛇草がその後ろに座っている。

生駒が登って来た山道からは、彼らの姿は藪の陰になって気がつかなかったのだ。

生駒はゆっくり立ち上がった。鶴添が歩み寄る素振りをみせて、軽く手を上げた。

「びっくりさせてすみません」

鶴添は屈託なく笑ったが、蛇草の方は、惘然とした表情で生駒を眺めている。

赤石の姿は見えない。

「生駒さん、いったいどうしたんです？ まさかこんなところで会うとは思いませんでした！」

「あんたからこそ、そんなところでなにしてるんや。赤石はどうした。一緒に来たはずやろ」

鶴添が蛇草を振り返った。

不機嫌そうな男が、生駒をぐつと睨んでから口を開いた。

「おまえ、俺達をつけて来たんか！」

「赤石はどうしたんか、聞いてるんや！」

生駒は自分の鼓動が聞こえるような気がした。

本能は身構えろと指示していたが、生駒の理性が友人である態度をなんとか維持していた。

山道から外れ、草や枯れ枝で覆われた斜面をゆっくり登っていった。

ふたりが黙って見下ろしている。

大量に落ちたどんぐりを踏み、乾いた音が立つ。大きな倒木が根をあらわにし、根があつた地面に大きな穴ができていた。

生駒は立ち止まり、じっとふたりを見つめた。

疲れてやつれた表情をしていた。それでも、それ以上は近づかずに、蛇草を睨んだ。

「まあまあ、ふたりとも……」

鶴添が仲裁めいた言葉を出しかけてやめ、代わりに生駒に歩み寄ってきた。

蛇草が吐き続ける荒い息づかいが、はつきり聞こえてきた。

「赤石さんとはさつき別れました。赤石さんは頂上まで行くそうです」

鶴添の口調は穏やかだった。

どれくらい前？ 三十分くらい前。本当か。なぜ嘘をいうことがありますか。それならなぜふたりはここにいます？ 恥ずかしながら大休止。

といったやり取りが交わされ、生駒の体のこわばりが徐々に緩んできた。

急に汗が背中や胸に流れ出したことを感じた。蛇草がタオルをＴシャツの中に入れて体を拭き始めていた。

「朱里の巾いやと、赤石を誘ったらしいな」

いつの間にか、生駒は赤石を呼び捨てにしていた。赤石がクライアントの担当者であったころのまま、今までさん付けで呼んでいたのに。

蛇草が自嘲気味な笑顔をみせた。

「そうや。誰に聞いた？」

「柏原」

「ふーん。それでおまえはなにしに来たんや。花でも持って来たんか？」

「……」

「そうか。生駒を誘わなかったのは悪かったな」

「赤石は、なぜひとりで登って行った？」

「せっかくここまで来たんやから、ってことやろ。あいつが趣味の山登りをしているのはおまえも知ってるやろ」

蛇草が靴を脱いだ。

ふくらはぎをさすりながらニヤツと笑いかけてくる。

「朱里が死んだのは、たぶんその崖や。俺達は奥駈け道まで行ってみた。結局、その崖が一番高いし、ここ以外は下の方がよく見える。長い間見つけれなかったということは、その崖だと思う」
蛇草は生駒から目を離し、弥山に目をやって、それにしてもとてもないところだな、とつぶやいた。

生駒もつられて山塊に眼をやった。大きな雲の影が落ち、陰気な色合いを見せていた。

31 静寂の中で

「赤石とは上の避難小屋で別れた。俺達はこんなところに慣れてないからな。とてもやないけど、もう限界ということや」

蛇草の目が大峰の稜線をなぞっていった。

「ここまで降りて来て、…そこで黙祷した。今日の目的は終了ということや」

赤石は今どこにいるのだろう。柏原は物騒なことを口にしていたが……。

蛇草は生駒の思案を見透かしたように、問いかけてくる。

「柏原はなんて言ってたんや？」

柏原は、蛇草と赤石の間になにかあるといけないと……。まさか、そうとは言えない。

「今朝、電話を架けて来て、すぐに出発して三人を追いかけて……、合流したらどうかと」

「ふーん。なにのために？」

「とにかく急げということだ」

「で、とにかく来たというわけか？」

くそつ、相変わらず憎まれ口だけは達者だ。また胸にこみ上げてくる怒りを抑えて、

「ところで、なぜ誘ってくれなかった」

これを聞き出すことが先決だ。

なぜ蛇草が赤石を誘ったのか。竹見沢や生駒ではなく。

「なあ、生駒。おまえ、まだ朱里が死んだわけを調査してるんやろ」
蛇草がぼそりぼそりという。

「今日、俺達を追跡してきたのも、その一環やろ」
生駒を見据えた蛇草の目はさざなみさえ立たない乾いた目だった。

「いや、気にしてないから構えなくてもいい。それにしても、何の得にもならんのに、まだ継続してたとは。見直した」

生駒は、怒りが目からほとばしりそうになるのを必死でこらえた。
「ま、座れ」

蛇草が近くの倒木を顎でしゃくった。

「オルカでやった集まりな。俺も、ちょっと気が短かすぎたと思ってる。あのときは悪かったな。で、調査はどの程度進んだ？」

出鼻をくじかれたような気分になって、生駒はあいまいに、まあ、とだけ答えた。

「ほら、座れよ。前に電話で話したように、俺は直感的に竹見沢を疑った。しかしおまえは俺に、なぜ鶴添を誘ったのかと聞いた。俺にしちゃ、びっくりするような質問やった。あのとき、実は……、おまえの……、ひとつずつ疑問点を潰していこうという真剣さが伝わってきた」

蛇草がニツと笑った。

「俺も少し冷静になった。おまえを見習ってな。そして気がついた」
鶴添が手近な岩に腰を下ろした。

蛇草は目を落とし、脛をさすった。

短い沈黙があった。

「つまり……、この際やから言うけど、竹見沢を疑ってしまったのは、俺のあいっつへの……、単なる対抗意識というか……、まあ嫉妬心かもしれない気がついたんや。もちろん竹見沢を疑う理由がなくなっただけやないけど、あいっつ以外に考えられないということでもない、ということにも気がついた」

生駒は倒木に腰を下ろした。

「俺は一から考え直してみた。生駒のように調べまわることはできないけど、俺の知っている、なにかを思い出そうと……」

蛇草は少し逡巡したものの、すぐにまた話し始める。

「端的に言おう。実はな、竹見沢だけやなく、赤石も怪しいと思い始めたんや」

いまさらこんな話をして、しかたないことやけど、一応は説明させてくれ。

何年か前のコナラ会るとき、赤石が朱里と会っているようだという噂話があった。そう言ったのが紀伊やったか弓削やったか、それは思い出せない。

赤石は支店長に昇格。そのあとしばらくして、朱里が会社を辞めて独立。

そしてこの事件。

生駒、怒るなよ。

男は銀行マンとして偉くなり、女は独立して金がいる……。深読みしすぎやと思うやろ。

竹見沢を疑ったのと同じくらいに短絡的で希薄な思いつき……。

こんな山の中まで俺達を、というか赤石を追いかけてきたくらいやから、生駒と柏原も赤石に目をつけているわけや。

あれからどんな推理になった？

フン。まだ俺には話せないということか。

まあいい。

俺は小学生相手の塾講師。サラリーマンで動きがとれない。

それでもなんとか、赤石と朱里の接点を掴もうとした。

ふたりが会っているという噂。

紀伊にしろ弓削にしろ、ああいう性格やから、根も葉もないことは言わないはず……。いくら酒の席でも……。

蛇草が足元に立ててあったペットボトルを取った。

生駒もリュックからペットボトルを取り出し、ついでに小袋に入ったチョコレートもいくつか出して、ふたりに投げた。

「そう、俺には少々辛い話や」

生駒はこの男の打ち明け話が新鮮に聞こえた。

蛇草は地面に降り積もった落ち葉や枯れ枝や、小さな植物に目をやっていた。

「それで俺は、赤石に朱里とのことを直接聞いてみないと気が済まなくなった。今日のことは、まあ、そういうことや。ここで花を手向きたいという気持ちももちろんあった」

そう言って蛇草はチョコレートの小袋を破った。

「そっぴゃ昔、アーバプランにいた頃、俺達、現地主義なんてことよく言ってたよな。」

あのころ、みんな熱かった。いろんなことに。熱かった分だけ引きずるものも多いということかな。

生駒もチョコレートを口に入れた。

渴いた口の中に、やわらかい甘さが広がった。

「朱里が死んだ場所で、赤石に本当のことを聞いてみたい、そういうことやっぴゃんや」

蛇草は話し疲れたように息を吐き、靴を履き始めた。

「しかし、あんたの作戦は上手くいかなかったということやな」

「そういう言い方は止めてくれ。しかし、まあ、そういうこと。おまえも赤石を追いかけてるんやっぴゃたら、ご苦労さんや。あいつにはアリバイがあるらしい」

「鳥取のことか？」

生駒は、そう言ってしまったから、蛇草が犯行日を四日か五日と

考えているのかもしれない、と思った。

しかし蛇草は、気にとめる様子はない。

「そう、ドライブ。朝にはある女性に会ったし、あの日に境港に行った証拠はこまごまとあると言っていた。俺はそれを詳しく聞いてはいない。どうせ確かめようがないからな。それに当然、おまえらはもう知っていることやろうしな」

生駒は証拠という言葉に興味を持ったが、問いかける間もなく蛇草が話し続けている。

「俺達はあの崖を越えたところで話をした。赤石は朱里と会っていた……。しかしそれは、朱里からあれこれ相談を持ちかけられていたから。独立するからと。あいつはそう言った」

蛇草はいったん履いた靴を脱いで、足の甲を摩った。

「そして朱里の部屋に行ったことがあることも靴紐をまた結び直した。」

「そこまで打ち明けられてしまうとな……」

蛇草が顔を上げた。生駒が見返すと、目をつぶり、穏やかにいった。

「俺としては、信じるしかないよな。なんというか、そういうことにしておこうというか……」

風が吹いて、落ち葉が舞い落ちてきた。

「ところで弓削はどうした？ 一緒に推理しているんじゃないのか？」
蛇草は打ち明け話に照れたように、急にテンポを変えて聞いてきた。

生駒が黙っているのを見て、ひとり合点したように頷いた。

「いろんなこと、あったよな。アーバプランにいたころから。竹見沢や赤石は。そして俺も。中道朱里を巡って。弓削もあいつなりの

やり方でアピールしてたよな」

話の終わりを告げるように、朱里をフルネームで呼んだ。そして膝に手をあてがいながら立ち上がった。

「なあ、生駒。後のことは任せるよ。それに……」

「ん？」

「次回のコナラ会の幹事、おまえがしてくれないか。竹見沢に招集されるのはどうもな」

タオルを首にかけ直し、太腿のあたりをひとしきりさすってから、蛇草はリュックを背負った。

鶴添がまだ座ったまま、聞いてきた。

「今からどうします？」

腕時計を見た。

そして、ここで別れようといった。

鶴添は少し残念そうな顔をしたが、しつこく誘うことはせず、立ち上がった。

蛇草が別れの言葉を口にした。

「この件がはつきりしたら、飲みにいこう。オルカでもいいし」

鶴添が先に、後に蛇草が続いて、さっき生駒が登ってきた道を下って行った。

生駒はあたりを完全な静寂が覆っていたことに気がついた。

葉擦れの音さえ聞こえない山中に、時折涼しい風がふわっと吹きあがってくる。

三時二十分。

汗を吸ったＴシャツが冷たかった。

生駒は崖の手前まで戻った。

なにかの痕跡を探すかのように、崖や下の樹林に目をさまよわせた。

そして草に腰を下ろし、リュックを開いて遅い昼食を出した。メロンパンとアンパンを順番にかぶりつきながら考えた。蛇草の珍しい穏やかなものの言いの意味を噛み締めていた。

ここから登っていつて赤石を探すか、ここでしばらく待つか、それとも下るか。

頂上まではまだ一時間ほどかかるだろうが、赤石がこの道をピストンで降りてくるのなら途中で出会うはず。細い踏み分け道や関西電力の管理用通路もあって、確実に出会うとはいえないが、普通はこのルートを取るだろう。それに、別のところへ下るというのは行程的に厳しい。

そう考えて、しばらくは先に進むことにした。

崖を横断して登っていき、三十分後にあっさり回れ右をした。

結局、下に降りるまで赤石はおるか誰にも出会わなかった。

車のところで少し待ってみようかとも考えていたが、それも当てが外れた。

登り口には、すでに生駒の車しか停まっていなかった。

その日、生駒が行者還岳の尾根道で喘いでいるころ、柏原は新潟の中道隆之に電話を掛けていた。

自己紹介もそこそこに、単刀直入に本題に入った。

まず、お願いしたいことの一点目は、中道朱里さんの住所録を探していただきたいということです。

パソコンではなく紙の形のものです。

ある人物の住所を確かめたいのです。あるいは最近届いた転居の知らせの郵便物。

二点目は、朱里さんの部屋に、その部屋のものではない鍵がありませんでしたか。

住宅用の鍵です。もしありましたら、それを貸していただきたいのです。

隆之は、住所録も郵便は記憶にない、もしあったとしても捨ててしまったと言った。鍵については探してみると約束してくれた。

同じころ、三条は梅田の阪神百貨店の地下入口の回りに連なる全国名産品店の前を歩いていた。

店はいずれも、地下道に面して幅約五メートルばかり、奥行き約五十センチ程の店、というか販売コーナーとでもいうほどの狭さだ。各県別に名産の品々を売っていて、ちゃんと現地の店と同じ袋に入れてくれる。いわば出張おみやげ屋ともいえるところだ。

三条は鳥取県の店で立ち止まった。

「すみません。饅頭は置いてますか？」

ありますよ、どれにしはる？

三条は柏原から指示されたとおりに、欲しい商品の説明をした。

「えーと、鼠饅頭っていうやつ。千五百円の箱入りがあります？」

灰色の包装紙の」

あ、鼠饅頭ね。

「あの、それ境港キタロヤ菓子製造所で作られているものやんね？」

「ごめんねー、あれはないねん。日持ちしないからロスが多くて。」

この鬼太郎饅頭やったらあかん？

「そうなんですかー。鼠饅頭を頼まれて来たんですけど……。どこか他の店では売ってませんか？」

「ないよ。あそこの饅頭、地元以外で売ってるところはないと思うよ。」

「わかった。じゃ、その鬼太郎饅頭をください」

32 合鍵

「昨日はおまえのおかげで散々や！　へとへと！　アキちゃんに聞いたら、おまえは赤石の家に行ったというし、今日は赤石が出張や。いったいどういうことやったんや、えっ、柏原。今日はちゃんと説明するんやろな！」

オル力での生駒の第一声だ。時刻は昼の二時。

優も追いかけるように店に入ってきた。

「腹減った。出前を取ってくれ。餃子一人前とミニ酢豚とチャーハン。おまえが払え」

ついに事件をはつきりさせるときが来たと、生駒は興奮していた。気分は最悪だったが、無理にはしゃいだ口調になる。

柏原はにこりともせず、落ち着いた様子で、おまえが飯を食ってから始めようか、という。

「何をいう。餃子を食いながらも話ができる。さっさと始めんかい」

そうやな、と柏原は出前の電話を掛けてから生駒の頭越しに、後ろの壁を睨み始めた。

そこには白馬岳の写真が架かっているはずだ。生駒はじれた。

「なんや、黙り込んで。なんなら俺から話そうか」

優が、柏原に任そうというように小さく首を振った。

ようやく柏原は吹っ切れたという様子で、生駒に目を移すと話し始めた。

「これまでの整理の意味も含めて話していくぞ。繰り返しになるけど」

生駒は頷く。

まず、自殺説を否定する論拠の整理だ。

現場にはチーズ菓子が転がっていたが、彼女が今もチーズアレルギ―だったとすれば、誰か他の人のためにそれを持って行ったんじゃないかと考えた。

つまり誰かと一緒に登っていたか、その予定だったということだ。しかし名乗りをあげた者がいないことから、その人物、つまり朱里がチーズのおやつを用意してやった相手は、怪しむべき者であるということになる。

ただ、その人物が行方不明とか、死んでいるとかで名乗りをあげられない事態になっている、あるいは朱里の死を知らない、ということも可能性としてはある。

「おい。そんなところまで遡らなくてもいいぞ。わかっている」
優が、聞こうよ、と生駒をなだめた。

じゃ、はしょって話そう。

次は遺書の件。

朱里が殺されたという前提なら、この文書は彼女が書いたものではなく、犯人が自殺に見せかけるために用意した細工と見るのが妥当だ。

そして犯人は、なぜそこで生駒の名前を出したのか。
遺書を本物らしくするための更なる小細工か。

とはいえ、そんな小細工はわざとらしいし、朱里と生駒の日頃の関係が希薄なことからすると、成功したとは言い難い。

逆に、生駒の名前を出すことで、犯人像が絞られてしまうことがうれしくないだろう。

ということ、なぜ犯人は生駒の名前を出したのか。これがわからなかった。

柏原が溜息をついた。

生駒はいまさら何を言い出すのだという顔をしていた。優は手帳を開いてメモを読んでいた。

僕は暗中模索で、コナラ会の連中のアリバイを聞いた。三好や大迫らが犯人だとは思えないということになって、ますますコナラ会メンバーに注目することになったのは、消極的ではあっても、当然の成り行きだった。

遺書に生駒の名前が出ている以上は。

柏原が目の横を人差し指で掻いた。

つまらなさそうな生駒を見て、おまえが話すか、と聞いてくる。生駒は、どうぞ、と先を促した。

柏原がゆっくりと話す。

次は犯行日の件。

遺書の日付は四日の日曜の早朝一時半。

遺書を根拠にした警察は、朱里が自殺した日を四日あるいは五日という結論を出したが、僕らの見解は違った。

遺書は犯人が朱里を殺してから書いたものであるという仮説に立てば、犯行日は三日の土曜。

山から帰ってきて、犯人はその夜に彼女の部屋に入り込んだ。合鍵を使って。

次は例のブログについて。

張り付け直された男の謎。

食堂の夫婦の証言によれば、朱里はその店に男性を連れて行ったことがあるとのこと。

しかし、朱里が住道駅あの写真を撮りえないことがわかった。つまりブログは朱里のものではなかった。

出前が来た。

「重要なデータを整理すると、これくらいかな。雑多なことは他にもあるけど」

柏原が、湯気で内側に水滴の付いた餃子のラップを剥がす。

さて、三日のアリバイが成立したのは鶴添さんと紀伊。

竹見沢さんも福岡で女子学生とよろしくやっていたと思われる。

竹見沢説は蛇草さんの思い過ごしだったわけだ。

一方で赤石、佐藤草加カップル、弓削、蛇草さん、上野さんのアリバイはなし。

その中で赤石のことが気にかかった。

柏原の表情には何の変化も見られない。

状況的には、最初から竹見沢より怪しいんだ、こいつが。

チーズが好物。山登りが好きで行者還岳にも行ったことがある。

草加が言ったように、朱里の年齢を勘違いしたままだった可能性まである。遺書には節目の年齢なので書いてあったことが変だったよな。こんなことは何の証拠にもならないとしても。

それから、事件に関して僕らを避けているようでもあった。

朱里と親しかったはずのあいつがだ。おかしい。まあ、なんというか、僕としたら正直言つて、えらいことになってきたなと思ったよ。なにせ親友かつ義理の弟だからな。

しかし、決定的な証拠はない。

赤石だという証拠も、赤石ではなくて犯人はこいつだという証拠もな。

僕は考えに考えた。

生駒には僕の様子がおかしく映っていたことだろう。

生駒の心臓が高鳴った。

柏原はちよつとおどけたような表情を作って、生駒と優の顔を見比べるようにして、餃子が冷めてるぞ、といった。

僕は妹に、最近の赤石の様子をそれとなく電話で聞いたし、赤石をここに呼んで話もした。報告したよな。だいぶ前のことだ。

あの夫婦の仲については推理と関係ないので、詳しくは話さなかったけど、どうも妹の様子がおかしかったんだ。妹のやつ、旦那に不満があるんだな。さすがにはつきりとは言わなかったけど。

要するに、旦那が浮気しているんじゃないかと不安になっていたんだ。

オルカにはバーらしからぬ臭いが充満していた。

優が、さ、食べよ、と三人分の小皿にタレを注いだ。

で昨日、僕は赤石の潔白を証明するなにかをつかめないかという思いと、愚痴もたまには聞いてやろうという気持ちで、妹に会ってきた。

車椅子タクシーに乗ってな。するとどうだ。妹はすっかりけろっとしていたんだ。

ユウのお手柄らしいな。

優がかすかに微笑んだ。

そして、妹が驚くべき話を教えてくれた。

生駒も、もう知っているだろ。なんと、僕らが犯行日だと思っている日に、赤石が妹に伝えた行き先が行者還岳だった。

赤石は僕らには鳥取の境港に行っただけだと言っていたし、上野もそう言っていた。

しかし、行者還に行くと言って家を出たことは隠していたんだな。このことは何を意味するのか。

それは、もちろん赤石が、と生駒は言いそうになったが、柏原がすっと箸を上げて制した。

赤石が会社にとって帰った土産を、ユウに頼んで確かめてもらった。一応はね。

それは、境港にある店にしか売っていないものだった。でも、誰かに買いに行かせたのかもしれないし、あるいはもらったのかもしれない。郵送で注文したって可能性もある。銀行ではもう食ってしまつて製造日は確かめられない。

いずれにしろ、あんなものはなんの証拠にもならない。

淡々と話している。

確信に近づいている予感がして、生駒は息苦しさを覚えた。

「僕は混乱していた」

柏原がため息をつく。

「状況証拠は赤石を指している。三日の朝に上野と会ったといっても、それからでも行者還岳には行けるさ。それに、ふたりが共謀しているという可能性さえある……」

生駒の脳裏に、行者還岳の山道、朱里が突き落とされたと思われる崖の光景が浮かんだ。

時折吹いてくるひやりとした風さえ感じたように、思わずかいてもいない額の汗を手の甲で拭った。

ふと、営業時間前のオルカはやけに静かだと思った。

「僕は赤石にどんな動機があるのかとさえ考えた。例えば朱里の存在が出世の妨げになるとか、朱里がふたりの関係をばらすと脅迫しているとか」

ここで柏原が久しぶりに笑顔をみせた。

「ところがだ。ユウのまたまたのお手柄！」

優も微笑む。

「あの貼り付け直された画像が赤石だと教えてくれたんだ。僕も確かめた。そのとおりだった！僕はこれで赤石の嫌疑が晴れたと思った」

柏原が、生駒の腑に落ちない顔つきを見て微笑んだ。

「簡単なことだ。あの『幸田さん』のブログは、朱里があの駅の写真を撮れなかったから誰か別のやつのだ。いいな？」

「そう」

「一方、赤石。赤石自身がブログの開設者、あるいはブログの存在を知っていて、自分の姿がそこに掲載されていることも知っていた、というのは可能性としてはありうることだ。しかし、なぜあんなことをする必要がある？自分の画像を貼り付け直して、朱里のパソコンに入れることにどんな意味がある？自分が犯人である痕跡を残すために？不自然だろ」

「犯人の挑戦状説は？」

「誰も気がつかないだろ。僕らがこんなことを始めなければ、朱里は自殺とされたままだったんだ。自分の痕跡を残して満足する気なら、まず朱里は殺されたということを何らかの形で残さないと意味がない。明らかな殺人事件という形で朱里を殺さない」と

「まあ、そうやな」

「だいいち、犯人がなぜ自分の痕跡を残す必要がある？警察や社会に挑戦しているわけでもないのに。捜査の攪乱？わざと自分を目立たせて？筋が通らないだろ」

生駒は唸った。

「つまり、ブログの開設者が誰であれ、犯人が自分の画像を貼り付け直したとは考えられない。それに、あの画像の貼り付け直しには、

それなりの時間がかかったはず。丁寧なでき映えだったからな。犯人が朱里の部屋に忍び込んで、前もって用意してきた遺書をパソコンに入れたときに、たまたま画像を見つけてその場で加工したとは考えにくい。遺書と同じように、あらかじめ作っておいたものを持つて来て入れたと考える方が妥当だ。ということは、そんなことができるのは、ブログの存在を知っていて、かつあの画像の男が赤石だということ知っているやつ」

柏原がぐつと生駒を見つめてきた。

「犯人は何らかの意図があって、画像を貼り付け直したデータを朱里のパソコンに入れたんだ。原稿フォルダ一式として。そして朱里のパソコンに元々あったウェブファイルの方も、あの画像だけ差し替えた。これはブログの開設者自身なら簡単にできることだ。その意図はたぶん赤石を陥れるということだろう」

そうね、と久しぶりに優の声が聞こえた。

「必ずしも開設者である必要はないという考え方はないか、ということも考えた。あの原稿フォルダ一式は、ブログを見ていたやつなら誰でも作れるものだから。なにしろコピーした瞬間に本当の制作日は分らなくなってしまふ」

「でも、その可能性はないよね」

「そう。犯人はあの写真の男が赤石だということを知っていて、あんな細工をしたはずなんだ。ところがあの写真を撮影した者でないと、あれが赤石だということを知り得ないよな。僕らもなかなか気づかなかったように、普通は気がつかない。つまり、あの写真を撮影した人物でなければ。撮られた本人以外にはね。そして普通に考えると、撮影者イコールブログ開設者ということになる。イコール画像加工者であり、そして殺人者ということになる」

柏原が冷め切った餃子を口に放り込んで顔をしかめた。

「そして朱里さんのパソコンに保存したのもその犯人」

優が言葉を繋げた。

「そのとおり。次に、なぜ犯人は朱里の部屋に入り込んだのかという疑問がある。遺書を残すという目的のためにか？ 人に見られる危険が伴うのに？ そんな危険を冒してまですることか？ 他の方でも遺書は残せるのに。犯人は別の目的のために朱里の部屋に入る必要があったんだと思う。それは、パソコンに残されているかもしれない自分に関するデータを消去するためにだ。例えば、行者還に行く約束をしたメールのやり取りを消去するために。加工した赤石の画像を入れたり、遺書を入れたりするのはその場の思いつきではなかったにしろ、付録みたいなものだったんだ。ところで生駒はあのブログをどう思う？」

生駒は迷っていた。それをそのまま口にした。

「わからない。誰のものかも、中身が嘘か本当かも。犯人のものなら犯行の小道具として、中身はうそっぱちかもしれないと思うし……」

「僕は、あれは犯人のものだし、基本的には本当のことを書いてあるんだと思う。だからこそ、朱里のパソコンに入れるときに書道の話わざわざ抜いたんだと思う」

電話が鳴った。

「はい。オル力です……」

生駒は窓の外を見た。

昼の光が路地のブロック塀を照らしている。

うら寂しい。

優がオーディオのスイッチを入れた。

たまたま流れ出した曲は、全く場にそぐわないクイーンだった。

「朱里の部屋から別の鍵が見つかったらしい。郵送してくれたって」

次の日の夕方、生駒と優は年賀状の住所を頼りに、とあるアパートに向かった。

ドアの鍵穴に隆之から借りたキーが合うかどうかを確かめるためだった。

アパートの近くで待機していた生駒に、戻って来た優が文句をいった。

「ハア！ 緊張した。不在でよかった。あんなところでドアをガチャガチャやって、誰かに見られたら通報もの」

「で？」

「全然合わなかった」

アパートはドブ川の脇にドロンと建っていた。

古びた樋が垂れ下がっている。空室ありの看板がかかっていた。

夜になってから、生駒は弓削の事務所を訪ねた。雑居ビルの四階にこうこうと照明がついた部屋があり、弓削をはじめ数人の所員が机に向かっていた。

弓削は喜んだ。

しかし生駒は夕食の誘いを断り、ひとり地図を頼りに弓削の住まいがある野崎の町に向かった。

静かな住宅街の中はかなり大きな賃貸マンション。

弓削の部屋の前まで行った。中には電気がついていて、夕食の準備をしているけはいがあった。

生駒は住道に戻り、弓削の事務所が見える喫茶店で時間を潰す。事務所の照明が消えるのを待ってビルの四階まで上り、キーがドアに合わないことを確かめた。

深夜、生駒は三度目を読みかけていた庭園ミステリーの続きを読

んだ。

これから自分達がしようとしていることに対する不安を少しでも緩和したかった。

そして気持ちを鼓舞したかった。

明日、弓削ではなく上野をオルカに呼んでいた。

赤石の画像や『幸田さん』のブログを再び見せて意見を聞き、これからの作戦を打ち合わせる予定だった。

33 魔法瓶

翌々日。

「もしもし、柏原です。調子はどう？ 昨日の晩はせっかく電話くれたのに悪かったな。ちよつと客が立て込んで。用件は例の話がどうなったか、だろ。すまん、すまん。報告が遅くなって。あのブログな。あれは違うぞ。朱里のじゃなかった。今、生駒もいるぞ。代わろうか？ ……じゃ、僕から言おう。頼みがある……」

柏原が電話をしている横で、生駒はひそひそと優と話していた。

「今晚、あいつの都合がつけばいいのにな。明日か明後日かもしれないってんじゃ、身動きが取れない」

「そうやね。でも、きつと今日中に」

「ああ。大阪府警に柏原と仲のいいやつがいて助かったな。いざというときになったら……。それにしても、こんな頼りない作戦で大丈夫かいな」

「ま、いいんじゃない？ 他に方法はないし、場のセッティングとしては最高やと思うし。きつとうまくいくよ」

「最高のセッティングか……」

仲間を「はめる」ことになるこの作戦。生駒もうまくいくだろうとは思っていた。

しかし、どうしようもなく落ち込んでしまふのだった。

中道隆之から借りているアルバムに挟んであった写真を取り出して眺め始めた。

柏原はまだ話している。

「……この週末から海外に行くってさ。その直前に会おうという気はあるようだ。向こうも話したいことがあるらしい。まあ、どうなるかわからないけどね」

ようやく夕方になりかけている。

オルカのドアは開けてある。秋のさわやかな空気が流れ込んでいた。

「ノブ、ほらこれ。食べるもの、買ってきてるよ。それからこれ、念のために」

優が出来合いのものを袋から出し、最後に懐中電灯を三つ、カウンターに乗せた。

「おいユウ、まさかこれ、おまえの分じゃないやろな」

「もちろん私のん。変な男気を出さないこと」

柏原が電話をしながら優に含み笑いを向けた。

「一気に展開しそうな気がする。……ああ、連絡する。そっちからもくれ。長電話ですまなかった。そんじや」

柏原が携帯電話を胸ポケットに落とし込んだ。

グラスの水を一息に飲み干し、大きく息を吐き出してから、準備万端、と首筋を揉んだ。

後は、待つだけ。

「あのさ、昨日、変なことを思いついたんだ」

優が緊張感をほぐすような話題を用意してくれていた。

「あの伏流水のミステリーに気になるフリーズがあつてね。ほら、牧師がどうかなって呟くシーンがあつたやん。変なタイミングであれって、弓削さんの口癖の真似とちがうかな。牧師の名前はスチムやし。弓削と湯気をもじってたりして」

「なるほどなあ」

一応は反応したが、今から起きるかもしれない出来事を考えると、さすがに生駒はこの話題提供に気持ちに乗らなかつた。

「優の考えでは、あの作品は今回の事件に関係ないんやろ」

「そう。でも、あの人の心情を考えると、なんだかさ」

「ん？」

「自分を苛めすぎやと思うけどなあ」

柏原の電話が鳴った。

上野からからだった。

電話に出た柏原の声に緊張感がある。

「そうか、早速な。で、どんな感じ？ …… わかった。思ったとおりですね。昨日の打ち合わせどおりにしましょう。それで、どういうことになりました？ うんうん……、やはり今晚か。それで……、ええっ！ 生駒山！ うーん、ドライブウェイか。ちよつと厄介かな。…… いや、むしろ好都合か。…… そう、大丈夫ですか。よし、オーケーしてください。ただ、現地には八時以降に着くように段取りを。くれぐれもそれまでは始めないように。いいですか、気をつけてくださいよ。大阪のおばちゃん怖いものなしかいいう気にならないように。フフ、いいですね。詳細が決まったら、折り返しすぐに電話をください」

十分後に上野から再び連絡が来た。

柏原はその電話を切るなり大阪府警の知人に事情を伝え、すぐに態勢を取ることを依頼した。

生駒達も出発する。生駒のシビツクの後部座席に柏原を押し込み、優が助手席に座った。

柏原の携帯に上野から三度目の連絡が入ったのは、大阪側から生駒山へ向かう一般的なルートである阪奈道路にさしかかったときだった。

今、住道駅から電話をしている、相手はもう来ている、まず食事をとることにする、という連絡だった。

生駒は無意識にスピードを上げた。

阪奈道路の長い登りを終え、久しぶりの信号を右に折れ、生駒山ドライブウェイに入る。

少し先の料金所で、先に来ていた警察官と合流する。大阪府警と書いたパトカーが一台、覆面パトカーである普通乗用車が二台並んでいたが、赤色灯は回っていない。

男達が生駒の車に近寄ってきた。

「柏原先生、お久しぶりです」

知人の柳警部だという。

柳は動けない柏原と話をするために、後部座席に乗り込んだ。

生駒と優は遠慮して車から出て、入れ代わりにふたりの私服警官がシビックに乗り込んだ。

西畑刑事が話しかけてきた。

「生駒さん、ご苦労様です。あなたが考えていたとおり、やはり中道さんは自殺ではなかったようですね。皆さんに脱帽です」

生駒は、よろしく願います、と頭を下げた。

これからの動き方は、柏原と警察の指示を待たねばならない。

生駒と優は車の脇に立って、作戦会議の内容を聞いた。

「柏原先生の携帯電話に連絡が入る手はずになっているんですな」

「そうです。次に上野さんから連絡が入るのは、どこかのレストランからでしょう。食事が終わるころ、そろそろ出発するといふときに掛けてくるように言っております。さっきはまだ住道駅からでしたから、たぶん今から早くて三十分、遅ければ一時間くらいでしょうかでしょう」

「なるほど。車はシルバーのアコードで、ナンバーはこれで間違いないですか」

柳が小さな紙切れを柏原に渡す。

「ええ、そうです」

「了解。では、ちょっとこの地図を見てください」

柳が生駒にもコピーしてきた地図を手渡した。

駐車候補地にAからTまでのナンバーがふつてある。それぞれの連絡ミスがないようにという配慮だ。

夜の生駒山ドライブウェイに来る客は夜景を見ることが目的で、カップルが圧倒的に多い。

しかしドライブウェイ沿いには木が茂っていて、ほとんどの沿道では夜景はきれいに見えない。夜景鑑賞のポイントは何箇所かの駐車場と、いくつかのコーナー部の路肩だけだ。

渡された地図によれば、生駒山上遊園地の駐車場までの道路沿いに一カ所だけ印があつて、Aと記されている。遊園地の駐車場は眺望がないので無印。それ以降には順にBからTまでの印が記されている。それぞれのポイントが駐車場なのか路肩の待機スペースなのかの注も記入されている。最も広くて視界もよく、人気のスポットはD駐車場で、ジャングルジムのような展望塔である。その先のHやI以降になると遠いので、カップルはほとんど行かない。生駒も行ったことがない。

柳が地図の上に指を突きつけた。

「今、我々がいるのはこの地点です。上野さんとは、どのあたりでと打ち合わせされていますか？」

「会って話したわけではないので、ちゃんと通じているかどうかわかりませんが、できればこのFの駐車場に入るように伝えてあります。ここなら、不自然なほど遠くはないし、静かですから。それでいいでしょうか。電話がかかってきたときに、他に聞いておくこと、言っておくことはありますか？」

「F駐車場ですか。いいでしょう。くれぐれも遊園地の駐車場や、人の多いD駐車場、それからあんまり辺鄙な道路脇などはやめてく

れるように言っておいてください。それから、一応ふたりの服装とか、帰りの予定などを話しているなら、それも聞いておいてくれますか」

「わかりました。駐車場に入ったら、彼女の方からこちらにダイヤルしてずっと携帯を繋いだままにしておくことになっています。カーステレオはつけないように言っておりますし、生駒と私が今ここにいることも伝えてあります」

柏原と柳は、抜かりなく段取りについての意見交換をしている。

柳は目指す車にはすでに尾行が付いていることを伝え、逐次連絡が入ることになっているという。

行き先を変えた場合のために覆面パトカー一台と生駒が料金所に残ることになる。

そして、上野の乗った車が通過したら、柏原に連絡した上で追跡を始める。覆面パトカーがまず追尾し、その後ろから生駒の車が追いかけるのだ。覆面パトカーの助手席には、カップルに見せかけた私服の婦人警官がすでに乗り込んでいた。

やがて柳が部隊に指示を出した。

生駒は、作戦司令室である覆面パトカーに柏原が移乗するのを助けた。

すぐに指令車は他の警察車両とともに山頂に向かって出発していった。

これらの車は、いくつかの展望場所などで待機する手はずになっている。柏原の乗った司令車は、F駐車場を通りすぎたH地点で待機する予定だ。F駐車場には、婦人警官が乗り込んだ覆面パトカーが待機する。F駐車場であれどこであれ、上野の乗った車が乗り入れた駐車場に、あわてて集結するようなことはしない。もったいい夜景を見ようと、あるいはカップルならもったいい雰囲気のところを探して、あちこちに移動することはままあることだからだ。

そして、いよいよ完全に駐車したということに確信が持てた段階で、指令車や生駒の車が目立たないようにその場所まで移動することになる。

上野には、完全に我々が集結するまで作戦を開始しないようにと伝えてあった。

繋ぎっぱなしの携帯で聞こえてくる会話を頼りに、ここぞというときに登場するという、いたってシンプルかつ行き当たりばったりの作戦だった。

現在時刻は七時五十分。

「私達の出番はなさそうやね」
優がつぶやいた。

生駒たちは料金所の駐車場に目立たないように車を止め直して、監視を始めた。生駒がヘッドランプを点けるのを合図に、覆面パトカーが追跡を始めることになっている。

運転席に座った生駒は、黙ってドライブウェイを睨んでいた。

携帯に柏原から連絡が入った。

もうすぐ来るはず、以降の連絡はしない、必要があれば優の携帯にするとのことだった。

生駒が車のヘッドライトを点けた。

「ノブ！ 今のがそう？」

生駒は隣の車に、行け行けと手を大きく振り回して合図を送る。そしてエンジンをかけた。

隣の車がゆっくりと発進していく。生駒もそれに続いて車を出した。

「どういふことかわからんが、予定を早めたみたいやな」

アコードは比較的ゆっくりとしたスピードで、生駒山ドライブウェイを山頂に向かって登っていく。

少し離れて、覆面パトカーと生駒の車が追尾していく。

アコードは遊園地の大駐車場前まで来てさらに速度を緩めたものの、そのまま通りすぎた。

後ろに続く二台の車は離隔距離を維持している。

ドライブウェイはアップダウンとカーブを繰り返す。生駒の前方にきつい下りのヘアピンカーブが現れ、すでにカーブを曲がり終えたアコードが眼下を下って行くのが見えた。

その先にF駐車場がある。

「さて、いよいよやな」

生駒は冷静さを保って独り言のようにいった。

カーブを曲がり終え、ゆっくりと下り坂を進んでいく。

駐車場が見えてきて、視界に大阪の光の海が広がってくる。

しかし先行する覆面パトカーは駐車場をやり過ごしていった。

「げっ！　どういうことなんや。止まらなかったんか」

生駒はスピードを落として、駐車場を確かめた。

空いている。アコードはない。

そのまま生駒も駐車場をやり過ごしていった。

「ちょっとこれはまずいことになったな。どこで転回するんや。同じところでわざとらしく転回できないぞ。えーい、どうするよ」

前に行くアコードが視野に入った。

アコードは一定のスピードでゆったりと走っていく。

H地点も通り過ぎる。駐車していた指令車の中に柏原の顔が見えたが、目を交わすまでもなく通り過ぎた。

「ちきしょう、それにしてもゆっくり走りよるなあ。ついて行きに

「くい」

「ノブ、ここで待ったら？　これ以上行くと転回するのに困るよ。きっと戻って来るはず」

生駒はわずかに広い路肩で車を止め、何度か切り返して車の向きを変えた。

F地点から1・5キロ、H地点からでもすでに1キロほども来ている。

「いったいどこまで行くつもりなんかな。普通、夜景を見るだけなら、こんなに遠いところまで来ないのに」

「どこかで転回して帰って来てくれよ。信貴山まで行くと違うやろな。そうや、検問はどうするんやろ」

「検問はもつと先。ノブ、落ち着いて待つてよ」

「まさか、感づかれたんとちがうやろな」

木々の間に大阪平野の明かりがちらついていた。

生駒は車のランプを消した。

月明かりなのか、街の明かりなのか、外は案外明るく感じられた。

「ねえ、ノブ」

「ん？」

「私達がここに来たとき、雨が降ってたよね」

優と付き合い始めたころ、大阪の夜景を見にドライブした夜のことを思い出した。

途中で雨が降り出し、夜景どころではなかった。

あのときもFの駐車場に車を停めた。

「あの日、あそこには誰もいなかったね。私、不安やった」

「そうか？」

「雨が、じゃないよ。こんなおっちゃんとか付き合っているのかなって」

「なんじゃい、それ」

「でもさ、あのときの熱いコーヒー、おいしかったね。……そういや、あの魔法瓶、どうしたのかな。最近見かけないよ。捨てたん？」

「おいおい、ユウ、思い出話をしてる場合じゃないやろ」

そう言いながらも、生駒はあの夜、生駒・三条・優・延治、「いこまさんじょうゆうえんち」という言葉遊びを発見して、大笑いしたことを思い出した。

それからふたりは黙りこくって待った。

ここから先を通行する車はほとんどない。

優が、七分経った、とつぶやいた。

ようやく信貴山方面から車が来た。

生駒たちは、こちらを見られないようにシートを少し倒している。顔を腕で隠しながら、横を通っていく車の中を見つめる。

違う車種。

優が、十分、とつぶやいた。

ようやく優の携帯が鳴った。

「…えっ、はい。…はい、…わかった」

「ノブ、たいへん。アコードはそのまま信貴山方面まで進んでいるそうよ。追跡してくれて。でも柏原さん、迷ってる」

停める駐車場がわからなかったのか、それとも、もう少し先まで行ってみようというだけのことなのか。

それとも予期せぬ手違いがあったのか。

あるいは別の考えがあつてのことなのか。

アコードが信貴山の検問まで行きつくのに、まだ数分はかかるだろう。

そこで停めるのか、そのまま行かせるのか。

目の前を通り過ぎて行つたとき、助手席の上野は平然としている

ように見えた。

この芝居は今夜がもし失敗でも、またやり直せる。
しかし、もしばれていたらどういうことが起きるのか。

すぐにまた、柏原から連絡が入った。

「検問で止めるそうよ。ただ、一応免許証をみるだけで、ふたりには関係のない検問だということにして通すって。ふたりの様子を確認するのと、万一のことを起こさせないための抑制という意味だつて」

「尾行は？」

「そのつもりだつて」

「OK。じゃ、俺たちも行くか」

「待つて。え、うん……、はい」

優が携帯に耳を押し当てている。

「そう、Uターンした。どこで？ ……了解」

優がニツと生駒に笑いかけた。

「信貴山料金所のちよつと手前で、転回したつて。こちらに向かつてる。一応、予定通りということね。Fの手前の適当なところで待機しよ。後は最初の手筈どおりでいこうつて」

「よし」

生駒は車を発進させた。

34 20年ぶりのデート

柏原は携帯の電波が良好なことを確かめた。電池もまだまだ満タ
ンだ。

戻ってきた生駒の車が指令車の横を通過した。優がちよこつと手
を挙げた。

そして十分後には、アコードが柏原の前を通りすぎていった。
その後ろにはカップルを装った覆面パトカーが続いている。

無線が入った。

「Gを通過しました」

「了解」

迷うことはない、打ち合わせどおりFに入れ、と柏原は祈るよう
な気持ちになった。

「Fに入りました。我々も駐車します」

「了解」

「柏原先生、行きましょう」

「はい。しかし上野のやつ、そろそろ携帯を繋いでくれよ」

F駐車場に入った覆面パトカーの陰に隠れるように、柏原を乗せ
た指令車が停まる。

事前の打ち合わせどおり、生駒は駐車場には入らずに道路脇に停
めていた。

全員が揃った。

アコードのドアが開き、上野と弓削が車から降りてきた。

柏原の携帯が鳴った。

柏原は無言のまま耳にあてる。すでに声を拾うセンサー部にガ
ムテープを貼って遮音してある。

携帯電話のイヤホンジャックにプラグを差し込み、用意してきた

録音装置に繋ぐ。

そして、その装置からかすかに聞こえてくる会話に息をこらして聞き入った。

「ね！　ここが一番見晴らしがいいでしょ。そう言ってるのに、どんどん先へ行くんだから。焦ったわ！」

「ハハ、ごめんごめん。上野さんに誘ってもらって、ちょっと舞い上がってしまったんです。なにをどう話したらいいのか、わからなくなつて。ついつい、ゆっくり車を走らせながら、考え込んでしまつてたんですよ」

弓削がおどけている。

「へーん、いったい何を考えていたのかしらね。それにしても残念ね。私、あそこの焼肉屋さんに一度行つてみたかったのよ。阪奈道路を通るとき、いつも目につくでしょ。夜景もきれいに見えそうだしさ。今日に限って休みだなんて、ついてないよね」

「あー、ほんとに、残念ですねえ。せつかく上野さんご指定の店だったのに。まあ、僕の方は久しぶりに会つて、こんなところで一緒に夜景を見るんだから最高の気分ですよ」

「またまたあ、弓削くん、調子よすぎない？」

「いえいえ、本心です」

「そうなん？」

「それにしても、何年振りかな。ふたりでデートなんて」

「うん」

「僕がアーバプランに入社したとき、食事に誘ってくれましたよね。たぶん、あれ以来ですよ。ということは、生涯二度目。だいたい、20年ぶりかな。ね、あのこと覚えてます？」

「もちろん」

「僕が中途入社だったもんだから、上野さん、僕がてっきり自分より年上だと思つてたんですよ。二つ下だとわかつて、なんだあ、

と言ったでしょ。あれ、どういう意味だったんです？　がっかりしたってこと？」

「がっかりなんてしてなかったわ」

「でも、あれから誘ってくれませんでしたよ」

「うーん、そうねえ。私は待ってたのよ。あなたが誘ってくれるかなって」

「ぐっ、そう言われると、辛いなあ。でも、それ、本当？」

弓削と上野は、思い出話を楽しんでいる。

「しかし、中年ふたり連れというのも照れくさいものですね。どうかな。腹も減ったし、長居しないで下りましょう」

「どうかなって、相変わらずの口癖ね。ね、さびしんぼう」

「あ、なんだか懐かしいな、そのあだ名」

ふたりは黙った。

夜景を見ている。

大阪の街の明かりが、上空に浮かぶ無数の塵さえも輝かせている。ほの明るい夜空の中で、シルエットになっているふたりの後ろ姿。柏原は厳しい顔で見つめた。

「きれいよねえ、夜景」

「ええ」

「でも、ここって、昔からこんなにきれいだったかなあ。生駒山で大阪の夜景を見るなんて、何十年ぶりだろ。ねえ、ね、あのあたりが住道？」

「えっと、そう……。あのオレンジ色の光の線が阪神高速東大阪線だから、あのあたりです。あつ、JRの住道駅がわかるよ。ほら、プラットホームの照明が明るい」

「どこどこ？」

「ほら、あそこに」

「弓削くん、目がいいのね……。うーん、わからないわ」

「じゃあ、通天閣が見えてるけど、わかります？」

「それならたぶんわかる。……あそこよ」

「そう。ここから夜景を見るときつて、必ず通天閣を探してしまえますよね。ものすごく遠くにあるのに、探すとなぜかすぐわかる」

「そうね。やっぱり大阪人なんだ」

乗用車が一台入ってきて、ふたりの背中にヘッドライトの光を浴びせかけた。

しかし、弓削と上野の後ろ姿は身じろぎもしない。

「ところでさ、朱里のこと。……悲しいね。あなたもお葬式に行っただんでしょ？」

「はい。とても残念で……。独立するって、あんなに張り切っていたのに」

「彼女なら、うまくやっていったでしょうにね」

「自殺するなんて、信じられないですよ。上野さんは知らないかもしれませんが、実は朱里さんの自殺のことで、コナラ会のメンバー数人で探偵のようなことやったんです。なにか聞いてます？」

「なにかって？」

「みんなで考えてみようとしたことについて」

「うん、それは生駒くんから聞いたわ。でも私、さっきも言ったように、ヨーロッパに行ってたでしょ。だから詳しいことはなにも。」

生駒くんから聞いたことは、彼女が大峰山で崖から落ちて死んだこと、警察は自殺という結論を出したけれども、みんなはそれを信じられなくて調査みたいなことをしているってこと、それくらい」

「それだけですか？」

「それから朱里のパソコンに遺書が入っていたということも聞いたわ。ねえ、少し寒くなってきた。車に戻りましょうよ」

ふたりが戻った車内では、沈黙が続いた。

柏原は携帯電話のディスプレイを見て、通話中であることを確かめる。

リアウィンドウ越しには、シートに隠れて上野の姿は見えない。弓削の後ろ姿は動かない。

柏原は携帯を握っている手が汗ばんでいることに気がついて、膝の上に置いた。

ようやく上野の声が聞こえてきた。

「朱里のパソコンに入っていたっていうブログ、見た？」

「私は誰でしょう、というやつですね」

「うん。あの中に駅のコンコースで撮った写真があったでしょ。男の人の後ろ姿が映ってたの、覚えてる？」

「ええ」

「あれ、誰だかわかる？」

「さあ。たぶん、関係ない人なんじゃないですか。確かキャプションにもそう書いてありましたよ」

「実はあれ、赤石さん」

「えっ」

「生駒くんたちが気づいたのよ。コナラ会の人に赤石さんが着ていた服装と同じだから。私も確かめてみた。同じシャツだったわ。珍しい柄だから間違いないと思うわ」

「そうなんですか……。気がつかなかった」

「ふーん、そう？　ねえ、弓削くん、あなた、住道に住んでいるんですよ。もっと気がついていないこと、あるんじゃないの？」

「えっ、なにをですか？」

「あなた、朱里のことを……。実は好きなんじゃなかった？」

「僕がですか？　急に变なこと言わないでくださいよ」

「今もそうなのかどうかは、知らないわ。でも、あなた、蛇草さんと張り合っていたじゃない。昔はさ」

「困ったなあ」

「フフ、困らなくてもいいわよ。いまさら隠すことじゃないでしょ。というか、私は気がついていたわ。あなたがずっと朱里のことを好きだって」

「うわ！ まいったなあ」

「会社にいたとき、沖縄に行ったこと、覚えてるでしょ。海岸で生駒くんと私とあなたで、退職することを打ち明けあったわよね。今思うと、青春のひとこまって感じね。あのとき、あなたは蛇草さんとは一緒にやってられないと言ったわ。実際にどう言ったのかは覚えていないけど、そんな意味のことを」

「いや、それは……」

「それに、あなたはこうも言った。あの銀行マンも鼻持ちならないやつだって。その一連の話には、朱里が絡んでいた。誰でも知っていることだわ。あえてもう言わないけどね」

「弱ったなあ。確かにあのときはそんな気持ちもありましたけど……。もう昔のことですよ。それに僕が好きだったのは、朱里さんだけではなかったんですけどね」

「気の多い人。そう、あなたは誰とでも仲がよかった。私もあなたが好きだったわ。今もね。フフ、長い付き合いだし、仲間だからね。本当よ。でもね、今度の朱里のことでは、関係ありそうなことはみんな話しておかないと。あのブログに、なぜ住道駅にいる赤石さんの写真が載っていたのかしら。あなたなら、知っているわよね」

「はあ？ どういうこと？」

「フー。なぜなの？ なぜ隠すの？」

「僕はなにも隠してませんよ」

ふたりの会話に小さな間が生じたが、すぐにきつぱりとした上野の声が聞こえてきた。

「じゃあ、私から言わせてもらおうか。朱里は赤石さんと付き合っていた。そう、今も。あの写真が証拠。そしてあなたは、ふたりが付き合っていることを知っていた。でもあなたは、自分がそれを知っていることを他人に知られたくはなかった」

「はあ？」

「もしかすると、その写真が撮られた日、あなたはふたりを目撃したのかもしれない」

「……」

「あなたは嫉妬したのかもしれない」

畳み掛ける上野の声だけが携帯電話から流れ出していた。

「もう少し詳しくいうと、もし赤石さんがあなたと会った後の写真なら、もちろんあなたはあれが赤石さんだとわかっていたし、あなたは知らなかったとは言えないはずよね。赤石さん自身に弓削くんと会ったよ、なんて言われてしまうと困るから。ということは、あの写真は、朱里と赤石さんが駅で別れた後に撮ったものなんでしょう。こそつとね。あくまで私の推測。違つかしら？」

「違うものにも、僕はなにも知りませんよ。まあ、今の推測の後半の一部は、当たっているのかもしれませんがね」

「そう、私の推測。続きもあるわ。そのときたまたま、あなたは近くにいた。そして朱里は、あなたに見られていたことに気がついたのかもしれない」

「はあ？　ちよつとややこしいですね」

「それで、朱里はどんな反応をしたのかしら」

「いったい、なにが言いたいんです？」

「勘違いしないでね。私はあなたを陥れようなんて、これっぽっちも思っていないわ。逆よ。誰が怪しいのかってことを、もっとはっきり言っただけなのよ。弓削くんの口から」

「まいったなあ」

上野のシルエットが、弓削に正対するのが見えた。

35 虫の音

フロントガラス越しに見えるアコードの上には、大阪平野の無数の光の粒に照らし出された雲が、薄白く垂れ込めていた。

さつき駐車場に乗り入れたばかりの車から、カップルが出てきて、シルエットとなった。

男が女の肩を抱き、自然な動きで短いキスをした。

ここに停まっている十台ほどの車の中には、それぞれの思いが、それぞれの愛が溜まっている。甘美なもの、切ないもの。そして、猛り狂うものも。

やがて色あせていく色紙のようなものであっても、今は夜の星の下で精一杯の匂いを発している。

「弓削くん、朱里のパソコンに保存されていたブログの画像、あなた、あれが加工されていることも聞いた？」

「ええ、聞きました」

「生駒くんは貼り付け直されていると言ったけど、私、それがどういふことなのかよくわからないわ。でも、それって、あの住道駅の写真の男性、つまり赤石さんの画像のことよね。弓削くん、そのことにどういう意味があるのか考えたこと、ある？」

「どういふことって、わかりませんよ」

「じゃあ、言うわよ」

上野の声は穏やかなものだったが、やはり緊張しているのだ。テンポが速い。

「だって、あなたはあの場にいた。つまり、あの画像の男性が赤石さんだと知っているのは、朱里と赤石さん自身、そしてふたりの行動を見ていた弓削くんなんだから、画像を……」

「ちょ、ちょっと待ってくださいよ。僕はそんなところにはいなかったし、なにも知らない。朱里さんと赤石さんが会っていたことも、その画像がどうのこうのというものも」

「まあ、しつこいわねえ。ま、いいわ。あなたが見ていたということとは誰も証明できないでしょうから」

また一台、駐車場に車が入ってきた。ヘッドライトが大阪の空に空しく光を投げかけ、アコードの車体を舐めていき、すぐ横に停まった。

駐車場には再び暗い夜の帳が降りた。

弓削は気になったのだろう。何度もその車の様子を見ていた。

「でもさ、生駒くんは、なぜあの画像が貼り付け直されているのかわからないって言ってたわ。誰かがあの画像に細工したのよ。なにが変よね。弓削くん、どう思う？」

「……」

「どうってことはないかな？」

「まいったなあ。なにを言えがいいんです？ そんなことをした人がいたとしても、それは僕じゃない。そう言うしかないですよ」

上野の話が核心に近づいていた。

「でも、このことを警察に聞かれても、あくまで知らないと言い張るのかな」

携帯電話を通して、弓削が大きなため息をつくのが聞こえた。

「しつこいのは上野さんですよ」

「そお？」

「そんなに言うなら、警察でもなんでも連れて来てください。しみに怒りますよ。だいたい今日はなんです。尋問の日ですか？ ゆっくり夜景を見て飯でも食おうということじゃなかったんですか」

？」

「そう、そのつもりよ。でもその前に、私は聞いておきたいの。なぜあんなことをしたのかを」

上野の声は、先ほどまでの調子と打って変わって、明らかにいらついていた。

それに対して、弓削は上野をもてあそんでいるように、冷たいと感じるほどに静かな声をしている。

「弓削くん、もういい加減にしなさいよ。生駒くんによれば、朱里は自殺なんかじゃなくて殺されたのよ。いい？ 殺されたのよ！ 崖から突き落とされて！ 犯人は、彼女の部屋に入ってパソコンに遺書を書き込んだのよ！ そして、そのすべてを知っている人がいる！ あなたよ！ それがあなたなのよ！」

弓削は黙って首を振っている。

そしてまた、隣の車を見た。

「でも、あなたに罪はないんでしょ！」

「えっ、僕に罪はない？」

短い沈黙。

「なんだ、僕が疑われているんじゃないんですか。ああっ、そういうことか！」

「そう」

「いや、もう言わなくてもわかりますよ。なるほど。僕が犯人だというのではなくて、あの画像を作り直して、赤石さんが注目されるようにしたという嫌疑だけがかかっているわけだ」

ふう！ という上野の短いため息が聞こえた。

「そう。そういう嫌疑ね。白状する気になった？」

上野のシルエットが前を向いた。

今度は少し長い沈黙が降りている。

上野が弓削の答えを待っている。

森の梢が揺れ始める。アコードの隣の車がゆっくりバックして、駐車場から出ていった。

「あなたでしょ、そんなことができるのは。朱里のパソコンを弟さんが貸してくれたとき、持って帰ったんだから」

上野の小さな声が聞こえてきた。声が震えていた。

弓削がゆっくり間をとって応えた。

「でも、だからって、僕がそんなことをしたっていう証拠はないですよ」

「証拠か……。ないわね。だから話して欲しいって言うてるのよ」「なるほど……」

「それに、あなたなら、いつも仕事でそんなことしてるんですよ。画像の加工なんて簡単だし、日付を操作することもたぶんできるんでしょう」

上野の声はますます小さくなっていた。

「もう一度言います。修正された画像に写っていたのが赤石さんだったのかどうか知りません。もしそうだとしても、僕には関係ないことです。それに聞きますけど、なぜそんな面倒なことを僕がする必要があるんですか？　なんのために？」

上野が黙っている。

「さっき、僕が朱里さんを好きだったって言ってましたけど、そのとおりです。でも、言つときますけど、当たり前のことです。みんな仲間だと思っっていますから。……そう、今でも。上野さんも生駒さんもね。……たった今、上野さんも同じようなことを言っただじゃないですか」

アコードの中にまた沈黙が溜まり、 柏原はふたりの表情が見えないことにもどかしさを感じた。

「それにね、画像のレタッチなんて、どうして思いつくんですか？
わけもわからず開いたパソコンにあった画像ファイルを？ なぜ？」

柏原は窓を少し開けた。

冷たい空気が流れ込んできた。

虫が鳴いていた。

「それにね、ポンとワンタッチで画像を変えてしまうなんてこと、
できませんよ。手間はそれなりに大変なん……」

突然、上野が金切り声を出した。

「とぼけないで！ そんなの簡単じゃない！ レタッチソフトで開
けば簡単よ。あなたなら苦もなくできることだわ！」

少し間があつて、弓削が静かに言う。

「しかしですね、そんな画像ファイルをどうして見つけれらるん
です？ たまたま見つけれられるようなものですか？ タイトルにで
かかと住道での赤石さん、とか書いてあつたんですか？」

「ミステリっていうフォルダに入っているのよ！ 生駒くんから聞
いたわ。あなたは朱里から聞いていたんでしょ！」

「やれやれ。上野さん、今日はおかしいですよ。そのフォルダつ
てどこにあるんです？ すぐに見つかる場所？ デスクトップ？

それともマイドキュメント？」

「なにを言ってるのよ、Dディスクに決まっているじゃない！ す
ぐにわかる場所にあつたのよ！」

「ふーん。しかし僕はなにもしてないですよ。上野さん、悪いです
けどね。僕はそう言うしかありませんよ。さ、もういいかげんにこん
な話、やめましよう。冷静に考えたらばかばかしいでしょ。いくら
冗談だと言つても、だんだん不愉快になつてきますよ。それに朱里

さんが聞いてたら怒りますよ」

「冗談ですってえ！」

「うん。でしょ」

「いいえ！ 違う！ あなたがやったんでしょ！ 赤石さんの画像を変えたのは！」

「ねえ、上野さん、冗談だと言ってくださいよ。ほんとにしようのない人だな。僕がやったの一点張りだ。言つときますけど、僕の仕事ではレタッチソフトなんか触ったことがないから、やり方は知りませんよ」

「なんですって！ よく言うわよ！ 『デジカメの達人』で加工されていたのよ。あれは使いやすいつて、あなた、コナラ会るとき私に勧めていたじゃない！」

ふたりの言い合いはどこまでも続くかのようだ。

柳が、まだかというよう顔で柏原を振り返った。

柏原はもう少しというように手を上げて、柳の焦る気持ちを押さえた。

「でも、それで作り直した画像を、どうやってまたもとのドキュメントに戻すんです？」

「なんで、そんな！ わかっているくせに！ 戻す必要なんてないわ。どうせ目を引くためにやったんだから、画像のまま並べておけばいいのよ！」

「フー！ ですが、なぜ、それが僕だつてことになるんです？」

「さっきから何度も言ってるじゃない！ 朱里と赤石さんが会っているのを見ていたのはあなただし、普通なら、あの画像を見ても赤石さんだとはわからないわ。最初から知っていなくちゃ。そういうことよ！」

「ハア、なにか無理やりの理屈ですね」

弓削のシルエツトが初めてまともに上野に向いた。

突然、上野の頭が下がって視界から消えた。

柳の手がヘッドライトのスイッチへ伸びる。柏原があわててそれを制止する。

次の瞬間、上野が大きな動きで手を振り上げてシートにもたれた。両手がそのまま頭を抱え込むようにして何度も髪を後ろに撫で付けた。

聞こえてくるふたりの会話は、テンポが遅くなってきた。

上野はヒステリックになって弓削を追及し続けているが、効果をあげることができないでいた。

「もういい加減にしてよ！」

「なにがですか。こっちがそう言いたいですよ」

「弓削君、あなたね……」

「さっきから聞いていると、こういうことですか？ 朱里さんを殺した赤石さんが彼女の部屋に入り込んで、にせの遺書を書いた。そう考えた僕が、彼女のパソコンを自由にできる時間を利用して、画像の細工をしたと。そう言わせたいようだけど、なぜ僕がそんなことをしなくちゃいけないんですか」

「何度言わせるのよ……」

「……」

「あなたは朱里に特別な思いを持っていた。……昔のことだつて言わないでね。つい最近も、私はあなたと話をしながら感じたわ。朱里からも聞いたことがある。彼女の部屋で会ったこともあるんですよ。それも最近」

「……」

「一方、あなたは赤石さんを憎んでいた。朱里が赤石さんと……。あなたは、もし赤石さんが起訴されなかったとしても、不倫が明らかになれば家庭は崩壊するかもしれないし、会社での地位も棒に振

るかもしれないと考えた。それでも十分な復讐になる……」

「それ、本気で言ってるんですか？」

「……本気よ」

そう言った声は消え入りそうに小さかった。

「言ってることがむちゃくちゃですね。もうこんな話、やめましよう。ねえ、月世さん」

弓削がやさしく話しかける。

上野を名で呼んだ。

「あのブログのお誘いの手紙、僕にも来ていましたね。ブログを読んでいて、あの写真が赤石さんだとは知らなかったけど。僕はね、わかりましたよ。あれを最初から全部読んで。こんな話になる前にね。これは月世さんだってね」

「えっ……」

「その気になれば、最後まで読まなくても月世さんだとわかる。もう誰かが『はり重』でおごってもらっただろうと思って、連絡はしなかったけど。というか、電話通じなかったし」

「あ……」

「携帯の番号、知らなかったし。メールすればよかったですね。すみません」

「……」

「ちょっと思い切って言いますよ。聞いてくれますか。さっきも言いましたけど、僕は朱里さんのことが好きでした。仲間ですからね。月世さんも好きですよ。仲間だからってことだけじゃなくてね。そう、昔から」

弓削が窓を開けたようだ。

アコードの中にも虫の声が充満しているだろう。

「ねえ、こんなこと言うのはどうかなって思うけど、いくつになっても恋はしたいですね。でも、難しいですよね」

「……」

「ね、月世さん」

携帯電話を通して、弓削の静かな声が聞こえてくる。

「あなたは赤石さんが今も好きなんでしょう？　でも、その愛って……」

弓削が間をおいたが、またポツリを言葉を繋いだ。

「こんなことを聞いても、なんにもなりませんね……」

長い沈黙が続いた。

やがて上野のあつさりした声が聞こえてきた。いつもどおりの声を取り戻していた。

「弓削くん……。嫉妬に狂った女か。あーあ、やれやれ。……あなたは昔から変わらないわね。いつもやさしくて」

「生駒さんが聞いていたら怒りますよ。それは俺の専売特許だって」
「ハハ、そうね」

弓削が上野の肩に触れた。

「月世さんはいつも強がっていましたよ。自分が、自分がって。悪口じゃないですよ。僕にとってすばらしい先輩でしたし、仕事に対するそういう臨み方、憧れでしたよ。そしていつも、僕らを見守ってくれていましたね。お目付け役というより、もっと温かい目で」

上野の声はまたよく聞き取れなくなった。

「ごめんね」

弓削の指が上野の頬を撫でていた。

「泣かないでください。らしくないなあ。月世さんの気持ちは、みんなよくわかっていますよ」

「そうよね……、私……。ごめんね。せつかく……、こんなに夜景のきれいなところへ連れて来てくれたのに」

柏原は柳に目配せをした。

そして声に出して、行ってください、といった。

柳が無線を使った。

柳がヘッドライトを点けようとするのを、柏原はとめた。柳が、そうですね、とドアを開けた。

部下達がアコードを大きく取り囲むのを待ち、ゆっくりと近づいていった。

そして窓を叩く。

ガラスがゆっくり下がった。

「警察です。上野月世さんですね。そちらは弓削俊美さんですね。ちよっとお聞きしたいことがあるんですが」

警察手帳を見せる。

「中道朱里さんの転落死の件で、話し合われていたようですね。私にもお聞かせ願えませんか。署までご足労いただけるとありがたいんですが」

36 エピローグのはじめ

上野と弓削は、それぞれ別のパトカーに乗せられた。ふたりを見つめる柏原の顔が、離れたところにいる生駒にも見えた。

目が合った。柏原が無表情に見つめ返してきた。

生駒は車から出なかった。出ることができなかった。

パトカーが脇を通りすぎるとき、上野が生駒に気づいた。少し笑ったように見えた。

生駒は弓削と繋がったままの携帯電話の通話を切った。

その夜のうちに上野は逮捕された。

警察署で貸してもらった車椅子に乗った柏原を、弓削が押してきた。

「終わった……」

それには応えず、生駒は柏原が車に移乗するのを手伝った。

弓削が車椅子を署へ返しに行っている間も、生駒と優は後部座席に座った柏原を見下ろして黙って立っていた。

弓削が戻ってきたところで、ようやく生駒は口を開いた。

声が震えないように祈りながら。

「さ、どうする？ 俺は柏原を天王寺まで送っていくけど」

「えっ、それはないでしょ」

弓削の言葉に柏原が頷いた。

「じゃ、そうしよう」

弓削が自分のアコードに乗り込んだ。

生駒は柏原に聞いた。

「ほかのみんなも呼んだ方がいいか」

「もう呼んである。佐藤夫妻と蛇草さんが来る。竹見沢さんや赤石は断ってきたが、いずれ俺から話しておく」

オルカに帰り着いたのは、午前二時を回っていた。

途中のコンビニエンスストアで買ったおにぎりやカップ麺を前にしても、積極的に手を出そうとする者はいなかった。

柏原も定位置に納まったものの、手を動かす気は全くないようだった。

「さあ、始めてくれ」

佐藤が促した。

柏原はまだ目をつぶっている。

「しんどいのか？ なんなら今日は止めておこうか」

生駒の言葉に、柏原が首を横に振った。

「いや、大丈夫。しかし、くたびれた。まず生駒から話してくれ」

生駒は、とても自分からは話せないと思った。しかし、佐藤と手を握り合っている悄然とした恵の姿を見て、このままでは返せないと思った。

真相を聞けばいたたまれない気分になるだろうが、聞かずとも、悶々とした夜を過ごすことになるのは同じことだろう。

「了解。無理するなよ。それじゃ、どこから話そう。いや、質問してくれた方が手っ取り早いかな。蛇草さん、どう？」

「ああ。まずは遺書の件か」

蛇草の疑問に答えながら、生駒はここ数週間のことを思い出して、いよいよ気が滅入った。

仲間を疑った。

結果的にその最初の思いつきが正しかったわけだが、まずは竹見沢、次に赤石、そして一瞬ではあったが弓削まで疑った。

やりきれなさと、すまなさで心は一杯だった。

これらの間違った推理は、上野が朱里を突き落とすという事件を語る上で、あえて話す必要はなかった。三人にはすでに心の底から謝っていた。

しかし、改めて経過を話すとなると、自分の浅はかな考え違いから出た過ちを都合よく避けて通ることはできなかった。

正直に説明することが礼儀だし、大げさに言えば友情の証だとも思った。

生駒は淡々とした口調で話を進めた。

……上野さんは、赤石とミナミかどこかで夕食の約束をしてから作戦を修正した。

赤石がひとりで鳥取に行く予定があることを聞いたんだ。で、上野さんは自分も一緒に行きたいからとデートの約束を変えようとし、赤石は了解した。

そのとき上野さんは、奥さんには大峰方面へ山登りに行くという口実を使うようにと、赤石をそそのかした。これを赤石は正直に実行した。山登りはいつもしていることなので、赤石は疑いもしなかった。

しかも彼は、運悪く、以前登ったことのある行者還岳という山の名を奥さんに告げてしまった。

一方、上野さんは朱里を山登りに誘っておいて、下準備のために行者還岳に登った。その正確な日付は知らないけど。

そしてブログの画像に手を加えた。

作戦か……、と佐藤が唸った。

「それはおまえ達の想像やな？」と、蛇草。
しかし、生駒が上野月世をさん付けで呼び、赤石を呼び捨てにし
ても、気にする者はいなかった。

……そう。でも大きくは間違っではないと思う。

上野さんは三日の朝早く、待ち合わせ場所の京橋駅に現れた。

しかし、体調がよくないからとかなんとか、理由をつけて境港に
は行けないと赤石に告げた。

目的とすれば、赤石がひとりで鳥取に行くことを確認し、フォト
レタッチソフトの『デジカメの達人』を借りさえすればいい。

自分は画像加工なんてできない、というポーズのために。

ちなみに例の画像が加工されたのは、更新日を頼りにするとその
前の晩、八月二日の夜……。

赤石の方は、もともとひとりで境港に行くつもりだったから、上
野さんのドタキャンがあっても、予定どおり鳥取に向かった。

それを見送った上野さんは、今度は朱里との待ち合わせ場所であ
る住道に移動……。

「……朱里を誘って行者還岳に行く約束。うまくいけばひとりで行
動する赤石に疑いを向けられる」

「ちよつと待ってくれ。わからんな。疑いを向けるって、どうい
うことや？」

蛇草が解説を求める。

恵は目の周りをさすって、涙をこらえている。

それまで目をつぶって聞いていた柏原が口を開いた。

……いろんな事柄が、赤石に集中していた。

つまり、チーズの件などという些細なことから始まって、現場は
赤石も行ったことのある行者還岳。遺書の中では朱里の年令がひと
つ少ないが、そんな勘違いをしそうなのも赤石。極めつけはブログ

の中の画像の人物であること。

とにかく、赤石は怪しかった。

しかし、これらは犯人が仕組んだことなんだ。

生駒が『幸田さん』と呼んでいたブログ。

あれは、正真正銘、僕たちに向けて、自分に気づいて欲しいという意図のものだった。

結局、正解のメールが来ないまま、上野さんはそのブログを閉鎖した。

しかし、誰も気がつかなかったことで、朱里を殺したときに赤石に疑いを向けさせる仕掛けに使える、ということを感じていたんだ。赤石の画像に、あえて細工をすることで。

「赤石はそのブログの正解を知っていたのか？　というか、自分の後姿だと知っていたのか？　それに、本当に誰も正解者はいなかったのか？」

蛇草の質問に、柏原が短く答える。

「いや、しかし赤石は知らなかっただろう」

蛇草が食い下がる。

「でも、ブログの内容がそんなに難しくて嘘のかたまりやったら、上野に絞り込めないわけやろ？」

「そのとおり。推論でしかない。しかし嘘のかたまり、ということでもない。上野さんは、本気でそのゲームをしていたんだ」

柏原が弓削を見た。

弓削が首を傾げてみせ、

「実は、僕はわかりましたよ。最後にはね」と、言いにくそうに、しかしきっぱりといった。

「どうしてわかったんだ？」

佐藤がちよつと驚いたような声を出した。

「住道に住んでいますから」

短い応えに、柏原がにこりとする。

「でも、朱里ではなくて上野だということがなぜわかる？」

佐藤の追及に、消去法ですよ、と言いかけた弓削を柏原が遮った。

「わかる人もいる、ということ」

そう言つて、佐藤に笑いかけた。

「なるほど」

佐藤もそれ以上の追及はしなかった。

弓削が、朱里さんの部屋には入ったことがありますから、という言葉を読み込んだことがわかったからだろう。

「ブログは上野のものに間違いないということだな。しかし、だからといって、上野が犯人だということにはならないんじゃないか」

佐藤の疑問に、柏原が微妙な笑みをたたえたまま応えた。

「そう。根拠はない。どうやら上野さんしかいないというだけで」

「画像の貼り付けが簡単にできることなら、ブログの存在を知っていたやつなら誰にでも可能性がある。例えば弓削かもしれないわけだ」

「そうですね。生駒さんなんかひどいんです。僕も疑われていたんですよ」

弓削が陽気な声を出した。

生駒は、ごめんといいて説明を始めた。

赤石が犯人じゃないということになったとき、怪しいのは上野さんと弓削しか残っていなかった。

まさかまさか、上野さんが犯人だとは思ってなかったから、俺はてっきり、弓削かと。

ほら、自分が嫌疑の外にいるために、自ら通報するというありがちな話。

自殺説をいの一番に疑問視していたし、ずっと俺たちの動きを気にしていた。

「でも、それでよかったでしょ」と、にこりとする弓削。

「ああ、そのとおり。でもあのときは、弓削に朱里を殺す動機があるのかもしれない、と真剣に考えた」

「ひどいよなあ。あるわけないのに」

「恋の病とか」

「あのねえ。でも、生駒さん、それを言っちゃだめですよ」

「そうやな」

ドライブウェイでの弓削と上野の会話を思い出して、生駒は心の中で謝った。

しかし、よく考えると、弓削が犯人だというのは見当違い、ということがわかる。

赤石を陥れる理由がないから。

弓削は会社をランクアップして、このたびめでたく株式会社を設立した。そのメインの取引銀行が千日銀行。もちろん担当は赤石。赤石に骨を折ってもらって相当な融資も受けたらしい。銀行の貸し渋りが社会問題化しているご時世に。ちっぽけなデザイン事務所に大の地銀がしっかり融資。

つまり、弓削にとって赤石は良く言えば恩人、悪く言えば金づる。大切な取引銀行の担当者の赤石に罪を着せても、たとえ困らせるだけだったとしても、弓削にとってはなんの得にもならない。商売に差し障りがあるだけで。

生駒の説明に、弓削がにこやかに頷いている。

「俺たちはしかたなく上野さんに直接聞いてみることにした。画像が変更されているが、どう思ってた」

恵の目から涙がこぼれ落ちていた。声をあげずに静かに泣いていた。

佐藤は恵の肩に手を掛け、あやすように小さく叩いていた。

蛇草は宙を睨んでいたが、自分の頭を両手で掴み、二の腕で顔を

隠すようにしてゆっくりと目を閉じた。

37 エピローグ

「俺はその時点で、あることに気づいていた。上野さんが朱里と高校時代からの知り合いじゃないかと」

「ん？ 生駒と朱里は高校の同級生じゃないのか？」

「そう。今言ったのは、朱里が恵比寿高校に転校して来る前の高校、ということ。アーバプランにいたとき、俺は朱里の同級生として、みんなからある種の保護者扱いをされていたよな。お目付け役みたいな」

「ああ」

「上野さんがあるとき、私もそうなんだけどな、と言ったことがあるんです。俺はそれを思い出して、ピンと来た。朱里が前の高校にいたときの写真。吹奏楽クラブの集合写真。クラリネットを持つている女の子達が数人写っていた。朱里の隣に写っていた子。上野さんにそっくりで、イニシャルはTJだった」

「へえ！ でも、だからといって……」

「そう。きっかけはそれだけのこと。俺たちは、上野さん自身が、俺たちに思いもつかない新しいヒントをくれることに一縷の望みを繫いだ」

いつのまにか柏原がチェイサーを用意してくれていた。

グラスについた水滴が流れ、グラスの下に溜まっていた。

生駒の言葉は途切れがちになった。

「あるいは、もしも……上野さんが犯人だとしたら……、告白してくれることを……」

「そんな……」と、恵の口から言葉がこぼれた。

「しかし、上野さんは、画像のことについては知らないと言った」

「上野なら朱里の部屋に忍び込めた……」と、蛇草が唸った。

「そう」

「でも、上野の住まいは住道じゃなくて、城東区。ブログの話と矛盾する」

生駒は鍵を取り出した。

「これは朱里の部屋にあった鍵です。でも、朱里の部屋の鍵じゃないし、事務所の鍵でもない」

久しぶりに恵が目を上げて、生駒の手にある鍵を見つめた。

「朱里の部屋に入った犯人は合鍵を持っていた。合鍵の交換をするくらい仲がよかったということ。ただ、上野さんの部屋にも合わなかった。しかし上野さんのアパートは空室だらけ。春に住道に引っ越しして、数カ月後に戻って来るということは十分可能だった。不動産屋に確かめたわけじゃないけど。これから警察が調べるでしょう。それから、ごめん」

「ん？」

「白状すると、弓削の部屋も確かめさせてもらった。奥さんのいる自宅の方じゃなくて、事務所の方。これも合わなかったけど」

沈黙が流れた。

「それで、生駒山へ……」

佐藤がそう言って、急に元気がなくなった弓削に目をやる。

畏か……、と蛇草がつぶやいた。

柏原が毅然とした口調で言った。

「そう。はっきり言ってしまえば畏。僕が考えた。上野さんには弓削が怪しいから追求してくれといい、弓削には上野さんの尻尾を掴めと頼んだ」

「そんな……」

「僕らの推理は、とても万全という代物ではなかった。間違いないとは思いつつも、決め手がない。上野さんが話してくれるお膳立てが必要だった」

「僕に話をさせてください」

弓削が口を挟んだ。

「柏原さん、自分を責めないでください。蛇草さん、畏というのは、ちよつと違います。上野さんは、誰かに打ち明け話をしたかったんです。つまり、その……、好きな人に。うまく言えないけど、今度の事件の背景となったあの人の想いというか……、いてもたってもいられなかった気持ちを」

「好きな人……」と、恵がつぶやいた。

「はい、そうです。好きな人です。それは、赤石さんであり、佐藤さんであり、生駒さんであり、蛇草さんであり、僕であり……、つまりコナラ会のみんなでした」

弓削の目には光るものがあつた。

「弓削……」

上野さんが誰を好きだったのか、ということはあまり重要ではないと思います。

あの人は寂しかった。

上野さんのブログ、あれ、どう思われますか？ 大人がなぜあんな遊びをしますか？

いつも寂しかったんですよ。寂しいっていうより、彼女にとって、もつと切羽詰つたものだったのかもしれない。

なんていうか、上野さんの存在に、僕たちはもつと敬意を払うべきだったと思うんです。

僕は、いや、たぶん皆さんも彼女の気持ちを、実は感じていたでしょう。十年、二十年にもわたつてです。

今思えば、時々上野さんは自分の気持ちをメッセージとして発信していたと思います。それは朱里さんへの競争心というニュアンスの言葉がほとんどでした。

しかし、僕たちはそれを正確に受け止めようとはしてこなかったんです。

弓削の声は震えていた。

恵は涙をもつこらえてはいなかった。

僕は……、申し訳なかった、と心から思います。

謝りたい気持ちです。

朱里さんを突き落としたことは決して許されることはありません。

でも僕は、今度の件を、どうしても上野さん自身の口から話して欲しかった。その背景も含めて。

そして、もっと開けっぴろげに、僕たちを非難して欲しかった。

彼女を半ば無視し、傷つけ続けた僕らに、その行いを気づかせるような言葉で。彼女自身の言葉で。

なんていうか……、僕はその場を作りたかったんです。

弓削は言葉を切って、きつく口を引き結んだ。

弓削の言葉がみんなの胸に浸透していく。

「僕は始めて彼女を、月世さんと呼びました。そしたら……、上野さん……、月世さん、体の力がすうと抜けて、穏やかな顔になって、目から……」

蛇草がすつと背筋を伸ばし、天井を仰いだ。

「そうか……。俺たちはいつも朱里、朱里と……」

佐藤が弓削の背中をぽんと叩き、おまえの分は俺がおこってやる、柏原、なんか出せ、と言った。

「で、生駒山ではどうなった？」

生駒は肩に入っていた力が抜けていくのを感じ、意識的に朗らかな調子で蛇草の問いに答えた。

「揚げ足をとるような、そんなことは重要やなかった。上野さんは俺達の作戦にきつと気づいていたんや。俺達も、それをある程度は見越していた。弓削になら彼女は話してくれるんやないかと。でも彼女は、弓削に対しても、開けっぴろげには話すことができなかった。最後まで弱さを見せられなかったんや」

「そうだったのか……」

「あの人らしいと思うよ」

「で、結局は……」

「こういう言い方を許してもらえば、決定打は、上野さんが画像のレタッチソフトがデジカメの達人だと断言したこと。ちなみに、朱里のパソコンに入っていたレタッチソフトはフォトショップ。俺や弓削が使うのもそう。そしてもう一点。ブログのフォルダがデスクトップやマイドキュメントじゃなく、Dディスクに入っていたことを知っていたこと……」

「それだけ……」

「あまりに……」

生駒は、つまらなすぎるとい言葉を読み込んだ。

蛇草もがっくりと肩を落としてしまった。

恵の涙声が静かなオルカに流れた。

「かわいそうに。朱里さんも上野さんも」

佐藤が肩を抱いてやった。

「でも……、でも、上野さんは自分らしい言葉で、締めくくったんでしょね」

「ごめんね、せっかく、こんなに夜景のきれいなところへ連れて来てくれたのに」

そう言ったんだと、生駒は潤んできた目を大きく見開いて天井を

仰いだ。

後日、面会に行った柏原に上野月世が語った。

中道さんに常に対抗心がありました。

というより、自分が常に彼女より劣っていると見られていることに、我慢がなかったのです。

その気持ちは誠光学園高校時代でのクラリネットから始まりました。彼女が難関大学に進んだことを聞いたときも、心にさざなみが立ちました。

アーバプランに彼女が出向して来たとき、私は彼女にすぐに気がつきましたが、彼女は私が高校の同級生だと気がつきませんでした。そして今だに気がついていないのです。

アーバプランを辞めて、個人的に付き合うようになって、彼女への対抗心はいつしか懐かしい思い出となり、一緒に旅行したりするようになりました。仲良くなって。

周りにはそう見えていたことでしょう。私もそうだと思っています。

しかし、今思えば、私は仲良くすることに努力していたのかもしれませんが。中道さんと自分とを比較してしまう、習慣ともいうべき自分の心の弱さを克服したかったのだと思います。

何回目かのコナラ会でのことでした。

赤石さんに夕食に誘われたのです。

お酒に盛り上がった勢いだったのですが、私は彼に在職当時から好意を持っていましたから、喜んで会いました。

でも、新婚生活が早々に破綻していた私に比べて、彼は奥さんを愛していました。私が少し寂しい気持ちになったことは事実です。彼と会ったのはその一度きりでした。

今年の春、別れた夫と借りたアパートから引越すつもりでいました。

どうせならばと思って、弓削くんや中道さんのいる住道に移りました。

弓削くんは在職当時から、いつも私のことを気遣ってくれるやさしい人でした。赤石さんがいなければ彼に想いを寄せていたかもしれません。

ですが、そうした私の弓削くんへの関心が実を結ぶことはありませんでした。弓削くんは奥さんを愛しているし、中道さんともフランクに付き合っている。

そのことが、私の心にブレーキをかけていました。住道に引越したことを中道さんには言えても、弓削くんには言えませんでした。

どうしてなのか、今もわかりません。

そして弓削くんの事務所と、中道さんの家がとても近いことにも気がつきました。

そんなつまらないことにさえ、私は少し落ちこみました。

それが嫉妬であることに気がついて恥ずかしくなった私は、自分の気持ちを封印しようと思いました。

しかし同時に、心の中にくすぶっていた中道さんへの対抗心が、まだ消えていなかったことにも気がついてしまったのです。

そんなとき、ブログ遊びを思いついたのです。

竹見沢さんからホームページの楽しさを聞かされて触発されたことは言うまでもありません。

ばかなことをしたものです。

弓削くんが一番に連絡をくれるだろうという、淡い期待を抱いていました。

内容が、どうこうというより、早く私に気づいて欲しい、ただそ

れだけでした。

ところがそんなある日、住道駅で中道さんと赤石さんを見かけてしまったのです。

びっくりしました。

ふたりは親しそうでした。

付き合っているもの同士、ということがすぐにわかりました。

中道さんが弓削くんばかりか、赤石さんも自分のものになっていると感じました。

思わず写真を撮りました。こそこそと隠れて。

中道さんが私に見せびらかしている。

私はそう感じました。悲しい嫉妬は怨念に変わりました。

ところであのブログは、中道さんには最初から教えていました。彼女は、うまいうまいと言っておもしろがっていましたが、そこに私は軽蔑の響きを感じました。

もちろん、あの遊びの馬鹿さ加減を、私自身がわかっていましたから。

寂しさを紛らわすだけの、浅はかで情けないブログ。

それでもそれを続けようとした私は、すでに自分を見失っていたのでしよう。

そしてその延長に、安手のミステリーを書くようなつもりで稚拙な仕掛けをちりばめ、大切な仲間を殺し、友情を裏切ってしまった私がありました。

こんな私を誰も許してはくれないでしょう。

行者還岳を選んだのは、赤石さんのホームページを見て興味を持ち、以前登ったことがあったからです。

遺書に生駒くんの名を書いたのは、私の心のどこかに、殺人犯で

ある私を探して欲しいという気持ちがあったからなのでしょう。

オープンカフェを包む空気には、キンモクセイのすがすがしい香りが含まれていた。

暖かな日差しを浴びて、生駒と優はホットケーキにシロップを塗りたくっていた。

「ねえ、ノブ。あの水霊の巫女のミステリー、上野さんは朱里さんのパソコンから削除しなかったんやね」

「犯行を隠すという意味では、上野さんはあれを削除する必要はなかった。伯爵が自分の娘を引き落としたように、上野さんが行者還岳の崖で、事前に細工しておいたロープで朱里を引っ張り落としたとしても、そして、コティとガリーと同じように、朱里と上野さんが同じ年だったとしても」

「そうやんねえ。でも、行者還岳の登り口の地名は狼横手。四風亭がかつて建っていたのも狼横手。偶然の一致やと思う?」

「さあな」

「上野さんは大峰に実際にある地名を拝借した。私も、ただそれだけのことやと思う」

「ん? ちょっと待て。あれは朱里の作……」

「あれ? 言ってなかった? ごめん」

「違うのか?」

「朱里さんの手荷物には、登山用地図がなかった。朱里さんは狼横手って地名、知らなかったんやないかな。それにさ、なんてたってミステリ倶楽部の各作品には、作者と読者が意見のやりとりをする掲示板があつてさ。事件の後でも、水霊の巫女の作者は返事を書いてるよ。もう書けないけどね」

「え! まさか、上野さんの?」

「なぜ、まさかなん? それって上野さん、可愛いそうやん」

「う、そうか……」

「いい作品書けるのに。上野さんはあの作品ができたとき、朱里さんにも原稿を送って見せたんじゃないかな。ブログも見せてたんやから」

「あれは上野さんのミステリーやったのか……」

「たぶん。筆名はユーアイ、UIだしね」

「おい」

「私も間違っことはあるよ。JULIYのUIじゃなかった。UIとKOTY。足すとTUKIYO。違うかな？ それにガリーのGULIYは並べ替えるとGIULY。朱里。掃除婦のメグは恵さん。たぶんノブはFINECOLTの若い馬で、柏原さんはそのものずばりオルカバ。赤石さんは剛志だからWILLSTRONG」

「あ、そうか。弓削はスチムやといってたな」

「きつとそう」

「あの作品を書きながら、上野さんは厭な子コティに自分を、いい子のガリーに朱里さんをなぞらえていたんやね。恵さんのメグもいい子」

「なんとも……」

「彼女、常にそんな気持ちがあつたんやね。そこまで自分を苛めなくてもいいのに」

「悲しいな」

「上野さんも、自分のミステリー作品が、真相解明するんだっていうノブの意欲に火を灯し続けることになるとは、思わなかったやろうね。もしかして、それも計算ずくで、朱里さんのパソコンから削除しなかったんやとしたら、すごいけど」

生駒は返す言葉がなかった。

「それにしても、これでよかったのかなあ。上野さん、柏原さんが面会したとき、サッパリした感じやったんでしょ？」

「よかったなんて、これっぽっちも言えないけどな。でも、弓削と夜景を見ることができて、うれしかったって」

「食事と一緒にすればよかったのにね」

「とても喉を通らなかつたんやる。ふたりとも」

「あのブログ、弓削さんが分つたよって、上野さんに連絡していたら、今回のこと、どうなつてたかな」

生駒はこれにも返す言葉は出てこなかった。

ホットケーキにナイフを入れた。

「さ、冷めないうちに食べよ」

「うん」

生駒は、自分がホームページやブログをやってみようという氣に、もう絶対にならないだろうと思った。

「上野月世さん……。ね、ノブは朱里さんや恵さんは名前で呼んで、上野さんはなぜ上野さんなん？」

「ん？ なぜって……年上やから……かな」

「そう？ じゃ、結婚したときの名前、思い出してあげた？」

「いや……」

「みんな、なんだかなあ、って感じ」

「そつやなあ、悪いことしたよなあ」

「嫉妬かあ」

「長い間付き合つていても、そして仲良く見えていても、周りからは見えないなにかが積もっている、ということがあるんやなあ」

「怖いよね。中途半端な期間が長すぎるってことは」

「はあ？」

「ううん、なんでもないよ。それでさ、あのkouda 7はどういう意味やつたって？」

「まだ覚えてたんか。知らん」

「あれはさ、『doukana』の並べ替え。弓削さんの口癖。ちがうかな」

「……そうかもな」

生駒の口から、思わず口笛が流れ出た。

「アーナータニ、サヨーナラツテ、イエルーノハ、キヨーウダケ」
ちっ、柏原に毒された、と生駒は忌々しく思った。

優が生駒の二の腕に暖かい手を乗せた。

「ステイング。朱里さんの身代わりでもいいから、私を誘ってくれたらよかったのに」

了

37 エピローグ（後書き）

最後までお読みくださり、ありがとうございます！
いかがでしたか？

拍子抜けの結末でごめんなさい。

（友人たちには、お前には女の気持ちがわかるかい！といわれます）
ただ、私にとって、この作品は記念作です。

というのも、かれこれ10年ほど前、私が初めて書いた長編ミステリーであり、また角川書店のNEXT賞に応募して、ありがたくもCランクを頂戴した作品です。

Cランクということで舞い上がってしまい、それから長編ミステリーを書いていくきっかけになったことは言うまでもありません。一向に上達しないのですが、自分の書いたものを読んでもらって、少しでも楽しんでもらえることが何よりうれしいことだと思います。なお、ちなみにこの作中のグランプリを取ったミステリー作品というのは、このサイトに別途掲載させていただいている「水霊の巫女」という短編です。できましたらコチラもお読みくださいませ。

ありがとうございました。

感想などいただけると、幸甚の至りでございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7958j/>

ノブ、知ってたん？

2011年9月20日03時24分発行